

九 柿 賣

二人 目代 長袴、小き刀  
柿賣 半袴、柿を持つ、

目代一國司の代官  
富貴一ふうきを音便にてふつきと云ふ  
萬雜公事を免さう一年貢諸役を免除す也  
札なり一札の體裁  
へぐり谷一平群谷か

▲目代 罷出でたるは所の目代。富貴につき、新市を立てうと存ずる。何にはよるまい、一の棚を飾つたるものは、萬雜公事を免さうと存ずる。まづ急いで高札を揚げませう。ここかどが好ささうにござる。え、一段札なり好ささうにござる。まづ戻りませう。▲柿賣 罷出でたるは、丹波の國へぐり谷の柿賣でござる。都富貴につき、新市をお立てなされるとうけ給はつてござる。まづそろく參らう。今はかやうの物を商ひまするとも、一の棚を飾り、萬雜公事を許され、末々は、金銀などを商ふやうに致したいと存ずる。とかう申すうちに、市場はこれさうにござる。扱もく、末繁昌の市は、弓の鉾形に立つと申すが、あれからこれへ、これからあれへ、箕の手なりに立ちてござる。まづ、市頭へ參らう。柿はく。▲目代 やれ扱、市も嬉しいことぢやわ。賑かさうにござる。まづ見舞

目利一鑑定  
あんでない事一勿論  
さつまわう一未詳  
庖丁人一料理番  
だんないか一大事無いか

はうと存ずる。はあ、柿賣が居るぞ。やい其處な者。▲柿賣 何でござるぞ。▲目代 そりや何ぢや。▲柿賣 お見やつたがよい。▲目代 やい其處な者、身をば知つたか。▲柿賣 いや、そなたは知らぬわいの。▲目代 目利をせい。▲柿賣 某は柿賣こそすれ、遂に人の目利をして見たことがござらぬ。▲目代 厭でもさする、應でもさする。▲柿賣 はて、其處な人は、無理な事を言やる人ぢや。して、せねばならぬか。▲目代 おんでない事。▲柿賣 したらば、あちら向きやつす。なう見たわ。▲目代 何と見たぞ。▲柿賣 そなたはさつまわうであらうぞ。▲目代 あいや、さうではないわ、まづと見直せ。▲柿賣 したら、其處で一つまはらせませ。おう、見たわ。▲目代 何と見たぞ。▲柿賣 常に袴を離さぬ人ぢやほどに、庖丁人か、碁打か、將碁さしかであらう。▲目代 いや、これでもないわい。▲柿賣 おう、したらば、知らぬ。▲目代 所の目代ぢやが、知らぬか。▲柿賣 え、目代様でござりまするか。これを一つあがりましたよ。▲目代 目代などと云ふ者が、市や町やなどで、柿など食ふものではない。▲柿賣 いや、かやうの物はあがりまして、苦しうござりませぬ。▲目代 だんないか。一つ食はうに。やい其處

いくせーちくせの訛敷  
代り代金

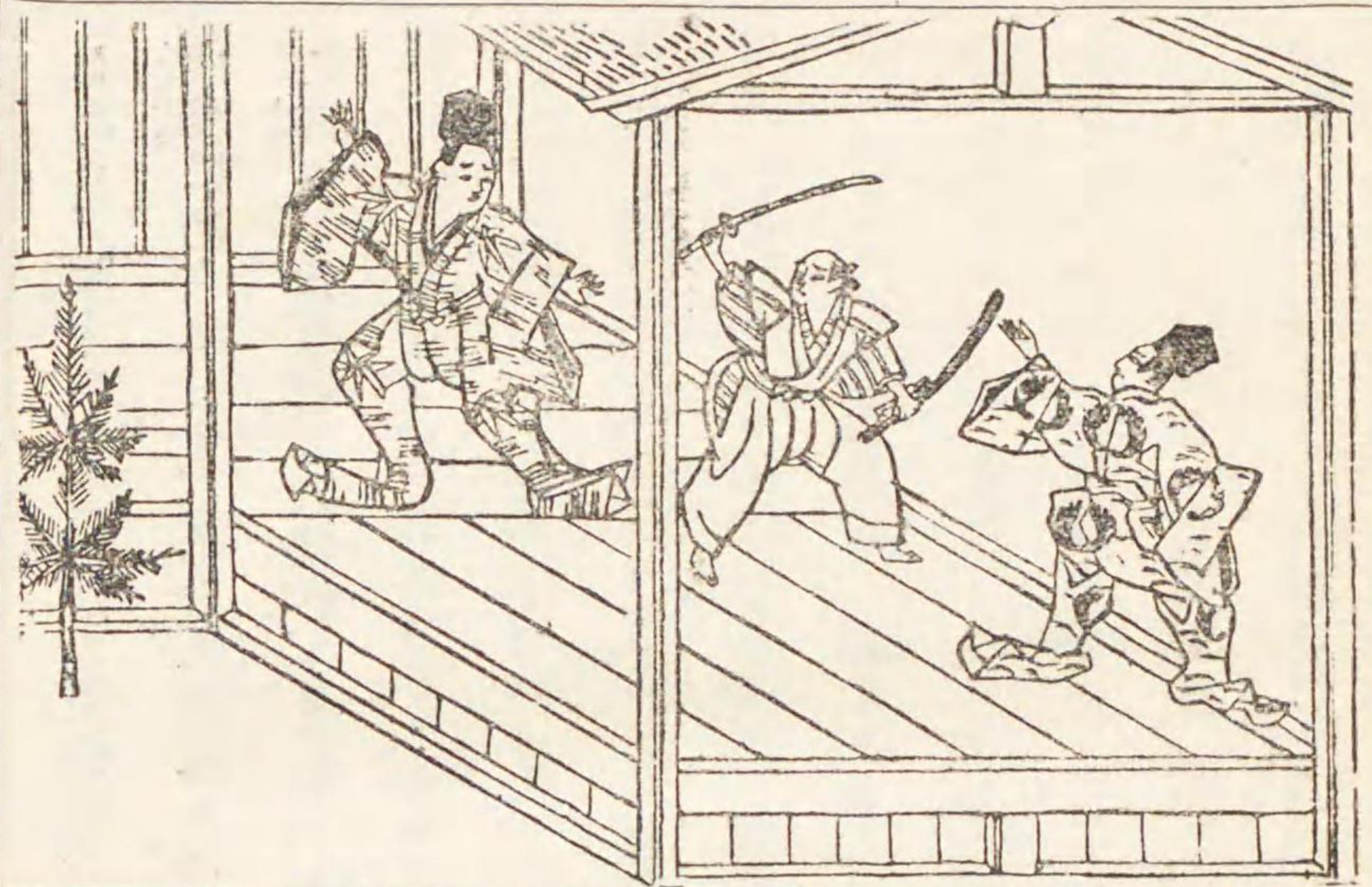
澁柿食てからは云々―當時の諺なり澁柿を食へば口笛の吹けぬを云ふ  
かへせや―以下かへりけり迄曲にかゝるる  
合せ柿―餅柿也

おはす或はさはずとも云ふ  
きまぶり―木守りの訛也菓物を取りたる枝にわざと幾つか残し置くさすれば翌年多く生ると云ふ  
かしらをかきの―頭を掻くと言掛け申に櫛を掛く

な者、見かけよりも旨い柿ぢやわい。その前な柿をいくせ。も一つ食て見よに。▲柿賣え、これは、は、代がいりまする。▲目代は、代がいれば、如何ほどなりともやらう。▲柿賣はあ、したらば、あがりませう。▲目代こりやおのれ、甘いかよ。▲柿賣はあ、願の離れるほど、甘うござる。▲目代こよな奴、離れざ、おのれ、きかんどよ。▲柿賣はて、甘うござりまする。▲目代やい其處な奴、澁うて食はれぬわ。▲柿賣はて、ひよんな事を仰しやれまする。甘うござりませうかの。▲目代したらば、おのれ食うて見よ。▲柿賣どれ、いくさつしやりませ。甘い、あんまり甘うて、物が云はれませぬ。▲目代はて憎いことをぬかに澁柿食てからは、うそのふかれぬものぢや。急いでうそをふけ。▲柿賣はあ。▲目代なぜにふかぬぞ。▲柿賣待たしやれませう。吹きまするわいの。▲目代急いで吹け。▲柿賣あんまり甘うて、うそも吹かれませぬ。▲目代憎い奴の。おのれのやうな奴は、柿をかうしたがよい。▲柿賣やい、今の男、柿返せ。節かへせや、合せ柿と、呼ばはれどく、取残されし、きまぶりの、古の人丸は、柿のもとに住みながら、歌を案ぜし、そらうそふかせ、ため

しあり。腹立ちや。わがうその吹かれぬ口をかきむしり、後悔しつる、かしらをかきの、串柿にあらねども、拾ひ入れたる柿を持ち、我が家をさして、かへりけりく。なうそこ許へ、かきめされ候へ。

北野参一 天満宮参詣



十二人大名

右京 素襖、立烏帽子、太刀を持つ  
左京 素襖、立烏帽子  
下京の者 半袴

▲左京 罷出でたるは隠れもない大名。さるお方と、北野参を致そと、約束を致してござる。まづそろそろ参り、誘はうと存ずる。いや、程なうこれぞござる。内にござるか。▲右京 えい、ことな、何と思つて、お出でござるぞ。▲左京 内々、約束を致した北野へ参りませう。▲右京 まことにさうでござる。まづ、這入らつしやれい。▲左京 いやまづ参りませう。▲右京 したらば、某も参りませう。して、こ

作病一假病  
供にうせなんで  
一うせは参るを  
卑しく云ふ

廿五日一 天満宮  
の縁日也

これでもせまい  
か一刀に手をか  
けなどして嚇す  
也

なたは、人を連れさつしやれぬか。▲左京 作病を起し居つて、供にうせなんでござる。▲右京 なる、某が者も内に居らず、何と致したものでござるぞ。▲左京 いや、思ひ付けました。道へ出ましたら、如何様な者も、とらまへて、無理に供に致さう。▲右京 これが一段ようござる。▲下京の者 罷出でたるは、下京邊の者でござる。今日は廿五日、北野へ参らうと存ずる。まづそろそろ参る。▲左京 なる、あれをごろんちやつたか。似合はしさうな奴が通る。彼奴を供に連れうと存ずる。▲右京 一段でござる。▲左京 やい。▲下京者 此方の事でござりまするか。▲左京 おんでない事。▲下京者 何の御用でござりまするか。▲左京 して、そちは、どれからどれへ行くぞ。▲下京者 北野へ参りまする。▲左京 一段の事ぢや。某も参る程に、同道致そ。▲下京者 いや、お侍と私は、似合ひませぬ。先へ参りまする。▲左京 確と供をせまいか。これでもせまいか。▲下京者 あい、お供致しませう。▲左京 いや、かやうに致したは、戯事ぢや。さあ、おぢやれ。▲下京者 はあ、参りまする。▲左京 なる、右京殿、こなたの持たつしやつた太刀を、彼奴に持たさつしやれい。▲右京 おう、まこと

はいてうせうー  
佩いて行け也

ものが違はうぞ  
一町人が怒り出  
せる也  
やい危いー町人  
が刀を抜いて大  
名に手向へば也  
つくばうてー蹲  
ること  
町太郎ーたゝ町  
人を呼べる名

に、これを提けて来てくりやれ。▲下京者 畏つてござる。▲右京来い。やい、おのれは、それは油筒を提けたやうに、何とした持ちやうを爲るぞ。はいてうせう。▲下京者はあ。▲右京やい、がた、云ふと思へば、まことに、脛にはいてうせをる。▲下京者は、かうでござりまするか。▲右京 持ちやうを知らずば、をすやう。金の太刀は、右の手にさしあけて持つものぢややい。▲下京者 かうでござりまするか。▲右京 おう、さうよく。来い。▲下京者 やれ扱、にくい事を致する。二人の奴等、がつき逃すまいぞ。▲右京左京はて扱危い。これは何事をするぞ。▲下京者 おのれが、町人ぢやと思つて、なぶつたと、ものが違はうぞ。▲右京左京 やい、危い。何をするぞいやい。▲下京者 やい、えい、お大名の、両方につくばうて居るなりを見れば、そのまよたど、雞のやうな。其所で蹴合ふ真似をせよ。この太刀を取らせうぞ。▲右京 やい、其處な町太郎、大名が、鶏の真似などをするものではない。▲下京者 して、定せまいか。▲左京 はて、右京殿、さつしやれいの。▲下京者 急いでせう。▲右京左京 あ、くわつく、くわつく、くわつく、くわつく、右京殿、扱も、好

あきやがりこぼ  
しー玩具の起上  
小法師也  
京にー云々ー  
此の小歌曲がが

すき慰ー好き慰  
の誤歟  
よさりのほしを  
とれー宵の星を  
取れ、欲しを星  
に掛く

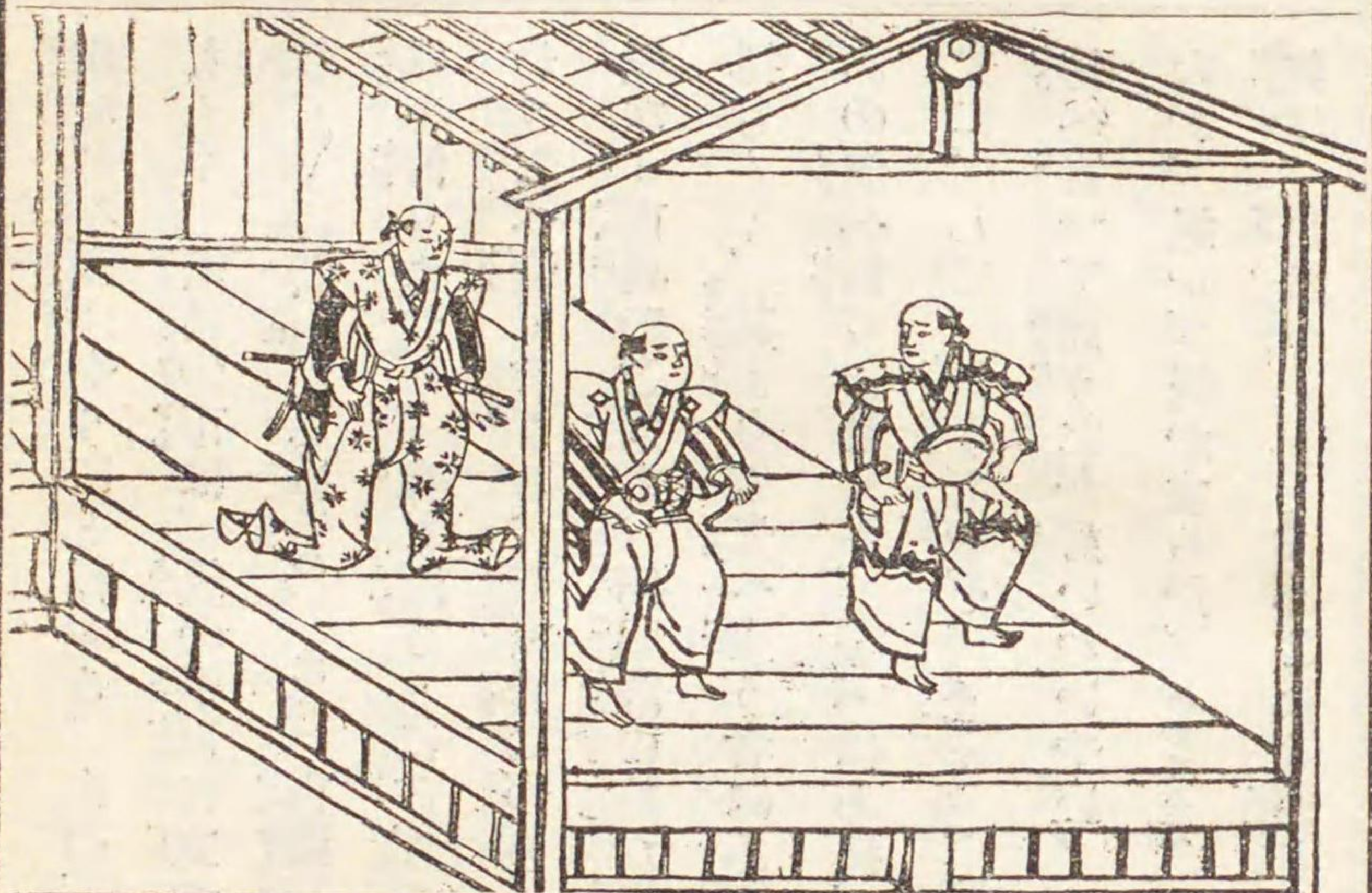
い慰みかな。そのびらひらとした物、脱いで、こちへおこそ。▲右京 大名の、これは脱ぐものではない。▲下京者 實正、おのれ脱ぐまいの。▲右京 あ、脱ぎますく。▲下京者 おのらが脱ぎ居つて、蹲うて居るなりは、そのまよたど、おきやがりこぼしのやうな。おきやがりこぼしの真似をせい。▲右京 某は知らぬいやい。▲下京者 知らずばをすよ。それで見居れ。▲下京者 京にーはやる、おきやがりこぼし、よい殿見れば、殿さへ見れば、やよ、は、合點か、がてんか、つい轉ぶ、と云ふ事ぢや。▲右京 何として、そないな、頭を振つてせうぞ。▲下京者 知らずば某が真似をせう。さあ。▲下京者 京にーはやる、おきやがりこぼし、よい殿見れば、殿さへ見れば、やよ、合點か、つい轉ぶ。▲下京者 扱も、すき慰みぢや。なう、侍。して、この太刀が欲しうおぢやるか。▲右京左京 おんでない事。▲下京者 ほしくばよさりの、ほしをとれ。▲右京、左京 やい、やるまいぞ。

羯鼓炮碌一名  
鍋やつばち

札なり一札の様  
子

羯鼓一横にして  
兩の杓にて打つ  
つゞみ也

棚一店  
萬雜公事一年貢  
諸役



狂言記卷之五

一 羯鼓炮碌

三人 羯鼓賣 半袴、棒の先に羯鼓を付けて擔  
炮碌賣 半袴、炮碌さげて出る  
目代 長袴、小さ刀

▲目代 罷出でたるは、所の目代。所繁昌につき、  
新市を立てうと存ずる。まづ札を揚げませうず。  
一段札なり見事にござる。まづ、宿へ歸ろ。▲羯鼓  
罷出でたるは、羯鼓張でござる。さやうにござれ  
ば、所富貴につき、新市をお立てなされると、承  
つてござる。今は、斯様のものをば商ひますると  
も、一の棚を領じ、萬雜公事を免され、末々は、金

わさなべー土鍋  
砲碌の類

退かざー退かざ

銀などを商ふやうにと存する。まづ、そろく参らう。ほどなう市場さうにござる。扱もく、繁昌の市は、箕の手形に立つと申すが、あれからこれへ、これからあれへ、扱もく、好い場でござる。まづ、市頭へ参る。はあ、こよもとが好ささうにござる。まづ、柵を飾りませう。夜も深さうにござるほどに、ちつと睡ませう。▲わさなべ 罷出でたるはわさなべ賣でござる。所富貴につき、新市を御立てなさると、承つてござる。いや、程なう市場でござる。何所許に札が揚つたぞ。いえ、此所にある。まづ、拜領致さう。扱もく、某よりも先へ來う者はあるまいと存したれば、羯鼓張がきよろりとして居る。あの先へ飾りませう。▲羯鼓 はあ扱、久しう寝た事かな。これは如何なこと、人の柵の先に。して、何事ぢやぞ。▲わさなべ いや、某は商賣人ぢやい。▲羯鼓 やい、商賣人なら、傍へ寄つて商うたが好いわい。▲わさなべ はあ、お主傍へ寄つて商へ。▲羯鼓 實正退かぬか。退かざ退かするが。▲わさなべ して、そちが、何とせうと思つて。▲羯鼓 や、此處な奴は。出合へく。▲目代 これは何とした事ぢや。▲羯鼓 御前はどなたでござりまするぞ。

▲目代 いや、所の目代ぢや。▲羯鼓 はあ、存じませんでござる。お禮申します。▲目代 禮まではいるまい。何事なれば。▲羯鼓 その御事でござりまする。一の柵を飾つてござれば、あの者めが柵先に居つて、退くまいと申すによつて、かやうの通りでござりまする。▲わさなべ 申し、あの羯鼓張が申す事は、偽でござる。某が、一の柵を飾つてござる。その證據がござる。札を拜領致してござる。▲羯鼓 申し、あのわさなべ賣めが申すので知れてござる。身どもは、夜深に参じたによつて、札が何處に揚つてござるも、存じなんでござる。▲目代 ふん、これもかうぢやわい。▲羯鼓 それにつきまして、この羯鼓などの傍に、何ぞよ、土砲碌などは、飾らする物ではござらぬ。づつと、市末へやらしやれませい。▲目代 して、その羯鼓には、系圖があるか。▲羯鼓 なかく、系圖がござる。▲目代 その義ならば、どちらなりとも、系圖に負けた方が、市末へ行たが好いわ。▲羯鼓 さやうでござりまする。まづ、あの土砲碌にも、系圖があるか、問はつしやれませい。▲目代 心得た。▲わさなべ 申し、これで承つてござる。このわさなべ様には、殊の外系圖がござる。

この中な物―食物のこと  
かつこ昔深うして―かつこは實は諫鼓なり大江音人の詩に諫鼓若深鳥不驚世話にのつて―人口に膾炙して

組んで落ちた―好い取組となつて落着せる也

ざる。まづあの者に、有らば云へと、御意なされませい。▲目代 心得た。▲羯鼓 申し。承つてござる。即ちこの羯鼓などと申するは、兒若衆達が、羯鼓遊、八桴などと申してござりまする。その上、炮碌遊などと申す事ござりますまい。▲目代 おう、これもかうぢやわい。汝聞いたか。▲わさなべ なかく、承りました。如何ほどあれがあこのやうに申すとも、この中な物をば參らずば、兒若衆達も、羯鼓も八桴も、いることではござりませまい。▲目代 おう、これもかうぢやわい。やい、あこの者が言分を聞いたか。▲かつこ なかく、承りました。又この羯鼓は、古歌にも引いてござる。かつこ昔深うして、鳥驚かずと申して、世話にのつてござるが、あの土炮碌がのつてあるか、問はつしやれませい。▲わさなべ 申し、あの者が、世話にのつてあると申すれば、某ものつてござる。まづ、高きやにのほりてみれば煙立つ、民のかまどは賑ひにけりと、申す時には、これもものつてござる。▲目代 扱は、系圖は組んで落ちた。して、も、系圖はないか。▲羯鼓 いや、これから勝負得に致しませう。▲目代 おう、これが一段であらうぞ。▲羯鼓 身どもは棒を振りま

面々の物―各自の物、轉じて自分の物

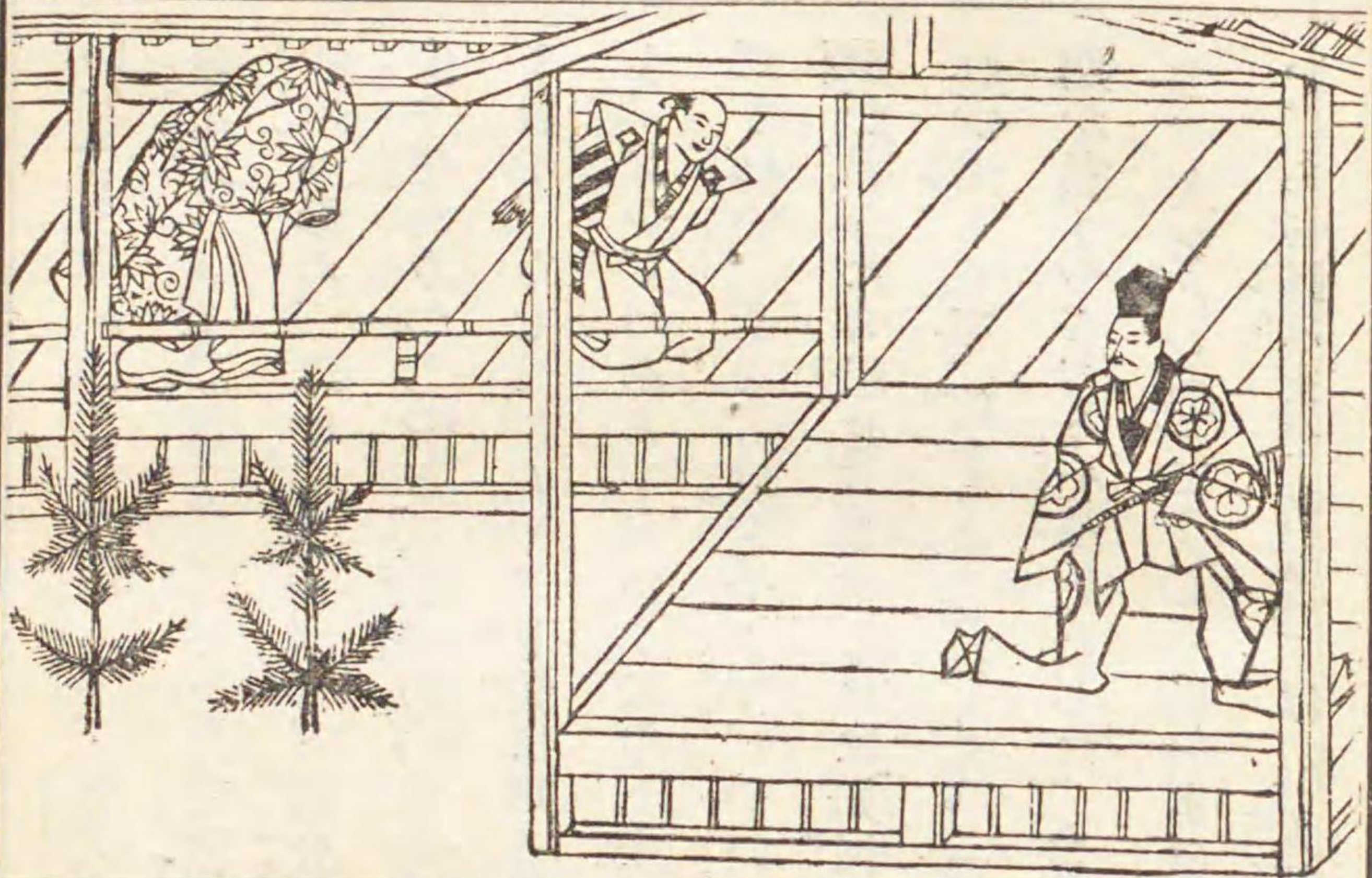
せうが、あのわさなべ賣も振らうか、問はつしやれませい。▲目代 やい、あの者は棒を振らうといふが、汝も振らうか。▲わさなべ あの者さへ振りませうならば、何とやうにも振りませう。まづ、急いで振れと仰しやれませい。▲目代 これへ出て振りませい。▲羯鼓 畏つてござる。いや、えい、いやつと振つてござる。▲目代 やい、汝も急いで振れ。▲わさなべ 畏つてござる。あの棒を貸せと、おつしやれて下されい。▲目代 心得た。やい、あの者に棒を貸せ。▲羯鼓 面々の物で振れと仰しやれませい。▲わさなべ あ、承りました。きつい奴でござる。わさなべでなりとも振つて見ませう。これへ出て見させませい。▲羯鼓 急いで振れい。▲わさなべ いや、えい、いやつと振つてござる。▲目代 はあ、見事振つた。▲羯鼓 申し、某は羯鼓を打ちませうが、彼奴も打たうか。問はつしやれませい。▲わさなべ 申し、承つてござる。急いで打てとおつしやれませい。▲目代 やい、あの者は打たうと云ふ程に、急いで打て。▲羯鼓 畏つてござる。えい、いや、打つてござる。あれにも急いで打てと仰しやれませい。▲目代 汝も急いで打て。▲わさなべ 畏

むげない一サゲ

しなしたるなり  
かな一土鍋の破  
れて失敗せるを  
云ふ

つてござる。さりながら、あの羯鼓を貸せと、仰しやれて下されい。▲目代いや心得た。  
 ▲羯鼓いやはや、これで承りました。面々の物で打てと仰しやれませい。したが、何は嫌、  
 彼は嫌と申すれば、彼奴がむけないと存ぜうほどに、この桴は貸すと仰しやれませい。  
 ▲目代をよ、やいく、羯鼓はならぬ、桴は貸すといふぞ。▲わさなべ 扱は彼奴も、ちつと  
 は心が直つたと見えました。▲目代急いで打て。▲わさなべ 畏つてござる。はあこよな。▲目代  
 何としたぞ。▲わさなべ 心が直つたと存じたりや、破らする工でござつた。▲羯鼓ちつと、さ  
 うもおぢやるまい。▲わさなべ 申し、出て見よ。打つとおつしやれませい。ほつひや、  
 とうろ、ひやり。とうろ。やつと打ましてござる。▲目代おう、一段打つた。▲羯鼓  
 申し、あの者も見事打つてござる。今度は相打に致しませう。▲目代やいく、急い  
 で相打に打ちませい。▲わさなべ 畏つてござる。▲二人相打 ほつひや、とうろ、ひやり。とう  
 ろ。ろうろ。▲わさなべ 南無三寶 しなしたる形かな。

清水一寶龜十一  
年坂上田村麿草  
創大同年中諸堂  
成る延鎮開基本  
尊千手觀音  
妻觀音一妻を申  
受くるに靈驗あ  
りとの意  
心はと問へば一  
謎也



二 伊文字

四人  
 大名 立烏帽子、素襦、袴、小き刀  
 冠者 半袴  
 道行人 括り袴  
 上臈 小袖かづき出づる

▲大名 太郎冠者あるか。▲冠者 御前に。▲大名 汝が知る  
 如く、この年になるまで、定まる妻がない。清水  
 の觀音は、妻觀音と承る。これへ参り、定まる  
 妻を申し受けうと思ふ。供を仕れ。▲冠者 これは一  
 段でござらう。皆人の云ひまするは、そちの主は、  
 牛か馬の生れ變であらうと申します。心はと問  
 へば、定まる妻がない程にと申しますをば、私も  
 口惜しうござりまする。急いで参らつしやれませ



子安の塔—清水寺門前に在り天平二年建立本尊觀音也泰産寺といふ  
あかつ様—與様

よもの—夜者に  
て夜番か又よい  
者甘い奴の意か  
たはけ—痴者

い。▲大名それはこれに限らず、皆人毎に、悪口を云ふものぢや。氣にかけな。急いで供を仕れ。▲冠者殿様々々、これは子安の塔でござる。拜まつしやれい。▲大名はて、まづ清水へ參ろ。急げ。▲冠者はて、無分別な事を仰しやる。おかつ様の喜びさつしやる折に、安う生れさつしやる、子安の塔ぢやほどに、拜まつしやれいと云ふ事でござる。▲大名おおう、めでたしく。下向に拜まう。急げ。はや御前ぢや。まづ鰐口に取り付かう。ぢやぐわんく。いかに申し上げ候。某定る妻を持ちませぬ。定る妻を授けてくだされい。あら、尊とや。やい冠者、身はこゝにて通夜を致さう。汝は番をして、鶏が唱うたら起せ。▲冠者これは如何なこと。主は寢て、某は起きて居つて番をせい。これが淋しうて、起きて居られうか。殿様々々。▲大名何事ぢや。鶏が唱うたか。▲冠者はつ、鶏が唱うやら、今欠伸しました。▲大名こゝなたはけは、欠伸はいらぬ。唱うたら起せ。▲冠者人をよものにするまでい。あはよ。それを知らぬ者があらうか。いや、某も眠たい。ちと睡ませう。▲大名はあ、太郎冠者々々々々。▲冠者はつ、鶏が唱ひましたか。▲大名

譜代の者—數代仕る家人

伊勢寺—飯高郡ある村名  
こひしくば—此の歌ふしにかゝる

こゝな狼狽者めが。ありがたい御夢想が有つたわ。汝が妻にならう者は、西門の階に居るぞ。連れて歸れと仰せられた。いざ西門へ行かう。▲冠者これはめでたい事かな。急いでござりませい。▲大名あれや、あれに立つてござるわ。急いで連れまして來い。▲冠者畏つた。殿様々々、こなたござりませい。私は恥しうござる。▲大名何の恥しい事が有るぞ。急いで負うて參れ。▲冠者畏つた。いかに上臈へ申す。輿乗物を進ませうけれど、某が背中を乗物と思召し、これへ負はれさつしやれい。私は、殿様の譜代の者でござる。今よりは目をかけて、可愛がつて下されい。早う負はれさつしやれいませい。▲上臈歌こひしくばたづねてきませい伊勢の國、伊勢寺もとに住むぞわらはは。▲冠者はつて、その物語は、晩の寢物語になされい。早う負はれさつしやれい。これは如何な事。今上臈は、何方やらお去ねやつた。殿様々々、ござりましたく。▲大名どれく、對面せう。▲冠者あちへござりました。▲大名それは何事を云ふ。▲冠者さればその事でござる。なにやら小言を仰しやれて、何方へやらござりました。▲大名それは何と仰しやれた。▲冠者こ

氣の毒—迷惑の意

鳥目—錢のこと

申し妻—乞ひ願ふ妻也、申し子と云ふと同じ語法

ひしくばたづねてきませい、いよいと仰しやれたと思ひましたれば、つい歸らつしやれてござる。▲大名そのいよの後は無かつたか。▲冠者何やらまだ、ぐぢくくと仰しやれてござる。▲大名これは歌さうな。何とした物であらうぞ。氣の毒な事ぢや。思ひ付けた事がある。この所に關を据ゑ、何者なりとも、この後をつがせうと思ふ。▲冠者天下太平めでたい御代に、關と事はござるまい。▲大名鳥目を取らぬ程に、苦しがるまい。▲冠者まことさうでござる。▲大名さらば此所に關を据よ。▲道行人かやうに候者は、早使の者に候。急ぎませう。▲冠者さあ掛つた。▲道行人掛つたとは、鳥獸のやうに、何事ぞ。▲冠者これは關でおぢやる。▲道行人天下太平めでたい御代に、關とは何事ぞ。▲冠者されば、鳥目を取りませぬよ。▲道行人まづ安堵致いた。何の爲の關にておぢやるぞ。▲冠者その事でおぢやる。あれに立たせられたは、某が頼うだ人でおぢやる。あの年まで、定まる妻がないによつて、清水の觀世音に申し妻をしてあるが、案の如く妻を下された。この上臈の歌をよまれ、どちへやらおぢやつた。この歌の後をつがせう爲の關でおぢやる。急いで、

思ひもよらぬ云々—ふしがかり以下倣之  
いで詰らうと—  
いを商として燈  
心に續く  
つがしや—つが  
せよ

歌の後をついで通りやれ。▲道行人その使は、何者がしたぞ。▲冠者この賢い太郎冠者。▲道行人賢い太郎冠者さへ知らぬもの、道行人が知らう事は。退け。通ろ。▲大名太郎冠者太郎冠者、歌の後をつがずば、通すなく。▲道行人これは迷惑な事かな。その歌の先は何と。▲冠者戀ひしくば、問うても來ませい、いよまでは覺えたが、後は忘れた。▲道行人これはいの字の附いた國であらうほどに、一つ二つ云うて見ませう。思ひ當つたら答へさつしやれい。▲冠者然らば云うてごろんじやれい。▲道行人思ひもよらぬ關守になかうとするぞをかしき。▲地をかしき。▲道行人えい、いの字のついた國の名く、いの字のついた國ならば、伊賀の國のことかなう。▲大名冠者えい、それにも候はず。思ひもよらぬ國の名。▲道行人扱は何處の國ぞの。いの字のついた國なら、伊勢の國の事かなう。▲冠者おう、その伊勢の國く。▲大名さらば吟じて見よ。▲大名冠者戀ひしくば尋ねて來ませい、伊勢の國いよ。又いで詰つた。なうく、又いで詰つた。▲道行人いで詰らうと、とうしんで詰らうと、某は急ぎの使ぢや。又後から來る者につがしや。▲冠者厭でも應でもつがねば

ごろぜー御覽せ  
上の端にかつ  
た一日が西山に  
没せんとする也

通さぬ。▲道行人はてこれは、氣の氣な事かな。國には里がなうてかなはぬものぢや。里の名を云うて見よ程に、思ひ當つたら答やろ。▲冠者あよ、其方は才覺な人ぢや。急いでおしやれ。▲道行人えい、いの守の付いた里の名。いの字のついた里ならば、生駒の里の事かの。▲大名冠者それにも候はず。思ひもよらぬ里の名。▲道行人神變や。奇特や。扱は何處の里ぞの。いの字の付いた里なら、伊勢寺もとの事かの。▲冠者おう、それそれ、その伊勢寺もとく。▲大名さらば吟じて見よ。▲大名冠者こひしくばたづねてきませい伊勢の國、いせ寺もとに、住むぞわらはは。▲道行人これまでなれや關守、さらば暇申さん。▲大名冠者あら、名残惜しやの。▲道行人こなたも名残惜しければ、あの日をこそ。山の端にかつた。▲三人めい、ざらりと、梅はほろびて落つるとも、松は枝にとまつた。ほつぱい、ひやろ、ひつ。

三文藏

二人 殿 長袴、小き刀  
冠者 半袴

はつたと一端と  
さんぼうぜん  
不詳  
砂糖やうおんか  
んー砂糖羊羹な  
らん  
鼈羹ー山の芋を  
原料とす羊羹  
か  
ちくれうかんー  
竹葉羹か  
大寒小寒ー羹の  
語路にて云ふ

▲との御存じの者。太郎冠者あるかやい。▲冠者お前に。▲との汝は臺所もとにて、何やら旨い物を食べたといふが、何を食べてあるぞ。▲冠者いや、何やら旨い物を食べてござる。▲との何やら旨い物食といふが、何にてあるぞ。▲冠者いや、はつたと忘れてござる。▲との汝は伯父御様の方へ、いつ時分に参つたぞ。▲冠者元日早天に参つてござる。▲とのそんならば、羹の部類であらう。▲冠者さやうな者でもござりませう。▲とのしたらば羹の部類を、一つ二つ云ひ立てて見やう程に、有らばあるとやがて答へ、▲冠者はつ。▲とのそれ、かんの部類にとりては、さんぼうぜんには、砂糖やうおんかか、鼈羹か、しやうれうかんか、ちくれうかんか、へつかんか、霜月師走の大寒小寒ばし食べてあるか。▲冠者その様な物でも、ござりませなんだ。何やら、旨い物を食べてござる。▲とのさあらば、汝が食

しやうれうかん  
一不詳

點心一問食の料

糟鷄一蒟蒻を切  
りて淡き醬油に  
て煮る

けいらん一鶏卵  
ならん

けしめん一菓子  
麩ならん小麥粉  
を固くねりて基  
石の如くし煎豆  
の粉を衣に掛く  
と云ふ

天神一點心の語  
路にて云ふ

庭訓一庭訓往來

べたるものは、菓子くわしの類たぐひであらう。▲冠者かむかはつ、さやうの物でもござりませう。▲とのそれ

菓子くわしの部類ぶるいにとりては、蜜柑みつかんか、柑子かうじか、橘たちばなか、金柑きんかんか、榲かやか、椎しひか、榛はしほみか、石榴じやくろか、胡桃くるみか、搗栗かちぢりか。さては苦にがい所ところばし食くらうたか。▲冠者かむかいや、左様さやうの苦にがい物ではござりませぬ。何なんやら、旨うまい物を食たべてござる。▲との扱さては、汝なんぢが食たべたは、點心てんじんの部類ぶるいであらうぞ。▲冠者かむかはつ、さやうな物でござりませう。▲との點心てんじんの部類ぶるいにとりては、索麵さうめんか、糟鷄そけいか、温飩うんぜんか、けいらんか、けしめんか、饅頭まんぢうか。さては、北野きたのの天満天神てんまんてんじんばし食くらうてあるか。▲冠者かむかいや、さやうの、神臭かみくさい物でもござりませなんだ。▲との扱さては、汝なんぢが食たべたるは、讀物よみものの類たぐひであらう。▲冠者かむかさやうの物でもござりませう。▲とのそれ、讀物よみものにとりては、庭訓ていか、式狀しきじやうか、古今こきん、萬葉まんえふ、伊勢物語いせものがたり、論語ろんご、朗詠らうえい、方等十二部ほうとうじふにぶ。お経きやうばし食たべてあるか。▲冠者かむかいや、さやうの佛臭ほとけくさいものではござりませなんだ。▲との扱さては、汝なんぢ食たべたるは、武具ぶぐの類たぐひであらう。▲冠者かむかさやうの物でもござりませう。▲とのそれ、武具ぶぐの道具どうぐにとりては、太刀たち刀かたなか、鎧やりか、長刀ながなたか、鐵砲てつぱうか、弓ゆみか、刺股さすまたか、鎌かまか、棒ぼうか、十文字もんじか、わきび

きか、臍當すいあてか、頬當ほあてに聞き紛まがうて、ほうはんばし食くらうてあるか。扱さては、おほのほりはし  
ばし食くらうてあるか。▲冠者かむかいや、さやう長い物ではござりませなんだ。何なにやら、旨うまい物をた  
べてござる。▲との退しほり居をろ。汝なんぢがやうな胡亂うらんな奴やつは、何も物ものによそへては覺おぼえぬか。▲冠者かむか  
今思いまおもひ當あたつてござりまする。殿様どのさまの四疊半座敷よふはんざしきへ、とり籠こもらしやれまして、讀よまつしや  
れまする物ものの本ほんの内に、確しかと有あるかと存ぞんじまする。▲との某それがしが好すいて讀よむのは、盛衰せいすい記きを  
好すいて讀よむ。紙かみ二三枚まい讀よまうする間、有あらばあると、頓やがて答こたへ。床几しやうぎ。▲冠者かむかはつ。▲との扱さ  
も、石橋山いしはしやまの合戦かせんと云いつば、頃ころは治承三年八月朔日ちしやうねん ぐわつしひの事ことなるに、兵衛佐類朝ひやうそるいあさは、北條ほうてうひる蛭むし  
が小島こじまを打うつ立たち給たまふ。僅御勢わづかおんせいは、三百餘騎よきには越こえざりしを、土肥とひの杉山すぎやまは、要害えうがいよ  
き所ところなればとて、城郭じやうくわくを構かまへ籠こもり給たまふ。茲こゝに平家へいけの侍さむらいに、大庭おほは三郎さぶらうと云いつし者、これ  
は三千餘騎よきの兵つはものを引ひき具ぐして、石橋山いしはしやま二にばいかわよご六むのだんに陣ぢんを取る。平家へいけの勢せいは  
三千餘騎よき。源氏げんじの勢せいは三百餘騎よき。三千餘騎よきと三百餘騎よきと、物ものによくく譬たとふれば、十分ぶん  
が一分ぶんにも足たらねども、人ひとの腑ふは一つひとつに揃そろうて追おつつかまくつつ、鎬しのぎをけづり、鐔つばを割わり、鋒きつ

精好一今の仙臺  
平の如き織地

尖よりも火焰の出し、さんぐくに合戦したる所ばし食うてあるか。▲冠者いや、さやうの物でもござりませぬ。▲との又、晝のいくさは、まづ互角にも見えければ、夜軍になり、對手組をぞ定めける。源氏の方には、真田の與市擇つて出す。與市がその日の装束は、いつに勝れて花やかなり。肌には、みなじろをつて一重、精好の大口に、副將軍より賜つたる、赤地の錦の直垂を、始めてこそは著たりけり。紫裾濃の鎧を著、同じ毛の五枚兜に、高角打つてぞ著たりける。太刀は三尺三寸の、いか物造りの太刀を佩き、二十四さいたる大黒の征矢、筈高にとつてつけ、重藤の弓の真中握り、馬は坂東に隠れもなき、ひぐらしと云ふ名馬に、金覆輪の鞍おかせ、豹の皮のはりくらに、虎の皮の切付に、熊の皮の障泥をさし、引寄せゆらりとうち乗つて、大木戸開かせ切つて出づる。土肥の杉山に、高根を出でし月影に、打物のひらりとするの、あれこそ晝の強者よ。やあ真田よ、與市よと、一度にどつと感したる所ばし食うてあるか。▲冠者いや、さやうの物ではござりませぬ。▲とのかくて平家には、真田一騎撃たんとて、大剛の武者三

川原毛―白くして土器の如き色

ほつき―打つ音と

人擇つて出す。一人は大庭が舍弟股野の五郎景久、今二人は長尾の新五新六なり。股野の其日の装束は、いつに勝れて結構なり。肌には白き帷子に、白檀磨の臙當に、緋緘の鎧を著、同じ毛の五枚兜に、高角打つてぞ著たりける。黄金作りの太刀を佩き、二十四さいたる小鳥羽の征矢、筈高にとつてつけ、塗籠籐の弓の真中握り、これも川原毛の馬に、金覆輪の鞍おかせ、引寄せゆらりと打乗りて、揉みに揉うでぞ馳け合はせ、馬の上にてむんずと組み、兩馬が間へどうと落つる。所は難義の悪所なれば、譬へば、板屋の霰に王散るが如く、えいやとはぬれば、ころりと轉ぶ。ころりくころりくころりくころりくころりと轉ぶところは、遙谷底に轉ぶ處を、真田が下になる。股野が下になる。然れども、真田は力勝りのしるしにや、取つて壓へ、矢負際にむんずと乗り、腰の刀をひん抜いて、首搔けども搔かれず、取れども取られず、不思議さよと思ひ、雲透に刀振り上げ見てあれば、實にも、鮫鞘卷の鞘つまり、栗形挽けて鞘共にあり。老武者ならば、口に唾へて抜くべきが若武者の悲しさは、冠の板に押し當てて、二打三打、ほつき、丁々と打ちければ、抜けは

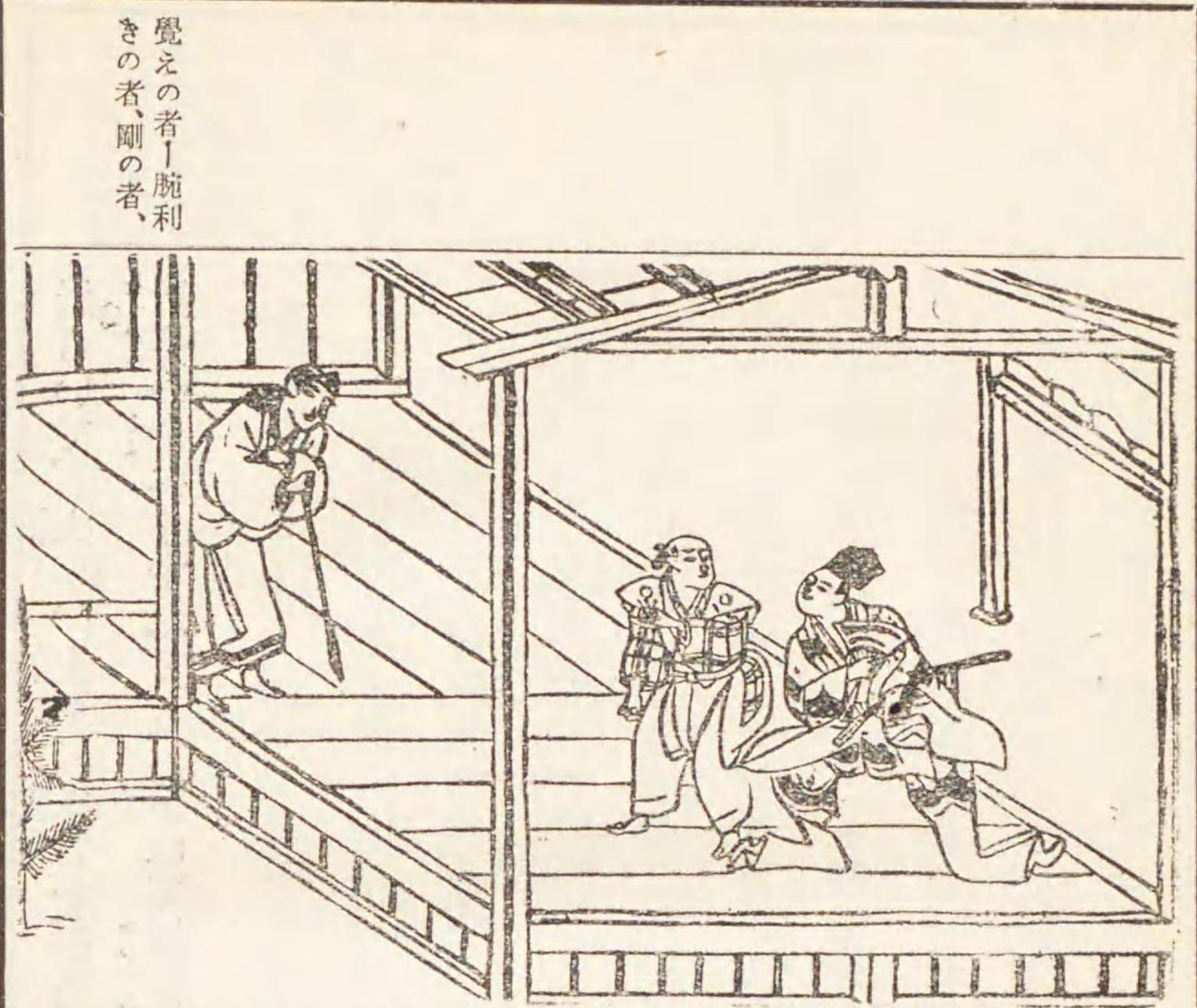
水もたまらず  
刀の切れ味の鋭  
利なる云ふ

めのと一守役  
ぶんざう一豊三  
義安のこと

うんざうのかい  
一温槽粥也即ち  
蕪薯の葉餅粟を  
入れ甘酒を加へ  
たる雑炊なりと  
云ふ

せずしてこの刀、運の盡きばの間かや、目釘穴よりほつきと折れ、波打際にざつぷと入る。眞田は、上に呆れて居たりし處に、長尾新五新六下り合ひて見れば、武者二騎むんずと組んであり。やあ、上なるが股野か、下なるが股野か、名乗れくとありし時、下より竊に申すやう、上こそ眞田下こそ股野よと申しければ、上なる眞田が首、水もたまらず打ち落し、下なる股野を引立て、鎧につきたる塵、ほつほさつくと打ち拂うて、三人目と目をきつと見合せ、につこと笑うて立ちし處に、遙渚を見てあれば、老武者の白糸緘の腹巻に、白柄の長刀かいかうで、尾花葦毛の馬に乗り、薄の中を押し分けかきわけ、この邊に眞田殿やましますか、與市殿やましますかと尋ぬる處に、股野はきつと見て、御分は誰そと問へば、苦しいも候はず、眞田殿のめのもとに、名をぶんざうと答ふ。▲冠者あゝ、その文藏のことでござります。▲とのいや、おのれが、言葉の末にて聞き取つてある。汝が食べたは、うんざうのかいであらう。▲冠者いよく、うんざうのかいでござりました。▲との某が内にあらうする奴めが、ぶんざう、うんざうのわけ差別も知り

居らいで、大事の主殿に大骨を折らせ、大汗をかゝす事、汝は前代未聞の曲者。この度折檻の加へうすれども、重ねて折檻の加へうする。其所立ちて退り居る。▲冠者はつ。



覺えの者一腕利きの者、剛の者、

四武悪

三人 大名 立烏帽子、素襖、小さ刀  
冠者 半袴  
ぶあく 半袴

▲大名罷出でたるは、隠れもない大名。さやうにござれば、某使ふ下人に、無奉公を仕居る奴がござる。太郎冠者を喚び出し、搦取りに遣らうと存ずる。あるかやい。▲冠者はつ、御前に。▲大名念なう早かつた。汝を喚び出す餘の儀でない。武悪めを、汝急いで、からめとつて参れ。▲冠者あよ、さりながら、あれも御館では覺えの者でござれば、えからめとりますまい。▲大名まつこと、えからめ

さしまへ一刀のこと  
覺えが云々一切  
味覺束なし

不興を蒙り一叱  
られること  
覺えの者一こ  
なるは重用せる  
者の意  
も前を直さう一  
好きやうに取り  
なさう

とらずば、首を打つて来い。▲冠者畏つてござる。さりながら、身共がさしまへは覺えがござらぬ。御前の御太刀を貸さつしやれませう。▲大名をよ。これやく、急いで、討ち損なはぬやうに、討つて参れ。▲冠者畏つてござる。扱もく、迷惑な事を言ひ付けられた事かな。まづ参らねばなるまいが。程なうこれござる。ものも。お案内。▲武悪やら奇特や。聞いたやうな聲ぢやが、案内は誰ぞ。いや、太郎冠者か。▲冠者なか、内にござるか。▲武悪やい、太郎冠者、殿の不興を蒙り、汝が来たとても、心はゆるさぬ。▲冠者はてさて、ひよんな事をおしやる。皆御朋輩衆寄らつしやれて、武悪といふ者は、家久しう覺えの者をば、斯様にして置かつしやるのは、殿の違ひぢやとあつて、皆仰しやるのには、お前を直さうと仰しやるほどに、其方は急いで川狩に出やつて、雑魚を取つて、御前へ持つて出やつたら好うおぢやる。又殿も、今日は川狩に出らるよ。そこで、御朋輩衆が、申し直さうと仰しやるほどに、急いで出やす。▲武悪はれさて、嬉しや。その儀ならば行かうほどに、さあく、其方も來てくりやれ。▲冠者心得ておぢやる。▲武悪あ

サ一魚の寄るところ

覺悟せい一斬らんとする也  
鳥の目を云々一殘忍なるふるまひの聲  
曲もない一つまらないこと  
めこ一妻

あ、好いすを見付けておぢやる。いかいことの雜魚でおぢやる。なうく、失念した事  
 がおぢやる。餘り嬉しいまかせに、網をも持たずに、ひよいと出たわいの。▲冠者なうく、  
 何としたものでおぢやる。▲武悪あゝ、身が草寄せといふ事を知つておぢやるほどに、さ  
 あさあ、その方から遯うてくれさしめ。▲冠者心得ておぢやる。▲武悪身はこれからおして  
 行くぞ。▲冠者殿の仰ぢや。覺悟せい。▲武悪やい太郎冠者、汝が云ふ事まことと思つて、  
 ひよつと出たれば、まことに鳥の目を縫うて放したやうなことをして、曲もないものぢ  
 や。宿でも、かうと云うてくれるならば、めこ子供に、言ひ置きたい事もあるのに、曲  
 もないものぢや。是非に叶はぬ。急いで討たせませ。▲冠者其方が歎きやるのをば思つて  
 は、今日は人の身の上、明日はわが身の上、世の中に、宮仕などをせうものではない。  
 ▲武悪物を思はせずとも、早う討つてくれいやい。▲冠者いや、討たうとは思つたれども、  
 何として身が討たうぞ。二人共冠者急いで落ちさせませ。▲武悪いやく、物思はせずと  
 も、早う討つてくれさしめ。▲冠者命が物種ぢや。急いで落ちさせませ。▲武悪それは、して、

鰐の口云々一危  
き所を通れたる  
也

手者一腕きく

ぶちはなして一  
首を也

てかいた一えら  
い事をした

まことでおぢやるか。▲冠者なかく。▲武悪したら、後の儀を頼む。▲冠者片時も急いで落  
 ちさしませ。▲武悪やれ扱、鰐の口を遁れた。最早今が都の名残でおぢやるほどに、清水  
 へ暇乞に参りませう。中▲冠者まづ急いで殿の前へ参らうぞ。殿様ござりまするか。▲大名  
 やい、何とした。討つて来たか。▲冠者なかく、討ちましてござります。▲大名して  
 何として討つたぞ。▲冠者その御事でござります。彼奴は手者と思はつしやれませい、  
 又身どもは、何にも存せぬ者の事でござれば、騙さずばなるまいと存じ、朋輩衆の仰し  
 やるよ、殿の御前へ、言ひ直さう程に、殿も川狩に出さつしやるほどに、其方も急いで  
 お出やつたら好からうと、申してござれば、それを序に言ひ直してくれうと、仰しやる  
 事かとして、嬉しがつて、何が川へでまして、深い所で草寄せを致します處をば、身ども  
 がこのお太刀でもつて、何がござらうぞ、水もたまらず、ぶちはなしてござる。扱もく、  
 よう切れるお太刀でござる。▲大名よう切れたか。▲冠者なかく、よう切れましてござる。  
 ▲大名でかいたく、やい、して、別に何も云ひは爲なんだか。▲冠者そこで申しますのに



等閑なうして一  
隔てなく懸意に  
すること

は、やい太郎冠者、常に等閑なうして、甲斐もない、めこ子供にも見せて、内では討つてくれいで、曲もないものぢやと申して、いかう恨みましてござる。扱もく、奉公と云ふものは、物憂いものでござりまする。少しの違がござると、あれでござる所で。

▲大名やい、まことに汝が云ひつる如く、思へば家久しい者をば、むざと討つて捨てた事ぢや。▲冠者 殿様も、さやうに思はつしやれまするか。▲大名 汝が泣くので、おれも討つまいものとは思へども、最早討つた者は、戻るまいほどに、身も涙を止めるぞ。われも泣き止め。やい、かうして居たらば、面白い事もないほどに、いざ来い。物忘れに、清水へ参ろ。汝も供に来い。▲冠者 畏つてござる。▲大名 はて扱、思へば惜しいことをしたわいやい。▲冠者 御意の通りでござりまする。▲大名 やい太郎冠者、彼の向から来るは、武悪ではないか。急いで見て参れ。▲冠者 あよ、此所は六道でござりまする處で、迷うてがな居るものでござる。行て見て参りませう。やい、今殿の見付けられたが、急いで落ちはせいで。▲武悪 己もさて、一期の名残ぢやと思つて、清水へ参つて見つけられた。天

物忘れ一うき時

六道一死人のあの世への分れ道

娑婆云々一曲がかり

の網が來さつた。覺悟した。▲冠者 なうく、急いで様を變へて出さしませ。幽霊のやうにして。▲武悪 なかく。心得ておぢやる。入。▲冠者 申し殿様、ござりまするか。今のは武悪がやうにござりましたが、追つ懸けて参ると見失ひましてござる。▲大名 やい、冠者、あれやく、又出居つたわ。▲冠者 扱は、も、幽霊に紛ひはござりませぬ。▲武悪 白小袖を着て打かけ、つぼをつて、杖をつき、娑婆にも行かず、冥土にも、六道の衢にまよふ。▲冠者 あよ、申し、武悪が亡霊には、隠れもござりませぬ。▲武悪 申し。▲冠者 あれく、武悪が呼びまする。▲大名 行て何といふぞ、聞いて来い。▲冠者 いや、行て殿様聞かつしやれませい。▲大名 われ行て聞いて来い。▲武悪 申し、祖父御様からお使に参りましたのに、好い所で御目に懸りました。朝夕閻魔様へ、出仕をなされまするのに、御太刀が無うて、迷惑なされまする。身どもに参つて、取つて来いと仰しやれましたほどに、いくさつしやれませい。▲大名 やい、館でならば、鬘斗つけを進ぜうすれども、道で逢うた儀でござるによつて、さし荒したれども、これを進ずると申してくれい。▲武悪 さやうには申しませ

いくさつしやれ  
一ちこさつしや  
れ也

いでーさあ、と  
誘ふ語  
てうぎー調敷か  
今云ふ狂言の意  
か

せう。素襖、袴、扇までをよこさつしやれませいと仰しやれました。▲大名をよ、心得た心得た。やい太郎冠者脱がしてくれい。皺がよりましたれども、召さつしやれて下されいと申して、これを持つて行け。冠者。▲冠者これや武悪、取つて行け。▲武悪なうく冠者殿、取るものは取りましたが、殿の直に御目に掛つて申せと、仰しやれた事がござる。

▲冠者申しく、殿様、武悪が直に申したいと申しまする。▲大名やあ、何とした事ぢやな。

▲武悪申し殿様。▲大名何でござるぞ。▲武悪祖父御様の仰しやれまするのは、狭い婆婆にござりませうよりも、廣い所へお供して来いと、仰しやれました程に、どうござると、いで、ござりませう。お供して参ろ。▲大名やいく、武悪、祖父御様に、狭うても此所が好うござる、つつと今度参らうと申ししてくれい。▲武悪どうござつても、身共がかう申すからは、手を引いてなりとも、連れまして参らねばなりません。▲冠者申し殿様、あの態ならば、武悪めが手を引いて参るほどに、まづ、急いで逃げさつしやれませう。▲大名やい、それよく。冠者も逃げい。▲冠者申しく、さればこそ殿は逃げられた。武悪、好いてうぎで

なかつたか。▲武悪さればく、其方の蔭で嬉しうおぢやる。思ひもよらぬ路錢までを貰うた。▲冠者急いで落ちさせませ。▲武悪心得ておぢやる。後を頼む、さらばく。

五富士松

二人 殿 長袴、小き刀  
冠者 牛袴

ありそひて一行  
きたること、お  
りは下りそひて  
は候ひての約な  
るべきか

▲この罷出でたるは、あたりの者でござる。さやうにござれば、一人使ふ下人めが、某に暇をも乞はず、何方へやら、おりそひてござる。聞けば、夜前歸りたる様子でござるほどに、かれが私宅へ立ち越え、折檻を加へうと存する。まづ、そろく参らう。やれ扱憎い奴でござる。某に暇と申すれば、五日十日は苦しうもござらぬ。以来の爲もござる。思ふ様折檻の致そ。いや、程なう彼が私宅はこれでござる。某が聲と知つてござるなら、定めて逢はぬでござらう。作聲を致し、喚び出しませうず。ものも。お案内。▲冠者やら奇特や。表に案内がある。案内は誰そ。はつ、殿様でござりまする。▲との退り居る。主の聲をば聞き紛ふならば、不奉公ではあるまいか。その上某に暇をも乞はず、何方の遊山であつたぞ。▲冠者その御事でござりまする。殿様に御暇を申したりとも、一人仕は

かそうぞそつと  
の意  
富士禪定もと  
禪定は寂靜三昧  
の意こゝは富士  
登山して行をな  
すこと  
はあー恐れ入る  
也

さる下人の事でござれば、下されまいと存じ、かそうぞ、富士禪定致してござる。▲とのして、富士禪定すれば、主に暇を乞はぬ法でおりそふか。▲冠者はあ。▲とのやれ扱、唯今手討にも致したいと存ずれど、富士禪定致したと申し、一つは神の御事、又富士の様子も承りたうござり、まづ差し置かうと存する。やい其處な奴、立ち上れ。許す。▲冠者それは誠にござりまするか。▲とのおんでない事。▲冠者あら心安やの。▲とのやい其處な者、只今の心は何とあつた。▲冠者されば、いつくもよりも、お氣色が違ひましたによつて、すはお手討にも遊ばすると存じ、身の毛をつめてござる。▲との以來をたしなめ。その上問ふ事がある。つつとこれへ寄れ。▲冠者はつ。▲とのして何と、富士の様子は、何とあるぞ。▲冠者その事でござりまする。日本一のお山でござれば、参り下向の人々は、峯から谷へひきもちぎらず、夥しい事でござる。▲とのおう、さう有らうわい。それにつき汝は、富士松とやらをば抜いで来た。あるか。ちつと見せい、▲冠者いえ、某が事ではござりませまい。▲との嘘をつかぬ者が云うた。▲冠者誰が申しました。▲とのかな法師が云ふわ。

富士松―落葉松  
かな法師―子供  
のこと

さらく〜障子  
などを開く様子  
見やげー見上げ

二王三郎一宗三  
郎清綱周訪吉敷  
の刀匠應永比の  
人

▲冠者 扱もく〜幼いは、何を仰しやれうも存ぜぬことござる。人のをばことづかりましてござりました。▲との ことづかり松なりとも、見る分な苦しうあるまい。急いで見せい。

▲冠者 畏つてござる。これへござりませう。さらく〜。あの見付の松でござる。▲との やい冠者。扱もく、見やけましておぢやる。庭がいかう見事でをりやる。某も汝が留守の間に、庭を造つた。あの松を直したい所があるほどに、急いであれを抜いで来い。▲冠者 いや、あれは人のでござりまする。▲との その儀ならば、うちものにいたそ。▲冠者 それは何とござりませうぞ。▲との 代物といへば同心でおりやるの。何とがな。かやうな、はあ、思ひ付けた。二王三郎の、小反刃の長刀と代よ。▲冠者 はつ、身共も錆びてはござれども、一ふり持つて居りまする。▲との はあ。したらば、鹿毛の馬と代よ。▲冠者 これは好い代物でござれども、繋ぎ所がござりませぬ。▲との この家に繋けさて。▲冠者 名馬でござれば、すは驅け出してござるならば、いつつに引き崩しませうものを。▲との あよ、これもかうぢや。その儀ならば、最早かう戻るぞ。▲冠者 申し殿様。▲との 何ぢや。▲冠者 これに、富士

つまり居つたー  
窮すること

答和ー上句下句  
の附合

の御酒がござりまする。一つあがりませう。▲との 退り居ろ。酒は飲みに来ぬ。▲冠者 そのお事でござりまする。是を参りますれば、富士禪定なされたと同じ事ござりまする。

▲との その儀ならば、一つ飲まう。急いで持つて来い。▲冠者 はつ。やい〜、女ども、頼うだお方のござつた。酒を出せ。何、酒がない。その土器色も、茶の拾も、持ててちやつと代へて来い。▲との 太郎冠者めがいかうつまり居つたと見えた。▲冠者 はつ、一つあがりませう。▲との ふん、持つて来たか。新盃ぢや。一つ飲まう。やい冠者、聞か。これにつけて、答和を出さうほどに、句におつきやつたらよし、句をおつきやらぬにおいては、松をば根抜にするぞ。▲冠者 はあ。▲との かうもをりやるか。手に持てる土器色の古拾。▲冠者 爛の加へて参りませう。▲との 急いで加へて来い。▲冠者 はつ。やい〜女ども、汝が物を高聲に云ふにより、殿の聞かつしやれて、答和になされた。以來をたしなめ。はつ、加へて参りました。▲との して、今のはつけるか。▲冠者 何となされてござる。▲との 手に持てる土器色の古拾。▲冠者 酒ごとにやるつぎめなりけりと、致してござる。▲との おう、出来

山王近江の日  
枝神社也原本三  
王とあれど今改  
む  
うしよー來れ

ておぢやる。どれく。今日は山王の縁日。山王へ向けて社參する。▲冠者 御供に参りませうか。▲との ふん、して、供をせまいといふことか。▲冠者 あ、いや、参ります。▲との うしよ。その上、道すがらの句でおぢやる。句にお負きやつたら松を取るぞ。▲冠者 畏つてござる。▲との かうもをりやらうか。後なるものよしばし止まれ。▲冠者 あら、心利や。▲との やい其處な奴、なぜにおのれは、それに休んで居るぞ。▲冠者 そのお事でござります。しばし止まれと御意なされましたによつて、是に休んで居ります。▲との 句でをりやる。▲冠者 句なら句と、疾う御意なされいで。かうもござりませうか。▲との 何と。▲冠者 二人とも渡れば沈む浮橋よ、後なる者よしばし止まれ。▲との おう 句は出來た。その腕は何事ぢや▲冠者 仕方でござります。▲との 仕方置き居る。上にかたく下にかたく。▲冠者 かうもござりませうか。ひと手矢を、片手は天へくりあけて、上にかたく下にかたく。▲との 上にかたく下にかたく。▲冠者 申し殿様。夫は最前の句と似た様なものでござる。▲との 成らざならぬといへ。▲冠者 いや、付けます。三日月の水に映らふ影見れば、上にかた

かた下にかたく。▲との 上もかたく下もかたく。▲冠者 かうもござりませうか。▲との 何と。▲冠者 空木を本末たよく啄木鳥、上もかたく下もかたく。▲との やい其處な奴、ちつとはおのれも、負け居つたがよいな。▲冠者 いや負ける事はなりません。▲との おのれがやうな奴は、難句を以て參ろ。▲冠者 難句、迷惑にござる。▲との 迷惑ともに參ろ。かうもをりやらうか。西の海千尋の底に鹿なけば。▲冠者 かうもござりませうか。鹿子斑に立つは白浪。▲との 奥山に船こぐ音の聞ゆるは。▲冠者 申し殿様、最前、西の海の鹿をば、山へやらつしやれ、奥山の船をば、西の海へやらつしやるれば、よい句が二つござります。▲との 成らざ成らぬと云へ。▲冠者 いえ、つけます。▲との 急いで付けい。▲冠者 今のは何と。▲との 奥山に船漕ぐ音の聞ゆるは。▲冠者 かうもござりませうか。四方の木の實やうみわたるらんと、致してござる。▲との 一段出來した。おのれが様な奴には、青黄赤白黒、五色に問はず。かうもをりやらうか。年寄の白髪に紛ふ綿帽子。▲冠者 かうもござらうか。飛ぶ白鷺は雪にまがふか。▲との 蓮の葉の青きが上の青蛙。▲冠者 かうもござらうか。線青塗

うみわたる海  
に熟する意を掛  
く

山吹の云々古  
今集素性の歌

ばんば馬場也

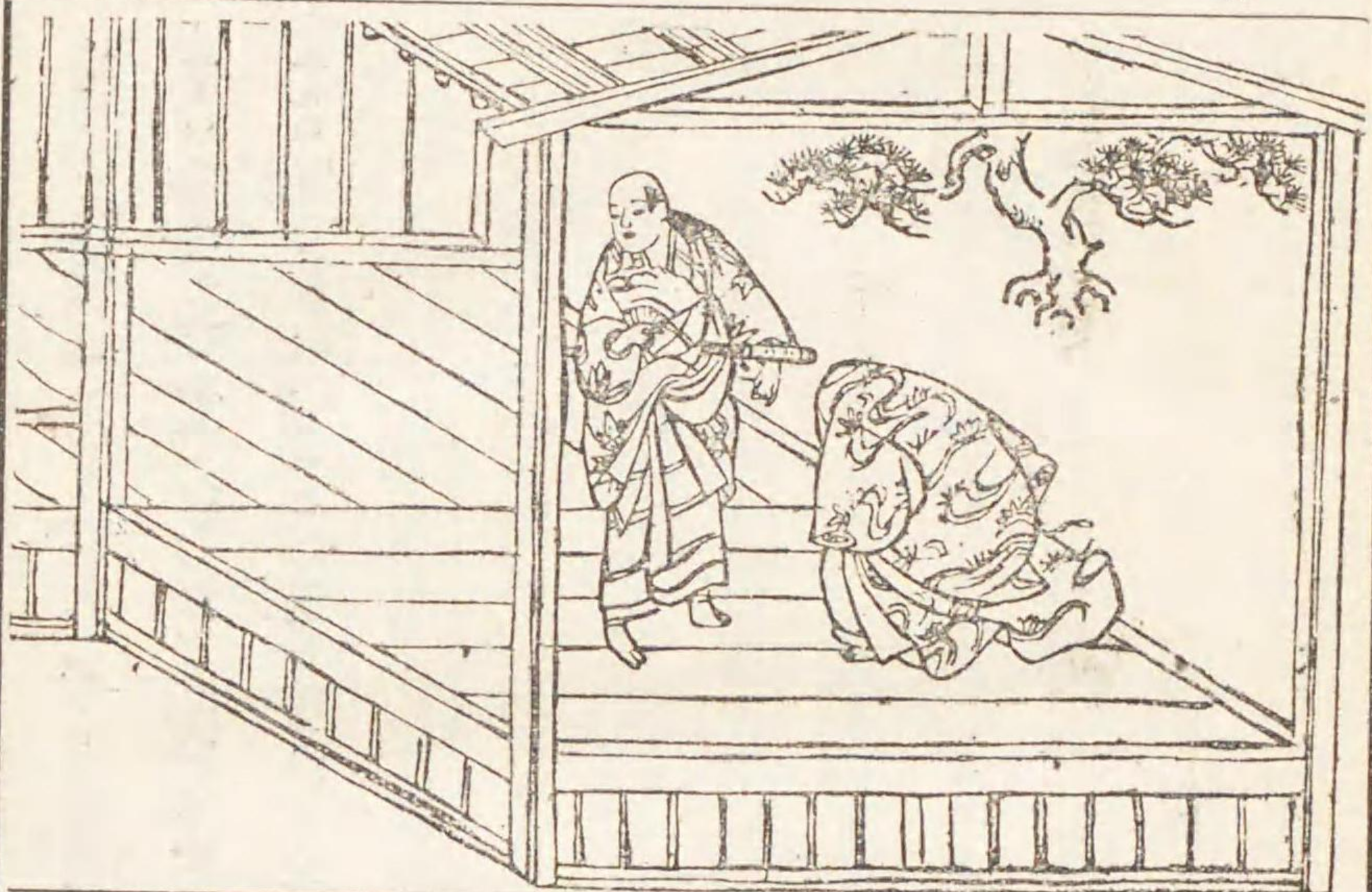
れる佛とぞ見る。▲との 山吹の花摺衣主は誰そ。▲冠者 かうもござらうか。問へど答へず口なしの花。▲との 黒きものこそ三つ竝びけれ。▲冠者 かうもござらうか。中は子か右や左は親烏。黒きものこそ三つ竝びけれ。▲との やい冠者。山王は、程遠いかいやい。▲冠者 即ちこのばんばを越えれば、さうでござる。▲との 手水おくせい。▲冠者 はつ。▲との 汝もそれで拜め。▲冠者 はつ。▲との やい冠者、山王のお前で、一句致そ。▲冠者 一段でござる。▲との かうもをりやらうか。山王の前の烏居に丹を塗りて。▲冠者 はつ、かうもござらうか。赤きが顔の色にこそ似れ。▲との 退り居ろ。憎い奴の。厭といふ酒をくれ居つて、顔の赤いが可笑しいか。▲冠者 いえ、殿様の面の事ではござらぬ。お猿様のお顔のこととござる。▲との いやよくのことをぬかす。某がは面、猿がは顔とは。▲冠者 そのお事でござる。今日は山王の御縁日でござる。猿は山王の使者でござり、まづ崇まへてござる。▲との ふん、これはかうぢややい。汝と某と、千日千夜、詰め合ひを云うたとも、埒はあくまい。あの向なる一本薄まで、飛び懸るうちに、はや句を以て参ろ。▲冠者 早句は迷惑にござる。▲との めいわく

いふー原本ゆへ  
に作る

どしに参ろ。これも句よ。▲との 殿様は御句に詰つて、背中を叩きあて句をなされます。▲との 秀句までをでかした。はつといふ聲にも汝怖よかし。▲冠者 喙木腹立つりや鶺喜ぶ。▲との 何でもないこと、退り居れ。えつ。▲冠者 はつ。

花子一名座禪

今めかしい事  
今更めきたる事  
山の神—今俗に  
云ふ如く妻のこ  
と



六花子

三人 殿 白衣、脇差  
冠者 半袴  
上臈 小袖うちかけ出る

▲この冠者あるかいいい。▲冠者御前に。▲このこの程は、花子様へ参らぬほどに、心變かとして、不審のなされうわいな。▲冠者まことにさやうでござります。▲この身は今晚、花子様へ参るほどに、汝を頼みたいことがある。きいてくれうか。▲冠者これは今めかしい事を御意なされるものかな。何なりとも仰せつけられませう。▲このおう、嬉しいものかな。いや別の義ではないが、内の山の神を騙

皺を延さう—  
さを晴さう

かみ様—奥様

して、暇を貰うた。その騙しやうは、一七日が内、座禪の致すほどに、その内身が前に参るなど、いろく騙してあれば、やうく合點のしてあるほどに、某は花子様へ参り、この程の皺を延さうと思ふ。汝はこの座禪衾を被つて、某が歸るまで、座禪をしてくれい。若し山の神が来て、何かと云ふとも、かぶりばかり振つて、物ばし云ふな。必ずく顯れぬやうして居よ。頼むぞく。▲冠者これは迷惑な事でござる。若し顯れましたらば、かみ様の、私を打ち殺さつしやれう。この義に於ては、なりますまい。▲このやあ、なるまいとは、某は怖しうなうて、かみさまが怖しいか。それへ直れ。討つて捨てう。▲冠者まづ待たつしやれませい。かみ様より、殿様こそ怖しうござれ。如何様とも、御意次第に致ませう。▲この確と、さうか。▲冠者なかく、何の詐がござりませう。▲このおう、可愛い者よな。これも花子様へ参りたさに、嚇しにこそは云ひつれ、その儀ならば、萬事頼むぞよ。さあ、この座禪衾を被つて見よ。様子を見やう。一段々々。身は、も参る。頓て戻らうぞよ。必ずく物ばし云ふな。さらばく、頓て歸る。▲冠者殿様々々、

紅梅—花子の腰元

頓て歸らつしやれませいや。▲このはつて、氣つかひを爲るな。▲冠者 殿様々々、慮外ながら、花子様へござりましたら、御内の紅梅に、傳言申したと仰しやれて下されませい。

▲このまことにそれよく。今度は汝を連れて行き、紅梅に遇はせうほどに、嬉しいと思へ。▲冠者 あよ、辱うござりまする。▲このやれく嬉しや。まづ急いで、花子様へ参らう。中入 ▲上臈 妾が殿御は、一七日が内、座禪へ入らせらるよとて、妾に暇を貰ひ、湯をも水をも参らぬが、餘り笑止に思ひまする。座禪の内、妾にも見舞ひまするなと仰せられてはござれども、餘り恠へられませぬほどに、よそながら様子を見ませうと思ひまする。扱もく、座禪袈を被り、窮屈にござらう。申しく、その若いなりで、何の經が入りませうぞ。それでは命もない事でござる。何にてもちと参りませいなう。あよ、きやうこつや。ものをば仰しやれいで、かぶりばかり振らつしやるわいやい。厭といふ事はござるまい。この袈を取らつしやれませい。是非とも取りまする。▲冠者 あよ、悲しや悲しや。免さつしやれませい。▲上臈 これは扱、殿と思ふたれば、おのれめは何して此處に

笑止—氣の毒

斟酌申す—辭退申す

居るぞ。なう腹立や。殿はどちへやつたぞ。云へ。云はずはおのれ打ち殺すぞ。▲冠者 ああ、申しませうく。命があつてこそ。申しませうく。▲上臈 早う云へく。なう腹立や。▲冠者 殿様は、花子様へ行くほどに。▲上臈 やい、おどれさへ、花子様とぬかすか。▲冠者 いや、花子めへござりました。この袈を被りて居よと、仰せられてござるほどに、いろいろ斟酌申しましたれば、刀を抜いて、斬らうと仰しやれた。厭と申せば、忽ち斬られまする。是非に及ばず、斯様に致しましてござる。私のやりましたではござりませぬ程に、命を助けて下されませい。▲上臈 扱は厭と云うたれども、斬らうとしたによつて、是非に及ばなんだといふか。▲冠者 なかく。其通りでござる。▲上臈 これは此うもあらう。又妾が頼みたい事があるが、きいてくれやうか。▲冠者 あの、仰しやる事わいやい。かみ様の御用ならば、命なりとも捨てませう。▲上臈 おう、嬉しや。それならば、この座禪袈を妾に著せて、汝が如くにして置いてくれい。▲冠者 これは、ひよんな事を仰せられる。殿様の歸らつしやれたらば、又私を殺さつしやれませう。これは御免さつしやれて下



されませう。▲上臈おのれめは、殿はこはうて、妾はこはうはないか。て、打ちころそ。  
 ▲冠者あよ、著せませう。命の有つてこそ。著せませう。▲上臈急いで著せい。やい冠  
 者、殿の姿に好う似たか。▲冠者その儘殿様でござる。▲上臈おう可愛の者や。汝は上京の  
 伯母が所へ行け。殿の機嫌を見て喚びに遣らうぞ。早う急いで行け。▲冠者畏つてござる。  
 よき時分に人を下されませい。扱もく、なさない事に遇ひました。まづ上京へ参ろ。  
 ▲この 小袖を打かけ、つぼをつて、 小歌 綾の錦の下紐は、解けてなかくよしなや。柳の糸の亂れ  
 ぶころ、いつ忘れぬ。小歌 はるくと送り来て、面影のたつかたを、かへり見たれば、  
 月細く残りたり。名残惜しやの。はつ、某が面白きまよに、獨言を申してある。太郎  
 冠者が待ちかねう。まづ歸つて喜ばせうと存ずる。やれく、人の主にはなりたい者ぢ  
 や。某が申しつけた如く、すぐくと居まする。やい太郎冠者、今歸つてあるわい。やい。  
 何とて物は云はぬぞ。さぞ窮屈にあらうな。さりながら、汝も嬉しいと思へ。お目にか  
 かると、まづ汝が事を問はつしやれてあるぞ。序に此程の様子を語つて聞かせう。まづ

物と一言葉を  
いひ出づるに先  
だつて軽くいふ  
語

あきりもの一御  
著物

あれへ参ると、何とやら窃にあつたほどに、不思議な事ぢやと思つて、そつとさし寄つ  
 て、内の様子を聞いてあれば、花子様の聲にて、物と仰せられた。小歌 燈暗うして、物  
 のさびしき折ふしに、君が来るにや、と仰しやれた。これは辱い事ぢやと思つて、妻  
 戸をほとくと叩いてあれば、その時又物と仰しやれた。小歌 いとど名の立つ折ふしに、  
 誰そや妻戸をきりくす、と仰しやれた。そこで、某も返歌を致した。小歌 雨のふる夜  
 に、誰が濡れて來ぞの。誰そよと咎むるは、人二人待つ身か。そこで、内よりも花子様の  
 出さつしやれて、某が手を執りて、奥の間へ連れて、扱もく、雨の降るに好うござりま  
 した、まづ上を脱がつしやれいとて、おきりものを著せて下されて、色々の積る物語、舞  
 うつ、諺うつ、遊ぶ程に、はや夜明の鳥が鳴いた。まだ半時もせぬのに、夜明の鳥が鳴き  
 まする、最早御暇申すと云へば、その時花子様、物と仰しやれた。小歌 こよは山かけ森  
 の下く、月夜鳥はいつもなく、しめておよれの夜は夜中、と仰しやれた。御意ではご  
 ざれども、夜も明けますれば、人も見まする、頼て参らうと申してあれば、そこで花子

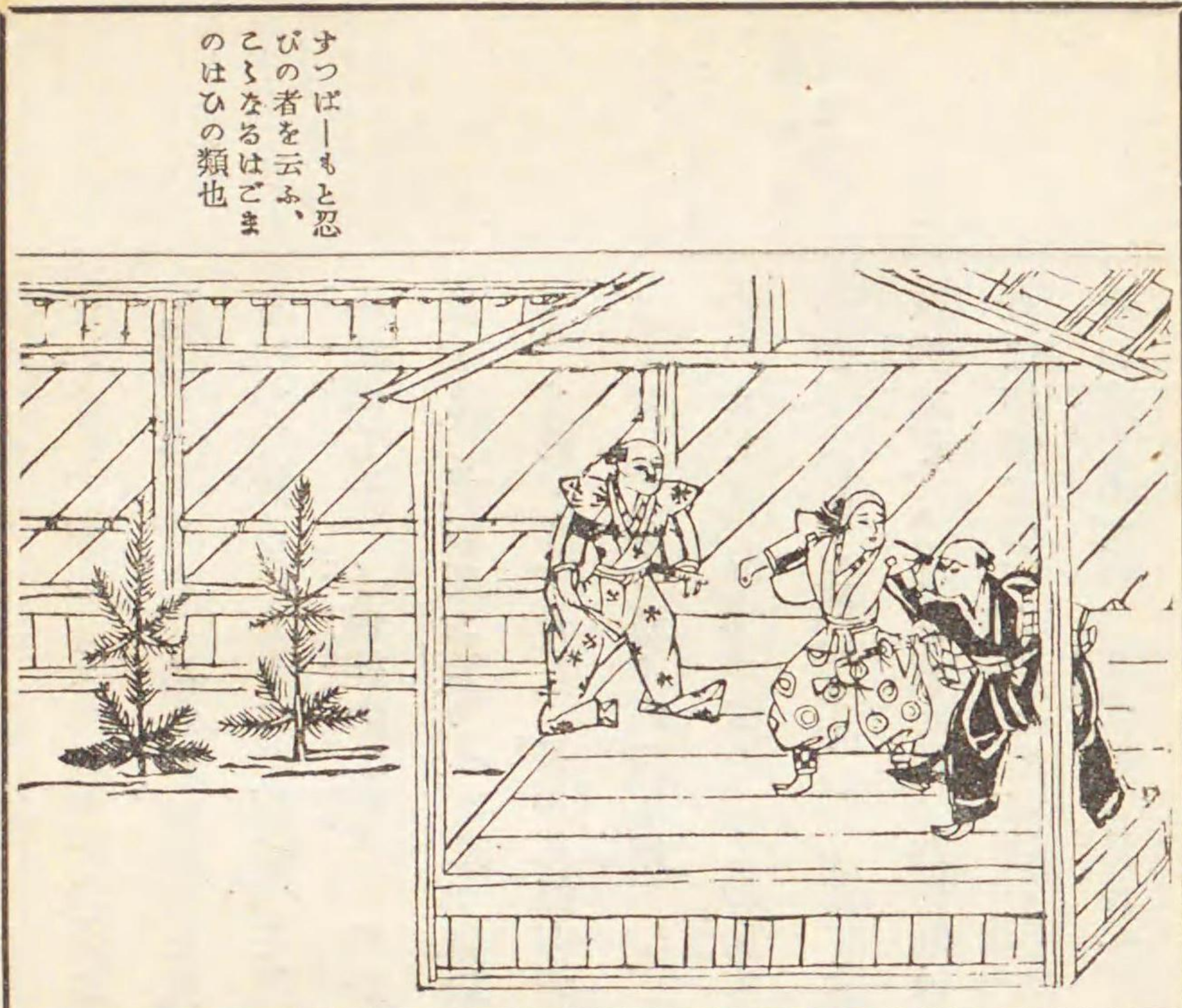
昔猿一年経たる  
ついつくばうた  
うづくまつた  
捨ててもおかれ  
ず云々此の文  
句謡曲松風に出  
づ

様の、いつ御意なされぬ事を仰せられた。こなたのかみ様の姿が見たうござろなうと、仰しやれた。そこで某が、山の神が姿を小歌に謡うた。小歌人の妻見て我が妻見ればく、深山の奥の昔猿めが、雨にしよほぬれて、ついつくばうたにさも似た、と申し謡うてあれば、どつと笑はつしやれた。又この小袖は、花子様の形見なれども、山の神が見たらば、好い事はあるまい。只捨てう。謡捨ててもおかれず、取れば面影に、立ちまさり、起臥分かで枕より、あとより戀のせめくれれば、せんかたなみだに、ふし沈むことぞ悲しけれ。とかく汝に遣るほどに、かまへて山の神に見せるな。この座禪衾を取れ、身がいり代るぞ。▲上臈なりに山の神に見せるな。よい座禪ぢやの、そなたの座禪は。▲このはつ、これは如何な事。▲上臈如何な事と云ふ事はあるまい。▲この咏へてたもれ。御免々々。▲上臈どいへ。やるまい〜。

七長光

三人 田舎者 半袴、太刀を提げて出る  
すり 北叟頭巾、括り袴  
目代 長袴、小き刀

▲田舎者 某が頼うたる者は、遙遠國の者でござる。長々在京仕り、只今本國に罷下るやうにござる。某に土産物などを調へいと申され候。町屋へ行て、土産物を買はうと存する。まづ急ぎませう。▲すりかやうに候者は、この邊のすつばにてござる。このほどは打ち續き、仕合の悪い儀ぢや。町屋へ出でて、仕合を致さうと存する。▲田舎者はあよ、出いたり〜、いろ〜の賣物があるよ。この張



すつばーもと忍  
びの者を云ふ、  
こもなるはごま  
のはひの類也

たづさはつて  
かくりあうて

してやりませう  
—とつてやろう

櫛箒—櫛の垢を  
取去る道具

子いくら。やあ、それは高いの。ま、まつと負きや。いや、ならぬ。はつて、負きやらい  
 での。▲サリやあ、あれに田舎者と見えて、何やらわつぱと申す。見れば、黄金作の太刀  
 を持つて居る。ちとたづさはつて見ませう。▲田舎者亭主、此所にあるは何ぞ。何、起上  
 小法師ぢや。子供達の土産にこれが好からう。値は幾らで。やあ、何も高いの。さう云  
 はすと、負けてお賣りや。これはいかな事、人の後へ何者やら来て、此太刀に目を懸け  
 て、うろくするが、好かぬ奴ぢやまでい。まづ爰許をすかしまして、上の町へ行って買  
 はませう。▲サリ扱々利口な奴ぢや。これ、騙されまい。いや、何卒して、あの太刀をして  
 やりませう。▲田舎者はあ、この店も、見事な店の。この櫛箒は幾らぞ。やあ、下町も高  
 いが、上の町も高いまでい。まつと負けて賣りや。是非とも負きや。平にく。これ  
 は何者ぞ。▲サリ何者とは。おのれは何者ぞ。人の大事の太刀に手を掛くるぞ。▲田舎者こ  
 れは如何な事。人のとりなはを己が腰へ結びつけて、人の太刀に手を掛くるとは、おほ  
 きい盗人めぢや。晝強盗。出合へく。▲サリ人の佩いて居る太刀を、抜いて取らうと

水掛合—所謂水  
掛論にて曲直分  
明せざる也  
出所は備前—長  
船のこと  
長光—藤原姓左  
近將監とて長船  
の一派也、鎌倉  
末葉の人以下代  
代あり

する。晝強盗よ。出合へく。▲目代やいく、これは何事ぞ。▲田舎者はつ、これは  
 所の目代様ではござりませぬか。▲目代おう、目代にてあるが、汝等は何事を仕る。  
 ▲田舎者はつ、目代様ならば、聞かつしやれて下されい。私が主は遠國の者でござる。買  
 物を仕れと申し付けられて、この店で買物を仕る所へ、この盗人めが、私の持つて居り  
 まする太刀のとりおびを、己が腰に結びつけて、私を盗人ぢやと申しまする程に、聞き  
 分けて下されませい。▲サリ扱々、嘘を云ふ盗人めかな。この太刀は私の太刀でござる。  
 買物を致しまする處へ、あの盗人めが、太刀を抜いて取らうと致しまする。きつと仰せ  
 付けられて下されませい。▲目代これはどちらも埒が明かぬ。身がきつと埒を明けてとら  
 せう。その内、太刀を身が預らう。▲田舎者、サリ畏つてござる。▲目代 兩方水掛合のやう  
 に云うては、埒が明かぬ。身が分別で、明けてとらせう。やいく、田舎者、この太刀の  
 出所銘は何にてあるぞ。▲田舎者それは易い事でござる。私の太刀でござる處で、よく存  
 じてござる。▲目代さらば云へ。▲田舎者まづ、出所は備前でござる。銘は長光、ながは長、

中から云々一揃  
物とせんと也  
難き故中人の

みつは光でござる。あの盗人が知つたか。問はつしやれて下されい。▲目代 やい、あの者は、太刀の出所、銘を存じてあるが、汝も申せ。▲ナリ はつて、私が太刀でござりまする物を、それを存せぬ者がござらうか。▲目代 早う申せ。▲ナリ まづ、出所は備前でござる。銘は長光、ながは長、みつは光でござる。▲目代 これは不思議な事ぢや。兩方ながら同じよに申す。不思議な事ぢや。抜いて見ませう。はあ、かれらが申す如く、備前長光でござる。不思議な事ぢやまでい。やい田舎者、して又、肌は如何様にあるぞ。▲田舎者 はつ、肌は、霜月師走の氷の上、薄雪がちらりくくと、降りかよつたが如くでござりまする。これをばあれが、え知りますまい。▲目代 やい、其處な者、あの者は肌を申してあるが、汝も急いで申せ。▲ナリ 彼の盗人めさへ存じましたものを、太刀の主が、それを知らぬと云ふ事がござりうませうか。▲目代 急いで申せ。▲ナリ まづ、肌は、霜月師走の氷の上へ、薄雪がちらりくくと降りかよつたる如くでござりまする。▲目代 やい、田舎者、兩方ながら同じやうに申す。これでは埒が明かぬ。とかくこの太刀は、中から身が太刀にせう。

高聲高一わざと  
重ねてふ語法

▲ナリ あゝ尤でござる。あの盗人のゆるに、難義をかけます。その代りに鞆と柄とは、目代様に上げませうほどに、中な身は、某に渡さつしやれませい。▲田舎者 これはかよる迷惑でござりまする。私の、今合點がまるつてござる。私は田舎者で、何を申せども、高聲高にござるによつて、かれが聞き取つてさやうに申すと存じます。今度は寸の長さ、を彼がえ聞かぬやうに、叫いて申しませう。聞かしやれて下されい。▲目代 これもかうぢや。然らば寸尺を申せ。▲田舎者 はつ。お耳を寄せさつしやれて下されい。寸は二尺五寸でござりまする。▲ナリ 南無三寶、叫いてぬかいた所で、え聞かなんだ。何とせう。知らぬまでい。▲田舎者 えい、今度はえ聞かまい。疾うから叫かうものを。▲目代 やい、あの者は寸を申してあるが、汝も寸を申せ。▲ナリ 畏つてござる。▲目代 さあ申せ。▲ナリ 備前でござりまする。▲目代 それは出所の事、寸尺を申せ。▲ナリ 長光でござる。▲目代 それは銘、寸尺を申せ。▲ナリ みつはひかる、長はながいでござる。▲目代 こよな狼狽者めが、寸を申せ。▲ナリ 霜月師走の薄氷でござる。▲目代 狼狽者、寸をぬかせ。▲ナリ ちらりくくと、

と降る所でござる。▲目代扱はすりに相極つてある。一寸もやるまい。▲ナリ御免なつて下されい。▲目代御免なれとは。一寸も遁すまいぞ。▲ナリ御免く。▲目代、田舎者どつこへ。やるまいく。

八腹たてず

三人 庄屋 長袴、小き刀  
月行事 半袴  
僧 頭巾、衣、數珠

月行事 月番の世話役

草堂 寺のこと

▲庄屋 罷出でたるは、所の庄屋でござる。ちと談合をする事がござる程に、月行事を喚び出しませう。月行事殿ござるか。▲月行事 えいこよな、何と申うて、出さしやれてござるぞ。▲庄屋 いやその事でござる。彼の草堂の事につけて參つてござる。▲月行事 まことにいつぞや仰しやられたが、あれは明き寺にして置いてはなりませんまい。似合はしい御坊はござりませぬかいの。▲庄屋 いや、身共が方にもござらぬ。某が思ふに、こなたと連れ立ちて、鎌倉海道へ參り、似合はしい御坊の通りやるならば、呼び掛けて据ゑうと存するが、月行事殿。▲月行事 これが一段でござる。▲庄屋 さあ、したら、ござれ。一段これが好きさうにござる。この所に待ちませう。▲僧 南無阿彌陀佛。▲庄屋 いや、あれへ好ささうな御

風に木の葉の云  
云一所定めぬ意  
三界一慾界色界  
無色界也、又三  
千世界の義にも  
云ふ

坊が行かるよ。問うてごらんぢやれい。▲月行事 心得ましてござる。しよ、まをし。▲僧 此方の事でござるか。▲月行事 なかく。してこなたは、どれからどれへござる坊様でござる。

▲僧 身共のこれからどれへと申したら、風に木の葉の散る如くでござる。▲月行事 意は。▲僧 三界に家がござらぬ。▲月行事 いや、近頃殊勝にござる。こなたをば呼びかける、別義でござらぬ。在所も、百軒ばかりの在所でござる。其所の草堂に足を休めさつしやれますまいかと存じて、呼びかけましてござる。▲僧 いや、それこそ望む所でござる。▲月行事 はてさて、過分にこそござれ。それに待たつしやれ。庄屋殿に引合せませう。なうく庄屋殿、あの御坊の草堂へ坐らうとおつしやる。これへ出て遇はつしやれい。▲庄屋 いや、身共がやうなる在所へ坐ると仰しやつて下さるよ。辱なうござる。▲僧 して、庄屋殿でござるか。萬事の義を頼みまする。▲庄屋 何がさて、御坊のことならば、何とやうな御用なりとも、承らう。▲僧 辱なうこそござれ。▲庄屋 いや、又御坊様も頼まねばならぬ。▲僧 出家に似合うたことならば、何なりとも仰しやれませい。▲庄屋 いやはや、別の事ではご

ざらぬが、子供を數多持ちてござるが、いろはなども、ちと教へさつしやれて下されまする様に、是を頼みまする。▲僧 何がさて、坊主に似合うた事でござる。▲庄屋 して、こなたのお名は、何と申しまするぞ。▲僧 いや、それに待たしやれい。やれさて、師匠をとらぬ坊主でござれば、終に名を付きませぬが、何と致さうず。あよ、思ひつけた。檀那衆が、腹を立てぬ坊主ぢや、正直な坊主ぢやと仰しやつてござる。是を申そ。▲庄屋 なうく御坊、して、名は何と申すぞ。▲僧 身共が名は、腹立てずの正直坊と申す。▲庄屋 さてもく、殊勝なる御坊かな。それに待たしやれい。なう月行事殿、あの御坊の名は、腹立てずの正直坊と云ふといの。▲月行事 なう庄屋殿、何程さうおしやるとも、生身に腹を立てぬといふ事はあるまい。繰返しく名を問うたらば、どこぞでは腹を立ちやうず。それに立てずば、正直坊よと、まづ行て身どもが、問うて來うず。なう御坊様、こなたの名は、何と申しまするぞ。▲僧 いや、庄屋殿に申しました。▲月行事 いや、身共も承りたうござる。▲僧 腹立てずの正直坊と申す。▲月行事 あよ、出家に似合うた名でござる。なう庄屋殿、行

せが立つー腹に  
對して背が立つ  
と口合を云ふ也

てこなたも、ま一度問うてござれ。▲庄屋なう御坊、いや先程に承りたが、忘れまして  
こなたの名は、何と云ひまするぞ。▲僧はて、腹立てずの正直坊と云ふわいの。▲庄屋そ  
りや、腹立てるわ。▲僧いや、腹は立てぬ。▲庄屋それや、腹立てるではないか。▲僧腹は  
立てぬいの。せが立つわいの。▲庄屋何でもないこと、とつとと行かませ。

脛置一名芥川

芥川一攝津  
歩を運ぶ一參詣  
に行く

九脛 薑

二人 しゃうが 半袴  
ちんば 半袴

▲下京の者 罷出でたるは、下京邊の者でござる。某芥川の天神の信仰致し、月次歩を運  
ぶやうにござる。まづそろく參ろ。▲上京の者 罷出でたるは、上京邊の者でござるが、  
芥川の天神の信仰致し、常に歩を運ぶやうにござる。まづそろく參ろ。や、あれへ行  
かるよは、天神參りさうにござる。呼び懸け、道連に致さうと存ずる。しよ、申し。▲下京の者  
こなたの事でござるか。▲上京の者 なかく。▲下京の者 何の御用でござるぞ。▲上京の者 いや  
見ますれば、こなたも天神參りさうにござる。道も寂しうござる程に、連立たうと思つて  
の事でござる。▲下京の者 身共も、連欲しいと存ずる所に、一段でござる。さあくござ  
れく。▲上京の者 參るく。▲下京の者 して、何と、道すがら淋しうござるが、何ぞ、慰事が  
して參りたうござるの。▲上京の者 されば、何が好うござるの。▲下京の者 思ひ付けまじた

あれまづー原本「あれ申づ」とも讀むべし然らば「あれ申さうぞ」か

あしー蘆に足を掛く

わ。碁を打ちませう。▲上京の者 いやこれは、歩きくは、どうもなりますまい。▲下京の者を、こりやなりませんまい。▲上京の者 あよ、思ひ付けましたわ。口慰をまるらう。▲下京の者 いや、これが一段でござる。どちらからなりとも、出た方から申し得でござる。▲上京の者 かなか。▲下京の者 いや、彼奴めは跛でござる。あれまづ。なうく、早出てござるわ。

▲上京の者 出ましたか、▲下京の者 なかく。即ち、これが津の國でござる。津の國について致そ。▲上京の者 一段好うござる。▲下京の者 かうもござらうか。▲上京の者 何と。▲下京の者 津の國の難波入江にあらねども、あしのもとこそをかしかりけりと、致してござる。▲上京の者 はあ出来ました。▲下京の者 好うござるの。▲上京の者 なかく。▲下京の者 この句は、津の國も入らず、なには入江も入らず、あしのもとで持った句でござる。▲上京の者 おう、いかう出来たと思つて御感でござる。頓て身共も、出たら申そのう。程なう、これは芥川へ著つてござる。はれ、いかい高水ぢやが、越されますまいほどに、これから、いざ、拜うで下向致そ。▲下京の者 神は見透し、これがようござる ▲上京の者 さあく、拜ましやれい。

しやうがー手のなきものを生菱と云ふ

▲下京の者 心得てござる。▲上京の者 なうく、こなたは又、片手ではなぜに拜ましやる、

▲下京の者 いや、兩手で拜うだも、片手も、心同じこととでござる。▲上京の者 さうでござる。そろく、下向いたそ。さあく、ちつと今度は又、こなた先へござれ。▲下京の者 心得ました。▲上京の者 ござれく。彼奴はしやうがさうにござる。これを返しに申さうず。なうく、先程の返歌を致そ。▲下京の者 して、出ましたか。▲上京の者 なかく。▲下京の者 何と。▲上京の者 即ちこれは、芥川でござる。芥川につけてやりませう。▲下京の者 ようござる。▲上京の者 かうもござらう。▲下京の者 何と。▲上京の者 芥川ちりかき流す手を見れば、あしのも

とよりなほぞをかしきと、詠みました。▲下京の者 はあ、一段出来ました。▲上京の者 ようござるの。この句は、芥川もとりて捨て、とかくこの、ちりかきながすので持った句でござる。▲下京の者 其方は指さし手さしをして、をかしさうなが、して、人をば片輪かと思ゆるか。▲上京の者 いや、片輪にはあるまいが、そちらの手は、しやうがではないか。

▲下京の者 いや、しやうがではない。▲上京の者 どれ、したら見しや。▲下京の者 これく。



はじかみー生菱の古名

▲上京の者 はて、率爾なことを申したなう。この手をば捕へて居るほどに、そちらの手を見しや。 ▲下京の者 して、こちらは何ぢやと思やるぞ。 ▲上京の者 しやうがぢやわ。 ▲下京の者 しやうがではない。 ▲上京の者 何ぢや。 ▲下京の者 物ぢや。 ▲上京の者 何ぢや。 ▲下京の者 はじかみぢや。 ▲上京の者 何でもない事。とつとと行け。

緋繩一名緋繩

十 緋繩

三人 殿 長袴、小き刀  
冠者 半袴  
刑部三郎 長袴、小き刀

刑部ー原本形部とあれど今刑部に改む

立板へ水云々ー能辯の聲

▲庄太夫 罷出でたるは、心も直に無い者でござる。思ふ仔細がござるほどに、のさ者を呼び出し、申しつけうと存ずる。あるかやい。 ▲冠者 御前に。 ▲庄太夫 念なう早かつた。汝は此狀を持つて、刑部三郎が所へ行て来い。 ▲冠者 畏つてござる。口上はござりませぬか。 ▲庄太夫 いや。委しいことは狀の内にあるほどに、急いで行て参れ。 ▲冠者 畏つてござる。 ▲庄太夫 え。 ▲冠者は。扱もく、頼うだる人は、立板へ水を流すやうに、物を言ひ付けられます。まづ参りませう。や、程なうこれにござる。ものも。御案内。 ▲刑部三郎 やら奇特や。表に案内がある。誰も出ぬかい。え、太郎冠者か。ようこそ来たれ。待ち兼ねて居たわいや。 ▲冠者は。御狀が参りましてござる。 ▲刑部三郎 いや、狀までも及ばぬぞ。ま

軽物一絹物

しさいて一仕掛  
けて中止して

づ這入れ。▲冠者 いや、お返事をなされずば、歸りませう。▲刑部三郎 いや、汝を去なす事はならぬ。まづ這入れ。▲冠者 いや、それは何とした事でござる。▲刑部三郎 汝が頼うだ者と、某と、勝負得をしたれば、汝までをば、打込まれたによつて、某が所へ質に取つたほどに、まづ這入れ。▲冠者 何と仰しやるぞ。物の質などと云ふものは、財寶たからか。軽物の類などこそは取ると云ふ事がある、人を質に取ると事はあるまい。かまへてやささつしやれたら聴くまい。▲刑部三郎 やい、冠者、な其様にも腹立てそ。頼うだ者に使はれうよりも、某に奉公をしたらば、末々は目をかけてとらせう。▲冠者 いやはや、この様に申すのも、御前にうらみは、そつともござらぬ。頼うだ者に恨がござる。某に、うかうぢやとおしやるならば、恨もござらぬが、騙しておこされたと思へば、腹が立ちます。▲刑部三郎 おう、冠者が腹立つるは尤ぢやが、己に奉公を爲い。随分な、目をかけてとらせうぞ。▲冠者 畏つてござりまする。は、これは近うに、普請をなされたと見えました。▲刑部三郎 それよく。▲冠者 まだ此處には、これは壁下地をしさいてござるが、何

もつけな事一思  
ひもよらぬこと  
跡式一財産  
ちのあまりに一  
諺に末の子は血  
の餘り  
坪の内一庭

とした事でござりまする。▲刑部三郎 をよ、われはよい所へ氣がついた。繩が足りいで、しさいて置いたほどに、繩を縛うてくれい。▲冠者 畏つてござる。▲刑部三郎 こりやく、この藁で縛へ。▲冠者 心得てござる。これは扱、まことにひさぐも使はうする人が、ようこそ来た、などと云うて、酒杯などとあらうするものが、はや、繩を縛へと云はるよ。致しやうがござる。あ痛く。▲刑部三郎 やい、何としたぞ。▲冠者 いや、手中風が起りました。▲刑部三郎 はて扱、もつけな事ぢや。して、それは、いつも起るか。▲冠者 なかなか。身どもが親が、子を三人持つてござるが、兄三人には、跡式をやられます。身どもは、ちのあまりに可愛いが、取らせう物がないほどに、せめて、中風なりと取らせうあつて、くれうてござる。▲刑部三郎 して、それは、どうも癒しやうはないか。▲冠者 いや遊んでさへ居れば、癒りまする。▲刑部三郎 いや、それこそ易いことよ。遊ばして置かうほどに、急いで癒せ。▲冠者 はあ、癒りましてござる。▲刑部三郎 はて扱、嬉しやな。やいやい、某がまだ坪の内は見まいな。▲冠者 いや、まだつひに見た事がござりませぬ。

かだ—不服の意

▲刑部三郎 来い。見せう。こりやく。▲冠者はあ、見事な花でござりまする。▲刑部三郎 よい花ぢやな。▲冠者 いやはや、申す所もない花でござりまする。▲刑部三郎 やい、太郎冠者、花に鳥がついたわいやい。あれを追うてくれい。▲冠者は、いや私は、鳥をつひに追うて見た事がござりませぬ。▲刑部三郎 ほうくと云うて追へば、よいわいやい。▲冠者 畏つてござる。扱もく、人を使ふ人の智恵は違うてござる。手で爲ることに、かだを申せば、又口で云ふ事を申しつけらるよ。これも致しやうがござる。口中風く。▲刑部三郎 やい、冠者。それは何として、口が歪うだぞ。▲冠者 いや、これも中風でござりまする。▲刑部三郎 いや、それもどうぞ、癒しやうがないかいや。▲冠者 鳥を追はずば癒りませう。▲刑部三郎 いや、追はせまいほどに、急いで癒せ。▲冠者 畏つてござる、▲刑部三郎 癒つたか。▲冠者 なかく。癒りました。▲刑部三郎 はてさて、嬉しや。さうあれば、汝が頼うたる者に、きはめることがあるほどに、供に來い。▲冠者 畏つてござる。▲刑部三郎 來い。や、ほどなうこれぢや。汝は其所に待つて居れ。▲冠者 畏つてござる。▲刑部三郎 ものも。御案

きはめること—算用すべき事

内。▲庄大夫 やら奇特や。案内がある。え、刑部三郎 殿か。何と思うて出さつしやれてござる。今朝は、冠者を進めてござるが。▲刑部三郎 さればく、冠者について参つた事でおぢやる。あのやうな病者をおこして、迷惑をさしやる事ぢや。繩を縛はすれば、手中風が起つたといふ。鳥を追はすれば、口中風が起つたといふ。ひよんな者をおこしやつた。▲庄大夫 はて、彼奴はその様な者ではござらぬが。して、連れてはござらぬか。▲刑部三郎 いや、門に待たせて置いておぢやる。▲庄大夫 え、一段でおぢやる。物蔭からころんぢやれい。身共がどうぞして、繩を持つて居て、彼奴に縛はして見せうほどに、こなたよい時分に出さつしやれて、持ち代へて居さつしやれい。さうして折檻の加へて、つかまつしやれい。▲刑部三郎 や、これが一段でおぢやる。急いで呼うで、縛はしやれい。▲庄大夫 やい、太郎冠者、何故にわれは這入らぬぞ。▲冠者 え、何を仰しやる。よう博打の質に、おれを遣らつしやれたなう。▲庄大夫 いや、われが腹立つるも道理ぢや。最早やらぬほどに、堪忍のせい。▲冠者 何とさしやれましたぞ。▲庄大夫 われが叱るすれども、さる者と今

うち返しー再び  
勝つこと

緋一錢を貫くこ  
と百緋は百文さ  
し貫緋は一貫文  
さし也

未申ー西南の方  
角也、斜の意

日勝負をしたと思へ。この近年ない、うち返しやうして、刑部三郎が所へも、最早算用もする。▲冠者いかほど、して、勝たつしやれましたぞ。▲庄大夫いや、何かは知らず、座敷は亂し錢で、山の如くぢや。▲冠者はあ、それは繋いで置かつしやれませいで。▲庄大夫いや、緋がなうて、え繋がんんだ。緋繩を緋うて呉れい。▲冠者畏つてござる。緋ひませうが、刑部三郎は何處に居られますぞ。▲庄大夫いや、裏の門から往なれた。▲冠者やあ、一段でござる。緋ひませう。▲庄大夫やいく、百緋に緋はずとも、貫緋に緋へ。己が持つて居らうほどに。▲冠者申し殿様、持たつしやれませい。扱もく、あの刑部三郎と云ふ奴は、憎い奴でござる。まづ、酒杯などは仕居らいで、繩を緋へと云ひましたによりて、なにが、手中風ぢやと云うて、緋ひませなんだ。鳥を追へと云ひましたほどに、なにが、口をば未申へ歪めて、かうして見せたと思はしやれませい。え、刑部三郎様でござりまするか。あよ、許さつしやれませい。はあ、許さつしやれませい。▲刑部三郎 憎い奴の。やるまいぞく。

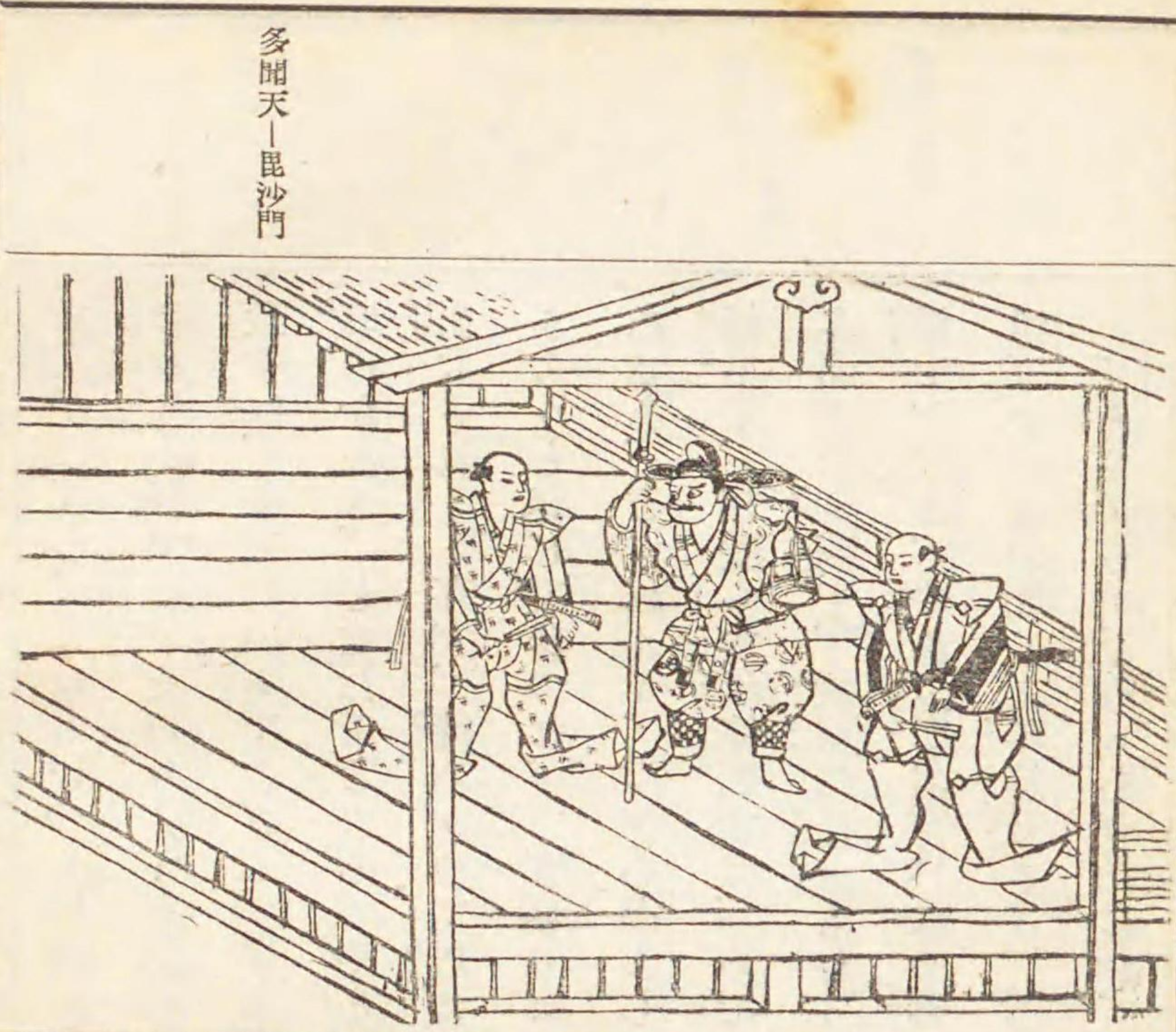
續狂言記

卷之一

一 連歌毘沙門

三人 シテ毘沙門 唐冠 毘沙門面かけ、鉾持、  
アト男二人 長袴、のしめ、小き刀、扇持

▲初アド これはこの邊に住居する者でござる。まこと一日々々と送るほどに、今日は早、大晦日になつてござる。それにつき今夜は、鞍馬の多聞天へ年籠いたす。當年も相變らず参らうと存する。又某ばかりでもござらぬ。こよにいつも同道致



多聞天ー毘沙門

御前—廣前

す人がござる。これもいつもの事でござるほどに、待つて居らるよでござらう。誘うて  
 参らうと存ずる。そりりくと参らう。道行やれくと、毎年々々相變らず、かやうに年籠  
 致すは、めでたい事でござる。参る程にこれぢや。ものもう。内にござるか。▲アド表に  
 案内がある。どなたでござる。やあ、ようこそ御出なされた。定めて今夜は、年籠に御  
 出なされうと存じ、待ちかねて居ました。▲初アド仰せらるよ通でござる。待ちかねてご  
 ざらうと存じて参つた。いざ参りましょか。▲アドなかく。御供致しましょ。▲初アドさ  
 あさあ、ござれく。▲アド心得ました。道行▲初アド何と思召す。こなたも身共も、互に  
 無事で、相變らず年籠致すは、めでたい事でござるなう。▲アド仰せらるよ通でござる。  
 多聞天の御蔭で、次第に仕合も好うなつて、このやうな嬉しい事はござらぬ。▲初アド左  
 様でござる。やあ、参る程には、はや御前でござる。拜ませられ。▲アド心得ました。▲初アド  
 扱、いつもの如く、年籠致さう。▲アド好うござる。ゆるりとござれ。ちとまどろみまし  
 よ。▲初アドあゝ、あらありがたや。南無多聞天く。扱もくありがたや。やあ、夜が

ありのみ—梨の  
實のこと

明けた。起さう。申しく、夜が明けた。いざ下向致さう。▲アドまことに夜が明けまし  
 た。下向致さう。▲初アドさあく、ござれく。▲アドなうく、夜前こなたは夜半の頃、  
 何やらわつばさつぱと仰せられた。何事でござつた。▲初アドいや、別のことでもござら  
 ぬ。夜前は、多聞天より、御福を下されてござる。▲アドそれはめでたい事でござる。何を  
 下されたぞ。▲初アド福ありのみを下されてござる。▲アドそれはこなた一人に下されたで  
 はあるまい。兩人参るからは、兩人の内へと下つた物ぢや。まづそれは此方へおこさ  
 せられ。▲初アドいやく、身共一人に下された。やる事はなりませぬ。▲アドどうでも取  
 らねばならぬ。▲初アドその義なら、も一度、多聞天の御前へ戻りて、御前で連歌をして、  
 その句柄によつて、どれへなりと取らうと思ふが、何とあらう。▲アドこれは一段ようご  
 ざろ。さあく、戻りましょ。早これでござる。下にござれ。さらばこなたから連歌をな  
 され。▲初アドいやまづなされまいか。▲アド是非こなたなされ。▲初アドされば、何と致し  
 て好うござろぞ。かうもござらうか。▲アド何とでござる。▲初アド毘沙門の福ありのみと

くらまぎれ一暗  
まぎれに鞍馬を  
掛く  
むかでくひけり  
一割かてに蜈蚣  
を掛く、蜈蚣は  
毘沙門の使はし  
め也  
一セイ一一聲は  
謠節の名

せりあふ一尋ふ

聞くからにと、致してござる。この下の句を付けさせられ。▲アドされれば何と致さうぞ。くらまぎれよりむかでくひけりと、致してござる。▲初アドこれはめでたう好う付けました。いざ、吟じて見ませう。▲二人毘沙門の福ありのみときくからに、くらまぎれよりむかでくひけり。▲シテ一セイびしやもの、光を放つてところから、くらまぎれより現れたり。▲二人これは異香薫じて、只ならぬ御方でござるが、こなたはどなたでござるぞ。▲シテ身共は、汝らが常々信仰する多聞天、現れ出でてあるぞとよ。▲二人はあ、有難うござる。まづこれへ御來臨なされて下されませ。▲シテ床几をくれい。▲初アド畏つてござる。これへお腰掛けられませ。▲シテやい、汝等は毎年々々相變らず、年籠をするほどに、富貴になして取らせうぞ。▲初アド有難うござります。▲シテ汝も樂しうなして取らせうぞ。▲アドそれは辱うござります。▲シテそれにつき、夜前福ありのみを與へたれば、わがの人のとせりあふ、それをこちへおこせ。好いやうに配分にしてやらうぞ。▲アドそれ、早う上げさしませ。▲初アドこれでござります。上げます。▲シテこれへおこせ、

さつくり一梨を  
割る音  
酢だまり一た  
れ、梨の汁をい  
ふ  
毘沙門云々一以  
下曲がかり

けなりや一羨し

汝等は小刀があるが。▲二人いや、小刀は持ちませぬ。▲シテたしなみのわるい者共ぢやな。それなら、この銚で割つてやらうが、これで割つたら鑄が來う。研賃をするか▲初アドそれほどの事はいたしまよ。▲シテこれは戲事ぢや。これはなんばの銚と云うて、鑄びる銚ではをりない。さらば配分をしてやらう。いで、ありのみわらんとて、なんばのほこを取直し、まん中に押し當て、さつくり。扱も、片割も無う好う割れた。さあ取れ。汝も取れ。餘り見事なありのみで、酢だまりが出來た。これは、多聞天が得分にして食べう。扱最前聞けば、なにやら連歌をした。その連歌はいかに。▲二人謠 毘沙門の、福ありのみと聞くからに、くらまぎれよりむかでくひけり。▲シテ謠 毘沙門、連歌のおもしろさに、舞動有 おもしろさに、惡魔降伏、災難をはらふ矛を、汝に取らせけり。▲アドやら、けなりや、けなりやな。われらも福をたび給へ。▲シテほしがる事こそ尤なれくと。▲三人謠 兜を脱いで汝に取らせ、これまでなりとて毘沙門天は、この所にこそ納りけれ。

傘 秀句大名 秀句

二 秀句大名

三人

シテ大名 のしめ、素襖、大臣烏帽子、小さ刀  
アド男二人 半袴、腰帶

▲シテ 八幡大名。此中の彼方此方の御參會は、夥しい事でございます。それにつき太郎冠者を喚び出し、尋ねることがある。やい、太郎冠者あるかやい。▲冠者はあ、御前に居ります。▲シテ 汝を喚び出す事、別の事ではない。此中の彼方此方の御參會は、夥しい事でないか。▲冠者 御意の通、夥しい事でございます。▲シテ それにつき、汝に尋ねる事がある。各の一所に寄つて、何やら云うてどつと笑ひ、笑ひ召さるは何事ぢや。▲冠者 あれば秀句を云うて、それが可笑しいとあつて笑はせられます。▲シテ して、汝は、その秀句を知つて居るか。▲冠者 いや、私は存じませぬ。▲シテ 身共も秀句を稽古して云ひたいが、何としたりよかる。それなら汝は、海道へ行て、秀句を知つた者が有らば抱へて來い。▲冠者 畏つてござる。▲シテ 最早行くか。▲冠者 参ります。▲シテ 頓て戻れ。▲冠者 はあ。▲シテ えい。▲冠者

秀句 口合、洒落

秀句 秀句を云ふ者を直に秀句と名づけ云へる也

やれ、俄な事を仰せつけられた。海道へ参り、何卒して抱へて参らう。道行まことに今までは、私一人で暇もござらぬ。秀句を抱へさせられたら、ちと休息致さう。やあ、参るほどに、海道ぢや。まづことに待ちましょ。▲遠國者 罷出でたる者は、遠國方の者でございます。某 上方を見物致さぬほどに、この度都へ上らうと存ずる。又好ささうな所があらば、奉公をも致さうと存ずる。まづ、そりりくと上らう。▲冠者 やあ、これへ好ささうな者が参つた。言葉をかけて尋ねましょ。なう、これ。▲遠 此方の事か。何事でございます。▲冠者 なかく。そなたのことぢや。そなたはどれからどこへ行く人ぞ。▲遠 私は遠國の者でございます。奉公の望で都へ上ります。▲冠者 それは幸の事ぢや。某が頼んだ人は、お大名ぢや。これへ申して出さうが、只今でもをりやらか。▲遠 なかく。参りましょ。▲冠者 それなら、さあく、をりやれ。▲遠 参ります。道行 ▲冠者 假初に言葉をかけて、よい縁であらう。▲遠 これは定めて、他生の縁でございますらう。▲冠者 なう、そなたは、何と秀句がなるか。▲遠 されば、秀句は、この擔けて居ます傘 についてなら、

他生の縁 前世からの因縁

一つ二つは申しましたよ。▲冠者 それは一段の事ぢや。御意に入るであらう。やあ、何かと云ふうちにこれぢや。これに待たしませ。同道した通り申さう。▲遠 心得ました。▲冠者 申ししく、頼うだ人ござりますか。▲シテ やあ、太郎冠者が戻つたさうな。戻つたかく。▲冠者 只今歸りました。▲シテ 何と、秀句をいふ者を抱へて来たか。▲冠者 なかく。抱へて参りました。▲シテ やい、始あることが終もある。くわを云はう。答へ。▲冠者 畏てござる。▲シテ やい、太郎冠者、居るか。▲冠者 はあ。▲シテ 居るか。▲冠者 御前に。▲シテ 今の聲を聞かうぞ。▲冠者 なかく、承りましょとも。▲シテ 行て云はうは、秀句に、遙々の所よ来た、これへ出て目見をせい、その上秀句を聞かうと云うて、これへ出せ。▲冠者 畏てござる。なう、居さしますか。▲遠 これに居ります。▲冠者 只今頼うだ人、廣間へ出させられた。あれへ出て、目見をめされ、その上秀句を聞かうと仰せらるゝわ。▲遠 心得ました。▲冠者 さあ、出さしませ。秀句これへ出ましてござる。▲シテ これが秀句か。遙々の所ようこそ来たれ。早う秀句を聞きたい。わごりよはどれから来たぞ。▲遠 島

島一傘の中骨を加賀にてはしま骨と云ふとぞ骨折つて一骨は傘の縁語也今も世話に傘屋の手間て骨折つて叱られたと云ふかみげ一上氣と紙とを掛くえ申すまい一得に柄を掛く

早速の利いた一傾智の働く

から参つた。▲シテ 遙々大義ぢや。まづ早う秀句が聞きたい。▲遠 骨折つて参つた。▲シテ 骨折であらうと、秀句云へ。▲遠 かみげに候。▲シテ かみげとは。▲遠 え申すまい。▲シテ 退り居ろ。やい太郎冠者、彼奴は秀句を云ふかと思へば、何やらかみげに候、え申すまいとぬかす。あの様な奴は、何の役に立つまい。早ういなせ。▲冠者 こなたには、何も御存じないによつてござる。あれが申す事は、あの傘についての、皆秀句でござる。島から参つたと申すは、傘にしまと申す所ござる。かみげは、紙の事、皆傘についての秀句でござる。▲シテ 扱はさうか。恥かしや。何も知らぬ者ぢやと思つて、あれが笑うであろ。何としやうぞ。行て云はうは、秀句に、側で使はうと思つて、心を引き見ん爲、刀の柄に手をかけたれば、傘で受けて外したは、早速の利いた事ぢや。堪忍するなら扶持をせう。その上まだ秀句を聞かうと云うて、是へ出せ。▲冠者 畏つてござる。なう、居りやるか。▲遠 これに居ります。▲冠者 秀句に、頼うだ人の仰せらるゝとは、側近う使はうと思つて、刀の柄に手をかけたれば、傘で受けて外したは、早速なことぢや、堪忍をする



扶持一抱へて祿を遣すこと

辱う一傘を擲ぐ事よりの口合也

すかさう一外さう

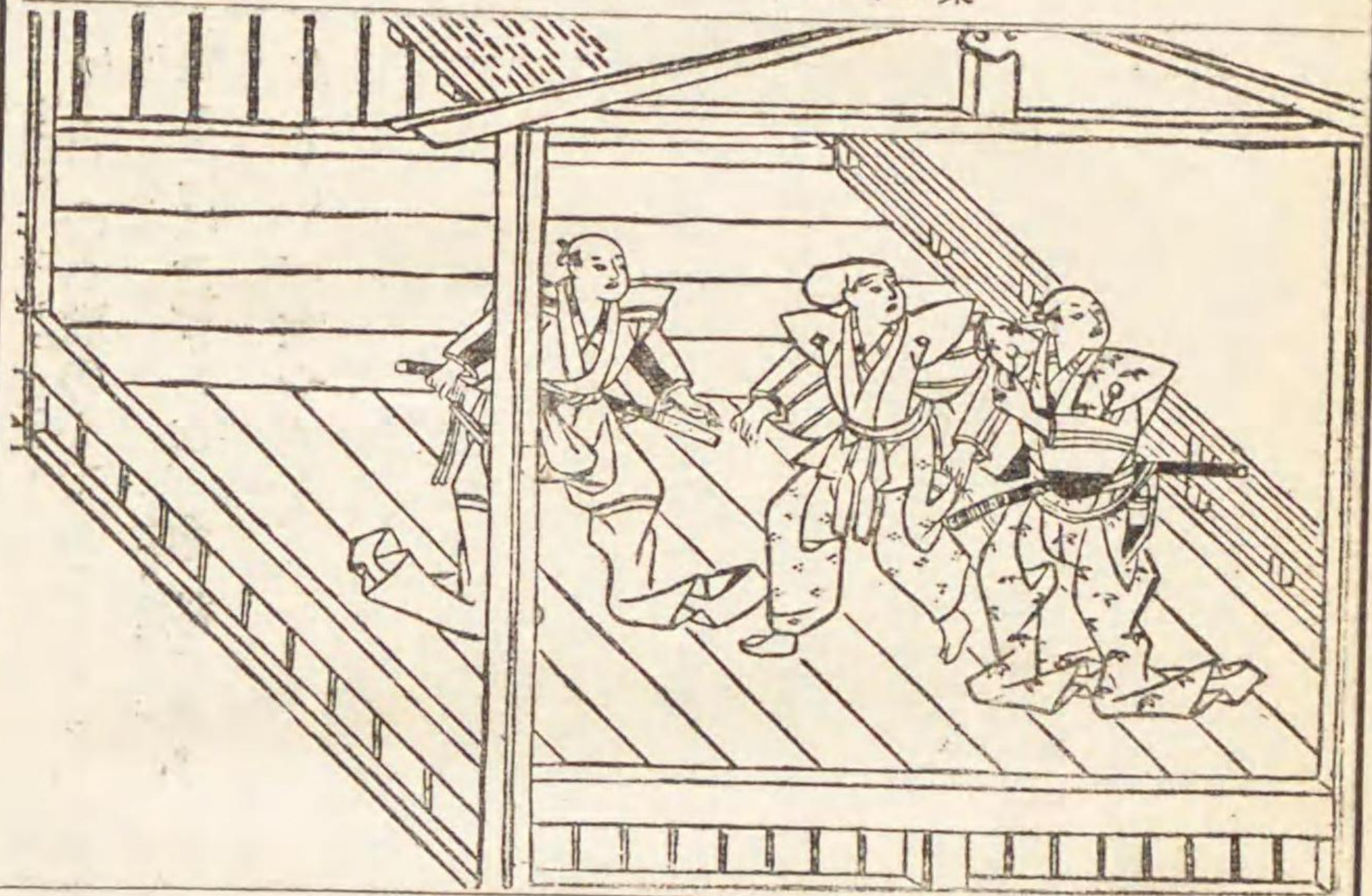
なら、扶持をなされうす。又秀句を聞かうとある。あれへ御出やれ。▲遠畏つてござる。  
 ▲シテ 秀句、最前は肝潰したであらう。今の秀句は聞き事ぢや。さあ、又秀句を云うて聞かせい。此刀は、秀句の出来た褒美に取らずぞ。まだ秀句を云へ。▲遠これは思も寄りませぬ。御刀を下され、辱うござる。▲シテ 扱もく、面白い。傘について、辱うござるは出来た。をかしい秀句ぢや。この上下小袖を脱いでやつて、秀句聞かう。▲冠者これは御無用でござる。▲シテ 何が惜しかる。これ、この上下小袖は著古したれども、これもそちにやるぞ。▲遠これは又、重ねく拜領致しありがたうござる。▲シテ 扱も、をかしい事かな。傘の秀句にありがたいとは出来た。扱もく、秀句はをかしいものぢや。▲遠なう、太郎冠者殿、この傘は私が張りました。これを貴方へ上げますと云うて、上げて下され。▲冠者 心得た。▲遠 一段の仕合でござる。すかさうと存ずる。▲冠者 申し、これは秀句が手張にはりました傘でござる。差上げますと申します。▲シテ この傘をくれう筈はないが、何と申してくれ。合點が行かぬ。定めて、これ

寒いものぢや一衣類までも褒美に取らせたる後なれば也

は古の小歌の心であらうなあ。太郎冠者。▲冠者その歌は何と申します。▲シテ 小歌節 雨の降るにはござるな、傘故に名のたつに。扱もく、秀句といふものは、寒いものぢや。なう、寒や。

居机一昔猪首某  
と云ひし人姓に  
より居机と轉用  
せしとぞ、此の  
狂言古く耳引と  
云へり

頭をはらせらる  
る一はるは打つ  
也



三 居 机

三人 シテ居机 半袴、上下、腰帶、頭巾持  
アド男二人 長袴、算置腰に算袋下げ

▲シテ 罷出でたる者は、この邊に住居致す、居机と申す者でござる。爰に誰殿と申して、御出入致す御方がござる。これへ參れば、よう来たにあつて、御馳走はなさるれども、參る度々に、頭をはらせらるよ。何とも迷惑に存じて、このぢう、清水の觀世音へ、祈誓をかけてござれば、何と思召してか、この頭巾を下されてござる。これを著れば、定めてはらるよ時、痛う無いものでがなござらう。今日はこれを持つて、御見舞申さうと存ずる。急

頭巾一此の頭巾  
は隠れ袈の類に  
て隠形の驗あり  
とす

いで參らう。道行やれ、人には色々の癖がある。頭をはるといふは、悪い癖でござる。やあ、參るほどにこれぢや。ものもう。案内もう。▲アド 表に案内とある。どなたでござる。▲シテ いや、私 でござります。▲アド えい、居机か、ようこそ来たれ。何としてこの間は見舞はぬぞ。▲シテ されば、節々參りたう存じますれども、この如くに、參る度々に、頭をはらせらるよによつて、え參りませぬ。▲アド それはそちが悪い合點ぢや。憎う思うてははらぬ。可愛さが餘つてはる。心に掛けずとも、節々見舞へ。▲シテ 尤もこなたにはさやうでござらうけれども、世間から見まして、あの如くに頭をはられても、御出入申さねばならぬかと申します。この前が迷惑にござる。▲アド 兎角世間は何と云ふとも、かまはず再々見舞うてくれい。▲シテ やあ、頭巾を著ませう。▲アド 居机、これは如何な事。今これに居た居机が見えぬ。不思議の事ぢや。どちへ行たぞ。居机々々。▲シテ これは不思議な事でござる。この頭巾を著たれば、身共が姿が見えぬさうな。扱も調法な事かな。▲アド その許へ、居机は參らぬか。居机々々 ▲シテ さらば頭巾をとつて參らう。これに居

御指圖一家作の  
構へを云ふ  
輕薄一世辭追從

ります。▲アド えい、そちは何處へ行たぞ。▲シテ あれに人が逢はうと申しましたほどに、逢ひに参りました。▲アド 久しうて来て、逢ひに行くと云ふ事があるものか。とかく奥へ通れ。▲シテ 畏 つてござる。通りませう。▲アド やい、久しうで来たほどに、ゆるりと居て話をせい。▲シテ 心得ました。やあ、又頭巾を著ませう。▲アド これは如何な事、又見えぬ。何所へ行た知らぬ。居枕々々。▲算置 占ひ算。占の御用。しかも上手なり。うらやさんく。▲アド これへ一段の者が参つた。見て貰はう。▲シテ やあ、算置を呼ばるよ。見物致さう。▲アド なうく、これく。▲算置 此方の事でござるか。何事でござる。▲アド ちと見て貰ひたい物があるほどに、こちへ通らせられ。▲算置 畏 つてござる。これはこなたの御屋敷でござりますか。まづは目出度い御指圖でござる。五百八十年、萬々年も、御富貴御繁昌の御屋敷でござるよ。▲シテ これは如何なこと、算置が例の輕薄を申す。▲アド いや、そなたがその様におしやれば、身共も満足いたした。まづ下に居さしめ。見て貰ひたい事がある。▲算置 それは如何やうの事でござる。▲アド 失物でをりやる。見てた

ありやう有り  
やう也實正也

御祈禱一五き十  
の語路

もれ。▲算置 何時頃の事でござる。▲アド 只今の事ぢや。▲算置 何と、只今の事ぢや。これは知れました。生類でござらうが。▲シテ 扱も、彼奴は上手ぢや。疑もない生類ぢや。▲アド そなたは上手でをりやる。なるほど生類ぢや。とてもものことに、何處許に居るぞ。一算置 いてたもれ。▲算置 これは一算置かすばなりますまい。總じて、この失せ物と申すは、とつと置き悪いものでござる。さりながら、私の算は、違ふ事が無いと、何方にも仰せられ、私の名はいはずに、たゞありやうくと仰せられます。▲アド さうであらう。上手ぢや。▲算置 さらば一算置ませう。▲アド なうく、これはかはつた算でをりやる。▲算置 これは天狗の投算と申して、他の家にはござらぬ算でござる。追つつけて算を置き出しませう。▲アド 一段よかる。▲算置 一とく六がいの水、右七えうの火、三しやう八なんの金、四ぜつ九やくの木、御祈禱の土く。知れました。これはこなたの左の方にあるとござる。▲アド いやく、左の方には何も無い。又左に居て見えぬ者ではない。▲算置 それは何でござるぞ。▲アド 人でをりやる。▲シテ これは如何なこと。人ならば見えぬと云ふ事はご

きんこく云々  
金剋木と剋致し  
て、金木相剋に  
て見えぬとなる  
べし

ざるまい。この占の面に、確かさうござるが、まことに、こゝにきんこくもくと、こゝく致して見えぬ所がござる。たとへ目には見えすとも、捜して見させられ。居りませう。

▲アドそれなら捜して見よ。いや、何も居りないわ。▲シテ扱もく、危い事かな。既に捕へられうとした。ところを變へて見物致さう。一人の真中に居やう。▲算置不思議な事でござる。慥占の面に、左の方にあるとござるが、それなら、も一度置いて見ませう

▲アド一段よからう。▲算置今度置いたらば、慥に置き出ませう。大水出れば堤のよわり、大風吹けば古家のたより、何と聞えましたか。▲アド尤なことでをりやる。▲算置犬土走れば、猿木へ登る。鼠桁走れば、猫急度白眼む。にらむとあるによつて知れました。今度は彼奴が所變へて、この二人の間に居て、占の面を、しろく見て居るとござる。▲アドいや、見やれ。二人の間には何も無い。▲算置いや、彼奴は、佛力を得た奴でござる。目には見えすとも、今度は兩人して捜しましよ。▲アドそれなら捜さうか。そちには居ぬか。▲算置そちへは参らぬか。▲算置いや、何も無い。▲シテ扱もく、又捕へられ

大事の家の書物  
一冢傳の祕書也

言分口論

うとした。致しやうがある。この八卦も引きちらし。算木を取りましたら、算は合ひますまい。▲アドなう、そなたは初とは違つて下手ぢや。一つも合はぬ。▲算置これ、合はぬこそ道理でござれ。只今まで、數多あつた算木が、二三本になる。その上大事の家の書物を、この様に引き散らかして、こなたが隙ぢやと云うて、算置を翫らぬものでござる。▲アドこゝな者は、算はえ置かぬくせに、身共に無實を云ひかくるか。▲算置無實とはこなたならで、外にせう人がない。算置と思つても、方々に旦那があるぞ。

▲シテ面白いことかな。言分になりさうな。この算木を、頭の上から落さう。▲アドこれはなぜに身共に打ちつける。▲算置そなたが取つたによつて落したわ。これは身共に打ちつけるか。▲アド身共が指もさいたか。皆そちが手前から落つるわ。これは耳を引くか。▲算置何を云ふ。手もさゝぬに。あ痛く。これは身共を打擲するか。▲アド何を云ふぞ。どこに打擲した。▲算置これは堪忍ならぬ。討ち果してくれう。▲アドおのれ、物を言はして置けば、憎い奴の。身共が胸ぐらをとつて何とする。おのれに負ける事ではないぞ。

▲シテこれは如何な事、餘り蹴り過ぎ、耳を引き、打擲したれば、喧嘩になつた。これは出ずばなるまい。申し、御尋ねの居杙は是に居ります。▲アドあれ、あれでをりやるわ。▲算置あれでござるか。あれ、逃ぐるわ。やれ、捕へさせられ。やるまいぞ。

四 飛越新發意

二人

シテ新發意 布頭巾、上十徳、下半袴、腰帶  
アド男 長袴、小さ刀さし

新發意—新に發  
心せる人又小僧  
也

▲アド罷出でたる者は、この邊の者でござる。今日は去方へ茶の湯に參る。それにつき、こゝに某の存じた新發意がござるが、何方へなりとも、心安いところへ、茶の湯に參るなら知らしてくれ。稽古の爲、様子を見たいと、申されたほどに、今日は誘うて參らうと存ずる。まづそろく參らう。道行やれ、宿に居らるればようござるが、何と内に居られうか知らぬ。やあ、參るほどにこれでござる。まづ案内を申さう。ものもう。案内も。▲シテやあ、表に案内がある。どなたでござる。▲アド私でござる。▲シテえい、こなたか。ようこそ御出なされた。まづ此方へ通らせられ。して、只今は何と思召して御出ぞ。▲アドされば、別のこともをりない。さる方へ茶の湯に參る。こなたも、内々見習ひたいと仰せられた程に、誘ひに參つた。▲シテそれは辱うござる。内々望でござる。

なるほど参りましよ。▲アドそれならござれ〜。▲シド参りまする。道行▲アドなう〜、茶の湯と申すは、さまざま次第のある事でござる。節々見て置かせられ。▲シテいかにも左様に承つてござる。▲アドやあ、参るほどに、これに大きな溝川がある。さあ〜、飛びませう。こなたも飛ばせられ。▲シテこなたは早飛ばせられたか。身どもはどうやら飛びかねます。こはうござる。▲アドばてさて、これほどの溝川を飛びかぬるといふ事があることとござるか。飛ばせられ。▲シテやあ、思ひ出しました。とかく走りかよつて、この様な所は飛びましよ。▲アドどうなりともして飛ばせられ。▲シテこれから走りかよつて飛びましよ。さあ、飛びますぞ。▲アドあよ、これ〜、危い〜。▲シテあれ、飛ぶ處を、危い〜とおしやるによつて、え飛びませぬ。▲アドそれでも今のは、その儘はまりさうに見えた程に、危いと申した。▲シテいや、とかくこの目と云ふものが、臆病なものぢや。目を塞いで、走りかよつて飛びましよ。▲アドどうしてなりと飛ばせられ。▲シテ是から目を塞いで飛びましよ。さあ、飛びますぞ。飛ぶぞ。▲アドあよ、それ〜、危い〜。▲シテあ

笑止一氣の毒

れあれ、飛ぶところを危い〜とおしやる。とかく身共は、これから最早歸りましよ。▲アドこれ〜、これまで来て、去ぬると云ふ事があるものか。平にござれ。▲シテやあ、こなたは又こちらへ飛ばせられたか。それなら、いざ手を引合うて飛びましよ。▲アド一段ようござらう。いざ手を引きましたよ。さあ、飛びますぞ。飛ぶぞ。さあ、身共は飛んだ。▲シテはあ、悲しやく。陥りました。これは〜、ずんぶりと濡れたわ。▲アド扱も〜、あのなりは。これほどの所をよう飛ばいで、あのなりは。なう〜、をかしやく。扱も笑止なことかな。▲シテナう〜、これ〜、そなたは聞えぬ。身共がはまつたら、共々に笑止がつてくれう人が、その如くに笑ふと云ふ事があるものか。總じて人の身の上には、をかしい事があるものでをりやる。わごりよの事も、云うたら恥をかきやらう。▲アドいやいや、身共が身の上に、何も覺えはない。有らばおしやれ。▲シテそれならば云うて聞かさう。それ、いつぞや、上野に角力のあつたわ。その時身共も見物して居たれば、西と東と立て分つてとつた。西の方やより、小さい小男が出て、出るほどの者を、片端皆取つ

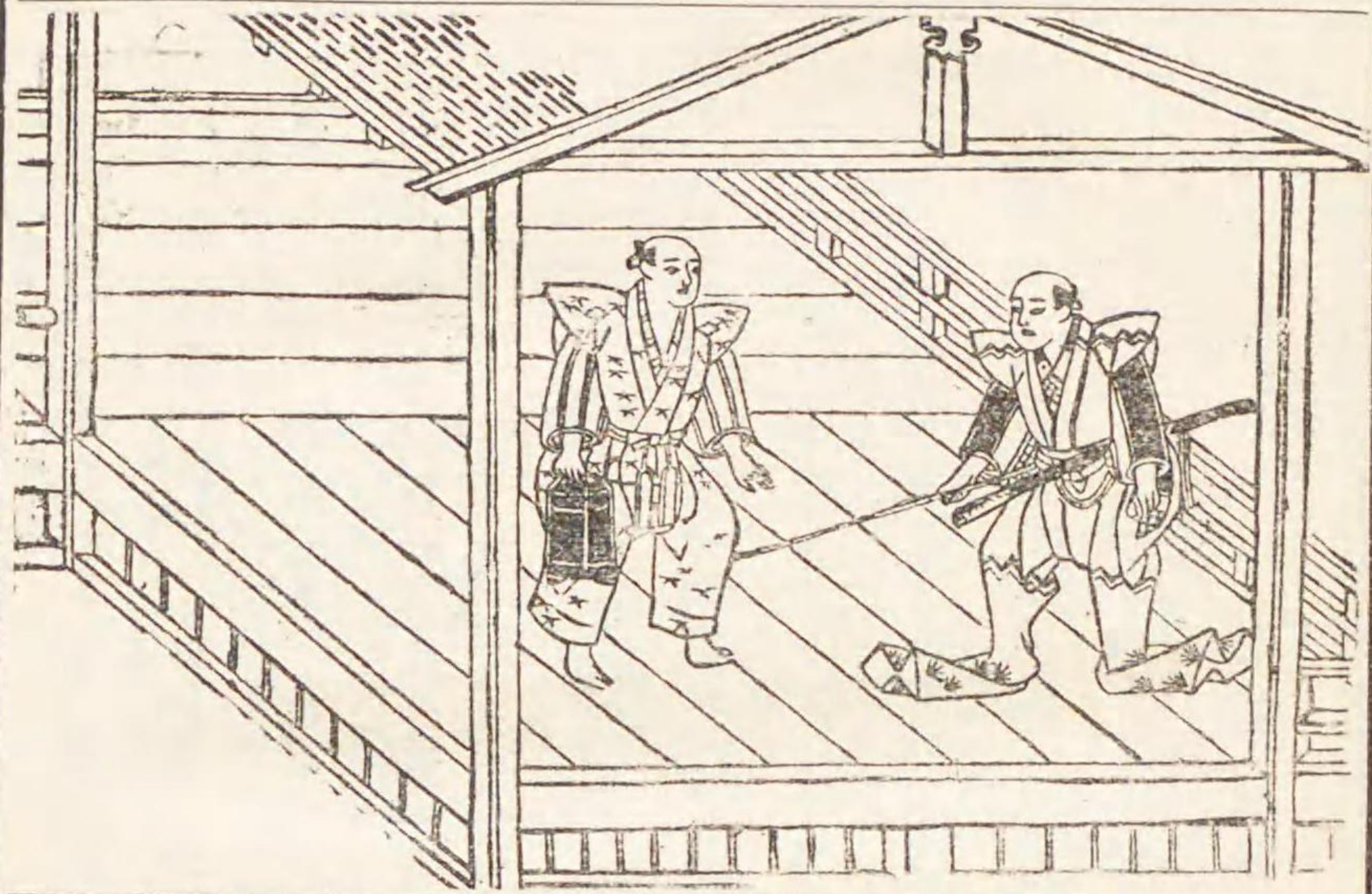
さまたにかけ、三俣に掛け、相撲の手の稱なるべし、一説に「ま」は「て」の誤にて「引廻して」にて句

て投げた。最早今日の角力もこれまでぢや、いざ去なうと云うて、皆々見物が戻つた時に、いや〜、まだ角力こそあれと云うて、東の方から出た。それを何者ぞと思うたれば、わごりよではなかつたか。身共の思ふは、いらぬ所へ出られた、勝たればよいが、笑止なと思つて、角力も立ちかたと、手に汗を握つて見物して居たれば、行司があはすと思つたれば、やあと云うて、手合をするや否や、彼の小男が、わごりよが腕を取つて右へはきり〜、左へはきり〜と引き廻し、さまたにかけ、すでいどうと、とつて投げた。その時のなりを思ひ出せば、笑止なやら、をかしいやら、扱も〜をかしい事かな。▲アドこれ〜、總じて角力と云ふものは、勝つも負くるも、時の仕合でをりやる。それがその様にをかしいか。▲シテ可笑しうなうてならうか。其方が大きななりで、小さい男に投げられて、したよか腰を打つたと見えて、痛さうにして、かたやへ、ちと御免なりませ〜、と這入つたなりを思ひ出せば、可笑しうてならぬ。▲アドなう〜、それほど可笑しくば、わごりよと、いざ角力をとらう。▲シテいや、身共は茶の湯に参つた。角力取り

参つた―相手を投げし也  
三番の物―三番にて勝負を決する意

には参らぬ。▲アドいや〜、取らぬにおいては、後へも先へもやる事ではないぞ。▲シテそれなら、いざ一番取らう。▲アドさあ、をりやれ。▲二人やあ〜。▲シテこれは何とするぞ〜。▲アドやお手。まるつたの。▲シテやい〜、今では勝負が知れぬぞ。角力は三番の物ぢや。戻れ〜。勝負をせい。やるまいぞ〜。

小人 若衆



五 鶯

二人 シテ男 長袴、のしめ、小き刀、るさし、竿持  
アド男 半袴、上下、腰帶

▲アド 罷出でたる者は、この邊の者でござる。某は鶯を好いて飼ひます。今日は殊の外天氣も好うござるほどに、鶯に水を浴びせうと存じ、罷出でた。この先に、谷水の流るゝ所がござる。あれへ持つて参らう。道行まことに、諸鳥様々ござれども、鶯ほど重寶な鳥はござるまい。やあ、此所許がよかる。まづ此所に置いて、身共はあれから見物致さう。鶯籠は、圓床ル ▲シテ 罷出でたる者は、この邊に住む者でござる。某さる方で小人を見初めまして、色

差さう 鶯竿にて捕ること

三光 啼聲を月星日に譬へて三光といふ也 聊爾 粗忽

色と縁を以つて申してござれば、情深い御方で、お盃を下されてござる。このやうな嬉しい事はござらぬ。餘り嬉しさに申す事は、こなたの御用ならば、如何やうの事なりとも仰せられ、命の御用になりとも、立ちませうと申したれば、彼のお若衆の仰せらるゝは、その義ならば別に望な事もないが、鶯の好いがあらば欲しいと、仰せられた程に、それこそ易い事でござる、進上申さうと申して、請合ひました。それにつき、今日は鶯を差さうと存じて、この如くに、竿まで持つて罷出でてござる。道行どご許になりとも、よい鶯があれかし。差いて進ぜたい事でござる。やあ、これに鶯がある。扱もくよい鳥かな。あれは世間に重寶する三光とやら云ふ鳥であらう。何でも差いてくれう。何所から差さうぞ。此所から差さうか。こちらから差さうか。▲アド やい／＼／＼。これは聊爾な事をする。身共が祕藏の鶯を、なぜに差すぞ。▲シテ これはそなたが鶯か。▲アド なかなか。身共の鶯ぢや。狼藉な人ぢや。▲シテ されば、これには仔細がある。聞いてたもれ。身共はさるお若衆に心をかけ、いろ／＼と申したれば、情ある御方で、お盃を下さ



かけろく—賭祿

れた。餘り嬉しさに、こなたの御用なら、命なりとも進上と申したれば、その義なら、別に望もない、鶯の好いがあらば欲しいと仰せらるよ。それ故この如くに、差しに出た事ぢや程に、平に差さしてたもれ。▲アド尤もそれは聞えたれども、あれは某が祕藏の鶯ぢや。差さす事はならぬ。▲シテはて扱、それは氣の毒ぢや。それならかけろくにしたらたもうか。▲アドされば、かけろくには何をすぞ。▲シテ此太刀を、え差さずばわごりよにやらうぞ。▲アドそれなら、なるほど差させう。差いて見やれ。▲シテ心得た。太刀は是に置くぞ。扱どれから差いてよかろぞ。此所から差さう。狙ひすまして差いてくれうぞ。南無三寶、差し損なうた。▲アドそりや、よう差さぬわ。まづ、この太刀はおれが物ぢや。嬉しやく。▲シテなうく、餘り残多い事ぢや。今度はこの刀をやらうほどに、差さしてたもれ。▲アド又え差しやらねば、その刀を取るぞ。▲シテ如何にもその通ぢや、さらば差しまするぞ。何でも今度は差いてくれう。鵜をよう延して置いて差さうぞ。はあ、これは如何な事。又差し損なうた。▲アドさあこそ、この刀も身共が物ぢや。なう

胴窓—無慈悲

なう、嬉しやく。思ひもよらぬ仕合ぢや。太刀、刀、鳥も持つて、急いで歸らう。▲シテナう、これく、それは餘り胴窓ぢや。それなら、鶯こそ差し損なうたれ、歌を一首思ひよつた。この歌を聞いて、その鶯をくれまいか。▲アドこれは優しい事をおしやる。如何にも歌によつて、やることも有らうが、してその歌は、何とでをりやる。▲シテ物と。▲アド何と。▲シテ初春の太刀も刀も鶯も、差さでぞ歸るもとの住家にとした。鶯をたもれ。▲アド尤も歌は出来たが、鶯はやる事はならぬぞく。▲シテやいく、それは餘り情ないことぢや。せめて、も一度差さしてくれ。やれ胴窓者。やるまいぞく。

六 河原新市

五人 シテ男 半袴、上下、腰帶  
 をんな 箔小袖、ゆげうし  
 アド男三人 長袴、小さ刀

▲女 妾はこの邊の者でござる。今日は河原の新市でござる。いつもの如く、酒を賣りに参らうと存じます。道行まことに今日は天氣も好うござる程に、夥しい人でござらう。参る程にこれでござる。此所許に店を出しませう。竹の先に杉葉つけ、腰掛に持たせ かけ置く、徳利一つ側に置くなり。▲アド 罷出でたる者は、この邊の者でござる。今日は河原の市でござる。あれへ参り、賣物を見物いたさうと存ずる。何れも若い衆ござるか。▲二人 なかく。これに居ります。▲アド いざ、河原の市へ参りましょ。▲二人 一段好うござらう。▲アド さあく、ござれ。や、何かと云ふうちに是でござる。これに酒を賣つて居る。いざ、酒をたべませう。さあく、これへござれ。▲女 何れも、酒参れ。諸白の好い酒でござる。▲シテ これへ出でたる者

諸白極上品の酒

きいて見て一飲  
みためすこと

は、河原太郎と申す者でござる。某の女房どもに、河原の市へ、酒を賣りに遣してござる。先程参り、一つ飲まして見よ、好い酒か、きいて見て賣らせうと申せど、いやまだ賣初致さぬと申して、飲まさせぬ。扱もく、憎い奴でござる。あれへ参り、身共が邪魔を入れ、致し様がある。やあ、何人やら大勢酒買ふ人がある。これく、其處な人、こちへござれ。用がある。皆ござれ。▲三人 何事ぞ。▲シテ いや、別の事でもないが、身共も、あの酒を、最前知らいで飲んで見たが、酢を飲むやうで、酸うて飲まるゝ事ではない。必ず飲ませらるな。あたりませうぞ。▲三人 扱はさやうでござるか。よう知らせたもつた。それなら他所でたべう。いざこちへござれ。▲女 申し、あれは嘘でござる。なるほど好い酒でござる。悪くば代りを取りませぬ。これく。これは扱はや歸りやつた。▲シテ やあ、嬉しやく。まんまと邪魔を入れて往なした。致し様がある。やあ女ども、又見舞うた。何と今日は、大分の人であつたほどに、商があらう。鳥目を繋かうと思つて、繻を持つて來た。さあく、錢を此所へ出さしめ。▲女 其處な人、よ

代り代金

出さしめ一出せ  
に同じ

うつけた人た  
はけもの

酒ばやし酒旗  
のこと酒屋のし  
るし也杉の葉を  
用ゐる

うその様なことおしやる。そなたが何かと邪魔を入れて、酒を買はうと云ふ人にも、賣らせぬやうにしやる。鳥目があらう筈がない。うつけた人ぢや。それは誰が損ぢや。そこな人。▲シテ 何ぢや。鳥目が一錢もない。おのれは憎い奴の。商をせずに、遊び歩いて居ると見えた。その上男をうつけたとぬかす。おのれ堪忍がならぬ。打ち殺してくれう。▲女 これは如何な事。又その酒ばやしを取つて、それで打擲するか。あゝ悲しや。あ痛く。やあ思ひ付けた。これく、まづこれを一つ飲うで、打ちなりとも、叩きなりともしやれ。まづ飲ましめ。▲シテ 何のおのれ。人の飲まうといふ時は飲まさいで。最早今は飲まぬ。その盃も徳利も、打破つてくれうぞ。▲女 あゝこれく、それは短氣な。打破らうよりは、まづ飲ましませく。▲シテ 何と云ふぞ。打破らうより飲めと云ふか。いかさま、そちが云ふ通り、破つて捨つるも費ぢや。それなら一つ飲まうか。▲女 はて扱、飲ましませく。下にござれ。▲シテ さあく、茲へ注け。▲女 心得ました。注ぎましよ。▲シテ さらば飲まうか。扱もく、これは好い酒ぢや。今日は念を入れたやら、いつもより酒が好

ささう一盃を也

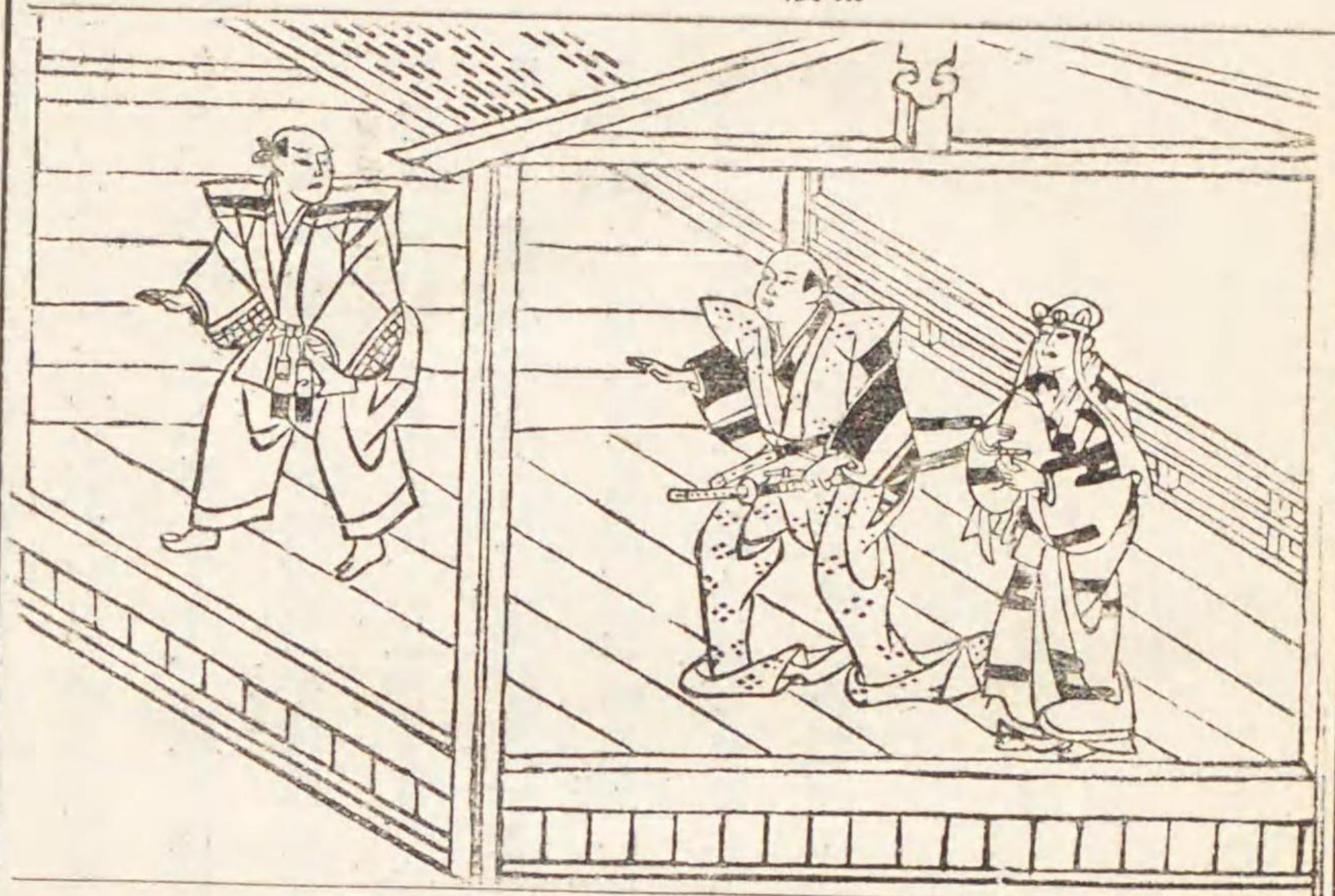
瀧飲ぐい呑み  
のこと

つるとりばへ  
杖を持ちての亂  
暴沙汰

いわ。▲女 も一つ飲ましめ。▲シテ いかさまこれは、一つや二つでは堪忍がならぬ。さあさあ、注けく。扱もく、飲めば飲むほど旨い。そちもちと飲まんか。ささう。▲女 いや、妾はいやでござる。最早酔はせられたさうな。▲シテ いやく、この様な事で、酔ふ事ではない。さあく、注けく。飲めば飲む程好い氣味ぢや。いざこの上は、瀧飲にせう。▲女 心得ました。後から注ぐぞ。▲シテ これは如何な事。いかに瀧飲ぢやと云うて、頭へ酒を浴びせ居るか。おのれ憎い奴の。兎角打ち殺すぞ。▲女 又々酒に酔うて、あれ、足も立たぬなりで、杖とりばへをしやる、あのなりは。▲シテ おのれ可笑しいか。何所へうせる。やる事ではないぞ。やるまいぞく。酒に酔ひ、ひよろしくして、追ひかけ入るなり。

もよる—今云ふ  
婦人語の如く寝  
る事

勝負師—博打



七子盗人

三人 シテ男 半袴、上下、腰帶  
をんな 箔小袖、ゆげうし  
アド男 長袴、小き刀さし、太刀持

▲うば 扱もく、ようおよることかな。お座敷にそ  
つと寝さしましよ。なうく嬉しや。下に寝さし  
ました。この隙に、ゆるりと茶をたべませう。▲シテ  
この邊に隠れもない勝負師でござる。此中いつも  
のいたづら者共と寄合ひて、勝負を致したれば、  
さんく仕合が悪うて、金銀は申すに及ばず、女  
共が衣類まで、悉く打ち込でござる。これでは  
何共致さう様もない事でござる。それにつき、思

有徳な人—有福  
者

めりく—葦垣  
を破る音

有明—行燈

ひ出した事がござる。茲に誰殿と申して、有徳な人がござる。これは、金銀米銭、大分  
持つて居らるゝ程に、今夜あれへ忍び入り、何なりとも取つて参り、も一勝負致し、仕  
合致さうと存ずる。まづそろく参らう。道行やれく、皆人の意見をめさるゝ時、思ひ  
止れば好うござるに、取返さうくと思つて、うかく致し、この體になつてござる。  
やあ参るうちにこれぢや。はや日が暮かたぢやによつて、確とは見えぬが、これは普請  
しられたと見えて、結構になつた。これでは表から這入られまい。裏へ廻らう。されば  
また堀の、手が合はぬよ。この堀を越さずばなるまい。越されうか知らぬ。えいく。  
なうく嬉しや。堀は越しすました。これに葦垣がある。これを切破らう。めりくく、  
はあ悲しや。誰も聞かぬか知らぬまで。聞かぬやら、人も出ぬ。嬉しやく。まづ垣を  
潜らう。やあ、潜りすました。此縁の戸を明くれば座敷ぢや。さらば戸を明けう。さら  
さらく。はあ、これは有明がある。宵に客が有つたと見えた。人は聞かぬかしらぬ。  
誰も聞かぬと見えた。扱もく、結構な道具取散らしてある。風爐釜、茶入、茶碗、扱

取らしたち遣  
つた

かひをつくつて  
—今昔物語に  
「かひをつくつ  
て泣きければ」  
とありべそをか  
くをいふ  
るのころ—犬の  
子

も扱も、よい道具さうな。どれを一色取つても、一元手はある。やあ、これに小袖がある。これは重疊のことぢや。此中、女どもが著る物を打ち込めれば、殊の外機嫌が悪い。この小袖を取つて行て、取らしたら、喜ぶでござらう。まづとつて歸らう。これは如何な事。子が寝さしてある。扱もく、乳母と云ふ者は横著な者ぢや。此所に寝さして置いて、何所へぞ遊びに行たと見えた。扱もく、好い子ぢや。やあ、手を出して。抱かれうか。ちと抱かうか。さあ、おぢやれ。はあ、抱いたわく。はて扱好い子ぢや。何も藝はないか。かぶりはならぬか。かぶりくく。扱もく、かぶりがなるわ。しをらしいことかな。まだ藝はないか。しほのめくく。これはく、しほのめもなるわ。扱もく、藝者かな。嘸親達が嬉しからうの。やあ、これはかひをつくつて、身共が笑ふ聲が大きかつたで、肝が潰れたか。さらば、ちつと賺しましよ。肩に乗せましよ。むかひ殿のゑのころは、未だ目があかぬ。ころくく。や、さらば、ちつと笑はしましよ。やあ、くつくく。はあ、機嫌が直つた。うば、若子様を、お座敷に寝さして置きまし

た。見に参らう。これは如何な事。盗人が這入つて居る。申し、ござりまするか。盗人が這入つて、若子様を抱いて居ます。主何といふ。盗人が這入つたか。心得た。表へ人を廻せ。何處に居る。一打にしてくれう。うば、はあ、危うござる。まづ待たせられませく。主、これく、盗人ではないぞ。座敷を見物に参つた。主、まだおのれ、その様な事をぬかすか。打ち切つてくれう。うば、あゝ悲しや、若子様が危うござるく、主、何の子どもに。切つてくれう。主、これく、切るが實正なら、まづこの子から切りやれ。さあきれく。主、切らいでわ。何方へ失せるぞ。やるまいぞく。うば、なうく、これは如何な事。若子様を捨てて、逃げ居つた。なういとしや。此方へござれく。乳母が乳を進ませせう。なうくいとしや。疝氣が起らうか知らぬまで。

八 荷 文

三人 主 シテアド二人 半袴、上下、腰帶  
長袴、小き刀さし

▲主 罷出でたる者は、この邊の者でござる。兩人の者を喚び出し、さる方へ使にやらうと存ずる。やい、太郎冠者、次郎冠者あるか。▲二人はあ、御前に居ります。▲主 早かつた。汝等を喚び出すこと、別の事でない。この文を左近の三郎殿へ、兩人して持つて行け。▲シテ 畏つてござる。この御状ばかりでござらば、次郎冠者一人遣され。私は宿に居りませう。▲主 いや、一人遣れば道寄をするやら、遅い程に、二人遣る。返事取つたらば、早う歸れ。▲二人 畏てござる。▲主 行て云はうは、このぢうは打ち絶えて、人をも進ませなんだ。餘り床しさに、文を以て申しますと云うて、行て來い。▲二人 畏つてござる。▲主 早う歸れ。▲二人はあ。▲主 早い。▲二人はあ。道行 ▲シテ 次郎冠者、さあ來い來い。この文を遣さるよには一人でも苦しうない事を、二人遣さるよは、そちが常々串

戲する故ぢや。ちとたしなめ。▲次郎そちが道寄をする故ぢや。▲シテ やあ、先から、身共が持つた。ちと、そち持て。▲次 どれ、身共持たう。こちへおこせ。随分此度は早う歸らうぞ。▲シテ なかく。その通ぢや。▲次 やあ、餘程持つた。さあ又汝持て。▲シテ はて扱重い物ではなし。すぐに持て。▲次 いや、持つ事はならぬ。下に置くぞ。▲シテ やいやい、それならよい事を思ひ付けたは。仕様がある。竹に結び付け。二人して荷うて行かう。▲次 これは一段よかる。さあ、結び付けさしませ。▲シテ 心得た。さあ、よいぞ。ことを擔げ。身共も擔ぐるぞ。これ、是れでよいわ。やあ、いかう重たいと思へば、身共が方へばかり寄せて置いた。▲次 いや、寄せはせぬ。中にあるわ。▲シテ この文が重からう筈はない。不思議な事ぢや。戀の重荷といふがある。聞き及うだが、この文が戀の文ぢやによつて、重いと見えた。思ひ出した。この文の重うなつたにつけた、小歌を唱うて行かう。▲次 一段好からう。▲二人 よしなき戀をするがなる、富士でみれどもをらればこそ、苦しや獨寢の、わが手枕のかたかへて、持てどももたれず。そもこは何

むざとした前  
後の分別無き意

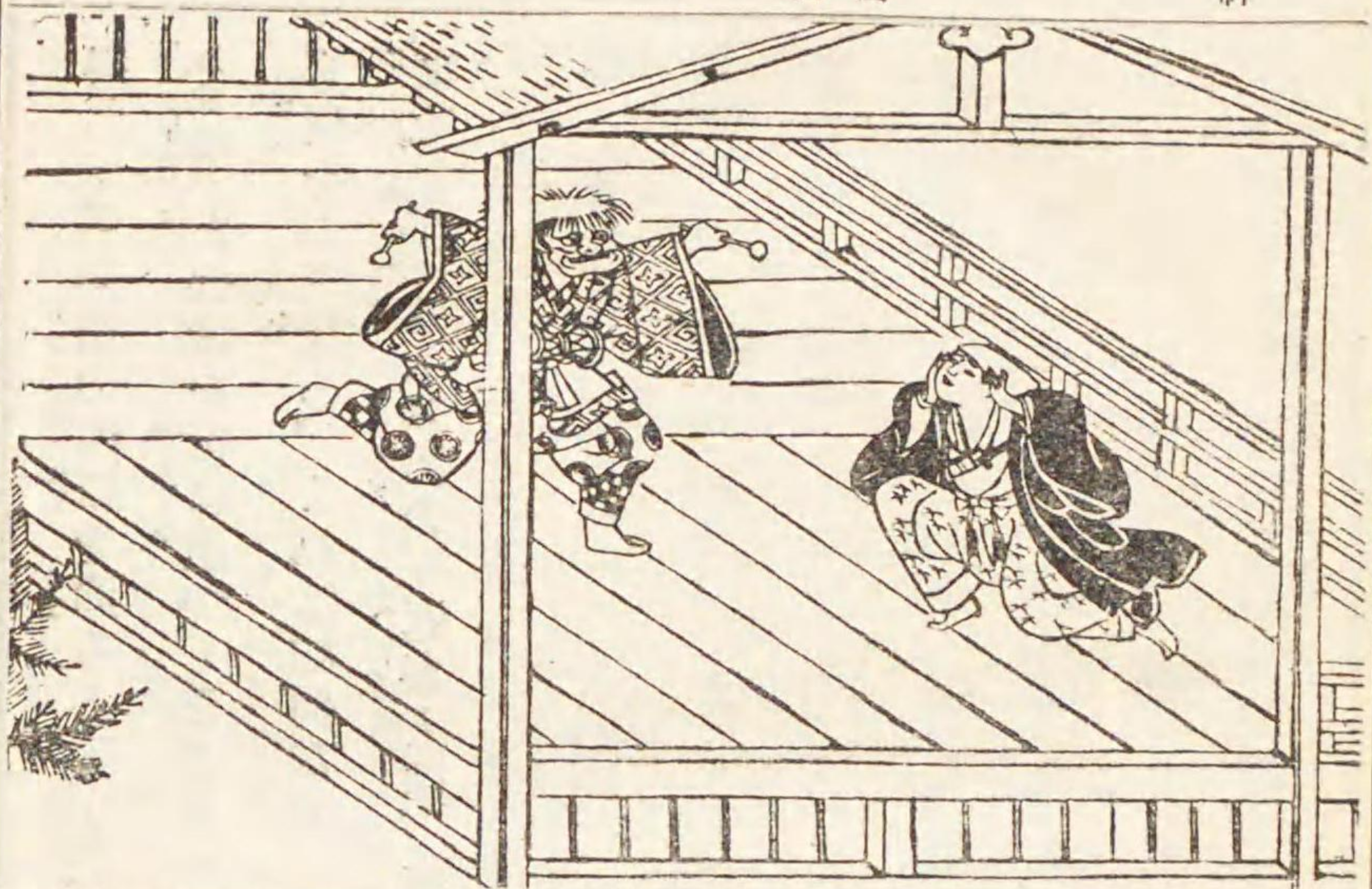
須彌山―妙高山  
と譯す佛敎にて  
云ふ極めて高き  
山  
あいだてない―  
間隔て無き意

の重荷ぞ。▲シテ戀の文は、如何様な事が書いてあれば重いぞ。この文を披いて見まいか。  
 ▲次むざとした事をいふ。頼うだ人が聞かせられたら、よいとはおしやるまい。無用に  
 せい。▲シテ見てから、元のやうに封じて置かうまで。▲次いやく、いらぬ事ぢや。無  
 用にせいで。これは如何な事、早開いた。▲シテさあく、そちもこれへ来て讀んで見よ。  
 ▲次さあく、讀まう。▲シテ扱もく、いつぞやの辱さ、海山々々。これく、重いこそ  
 道理なれ、海山とあるわ。▲次すれば、重いが尤ぢや。▲シテまだあるわ。海ならば滄溟  
 海、山ならば須彌山。これを聞け。扱もく、あいだてないことを書き入れて置かれた  
 わ。▲主どれく見せい。▲シテまづ待て。▲次はて扱見せい。これは如何な事。引き裂い  
 たわ。▲シテそれく、好いことを仕やつた。歸つてきつと申さう。▲次わごりよが引い  
 たによつてぢや。身どもは知らぬ。何としたらば好からうぞ。▲シテされば何とせうぞ。  
 ▲次思ひ出した。この破れた文、先へは持つて行かれまい。たゞどこから來たともなう、  
 扇いでやらう。▲シテ一段よからう。とてもこのことに、小歌節で扇がう。扇がしませ。▲次心

得た。▲二人鴨の河原を通るとて、文を落したよの。風の便に傳へ届けかし。▲二人扇けく。  
 ▲主兩人の者を使に遣つてござる。殊の外遅い。見に參らう。これは如何な事。おのれ  
 ら何をして居る。これは如何な事。大事の文を引き裂き居つた。▲シテいや、これは御返  
 事でござる。▲主何の、返事とは。扱もく、憎い奴の。どちへうせる。やるまいぞく。

針立雷一名神鳴

やくしゆー蕨種  
やぶくすしー藪  
醫者  
きはだー黄蘗



九針立雷

二人

シテ雷  
アド醫者 布頭巾、十徳、下半袴、

鬼頭巾、ぶあくの面かけ、厚板、下半袴、脚絆、括り腰帶、前に羯鼓つけ、ばち持つ

▲いしや次第にて出づる やくしゆも持たぬやぶくすし〜、きはだや頼みなるらむ。詞これは都に住居いたす藪醫者でござる。都には上手の醫者が數多ござるによつて、身共がやうなる下手な醫者は、はやりませぬ程に、此度思ひ立ち、東の方へ稼ぎに參らうと存する。道行まづ急いで參らう。やれ〜、久々住みなれた故郷をふり捨て、この如くに東へ下るは、何とも氣の毒な事でござる。さりながら、又追付

踏み外してー雲を也

仕合を致して上らうと存する。やあ參るほどに、これは廣い野へ出た。定めてこれは聞き及うだ、武藏野と云ふがこれであらう。扱も〜廣い事かな。やあ、今迄好い天氣であつたが、俄に暗うなつた。夕立がすると見えた。この野で夕立に遇うたら、何ともなるまい。はあ、どこやら雷の鳴る音もする。さればこそ夕立がして來た。雷も頻に鳴るわ。落ちはせまいか。桑原〜。▲シテ雷 ぴつかり〜。づでいどう。あゝ悲しや。これは踏み外して落ちた。さても〜、したよか腰の骨を打つた。はあ痛や。やいやいそこな奴、おのれは何者ぢや。▲いしや 私 は醫者でござりまする。東の方へ下ります所に、夕立に遇ひました。▲シテ 何ぢや、醫者ぢや。それは幸の事ぢや。身共不慮にこへ落ちた。したよか腰を打つた。療治を爲てくれ。▲いしや 私 も人間の療治は、形の如く致しましたが、雷殿の療治は、終に致しませぬ。御免されませ。▲シテ いや〜、人間の療治の、雷の療治のと云うて、別に違はあるまい。療治せい。▲いしや どうござつても、御免されませ。▲シテ おのれは憎い奴の。療治を爲ぬにおいては、たつた一攫に



攫殺してやらうぞ。▲いしやあよ悲しや、眞平御免されませ。なるほど療治致しませう。まづ脈をうかどひませう。▲シテいかにも見てくれ。▲いしやさらば脈をとりませう。▲シテやいく、これはかはつた脈ぢやなあ。▲いしやその義でござる。人間の脈は手にござる。雷殿の脈は、頭脈と申して、頭でとります。▲シテそれく。それほど知つて居て、知らぬと云ふ。何とあるぞ。▲いしやされば、脈が殊の外高ぶりますが、こなたには、御持病があると思えました。▲シテやあ、そちは大きな上手ぢや。なるほど己は持病がある。持病は何であらうと思ふ。▲いしやされば御持病は、中氣があると見えました。▲シテ扱も上手ぢや。中風がある。何と中風も治り、又したよか腰を打つたも、療治をして癒してくれまいか。▲いしやされば、中氣は、宿でござらば、薬を調合致しませうすれども、途中の事でござる。何ともなりますまい。腰の痛には、針を持合せました。針をいたしませう。▲シテその針といふは、痛いものではないか。▲いしやいやく、痛うはござらぬ。人間さへたてます。▲シテそれなら立ててくれ。▲いしや畏つてござる。横にならせられ。こ

はつしー針を立てる音

経絡―血脈

すきと―すつきりと

の如くに針を懐中して居ります。どこ許がようござらう。こよは何とござる。▲シテなるほど其所が好い氣味ぢや。▲いしやそれならこよに一本立てませう。はつし。▲シテあ痛あ痛。▲いしやはつし。▲シテあいたく。やれく、痛いわく。早う抜いてくれ。抜いてくれ。▲いしやこれは雷殿とも覺えませぬ。人間さへ立てます。経絡が違ひます。何と身を悶えなさるよぞ。▲シテいやく、堪忍ならぬ。早う抜いてくれ。▲いしや尤でござる。抜きますぞ。恠へさせられ。さあ抜きました。何とござる。▲シテはあ、さてもく痛いのぢや。さりながら今の針で、痛が餘程治つた。さりながら、まだ何所やら痛の残つた所があつて、氣味が悪い。▲いしやそれなら、も一本立てたら、痛みも中風も、すきと癒しまして、根を切つて進ませう。▲シテそれなら、も一本立ててくれ。痛うない様にしてくれ。▲いしや心得ました。こよが好うござらう。こよに立てませう。はつし。▲シテあいたく。▲いしやはつし。▲シテあいたく。やれく、恠へられぬぞ。早う抜いてくれ。▲いしや今すこしでござる。待たせられ。抜きますぞ。き

つとしてござれ。▲シテ いや〜、痛うてどうもならぬ。早う抜け。▲いしや 心得ました。抜きますぞ。さあ抜きました。何とござる。▲シテ 扱も〜痛いものかな。はあ、今の針で、痛がすきとよいわ。▲いしや さうでござらう。それなら、ちと立つて見させられ。▲シテ 立つて見やう、手を執つてくれ。▲いしや 心得ました。手を執つて立たしませう。何とござる。▲シテ 立つて見てもよい。嬉しうこそあれ。最早身共は天上するぞ。▲いしや これ申し申し。▲シテ 何事ぢや。▲いしや 只今療治を致した、薬代を下され。▲シテ いや身共は、ふと此所へ落ちたによつて、持合がない。よい便宜におこさうぞ。▲いしや いや〜、それが何時の事やら知れませぬ。この如くに、私の遠國へ廻りますも、薬代を取り、身を立てう爲でござる。どうでも只今取らねばなりません。▲シテ それでも無い物は是非がない。やあ、好い事を思ひ出した。物とせうぞ。▲いしや 何とでござる。▲シテ 今度夕立のする時に、其方が所へ落ちて、その薬代を遣らうぞ。▲いしや なう〜、おとましや〜。聞くも厭でござる。いやでもおうでも、今取らねばなりませんぞ。▲シテ それは醫者殿、聞分がな

おとましや〜疎ましのこと

水損―水害  
早損―干魃

典薬の頭―古宮  
内省に典薬寮あり其の長官也

やくしのけげん  
―薬師如來の化現

い。持合がなければ、此所に近付と云うてはなし、借つて遣らうやうもない。何とそれならば、身共に薬代のかはりに、何ぞ似合うた望はないか。▲いしや されば、何でござらうぞ。や、思ひつけた。この如く、田舎遠國を廻りますれば、今年水損がいた、早損がいたのと申して、薬代くれませぬ程に、今から早損も水損もいかぬやうにして下され。▲シテ それは何より易い事ぢや。身共が儘ぢや。水損早損のいかぬやうにして、世の中の好いやうにしてやらうぞ。▲いしや それは辱うござる。▲シテ その上そちを、典薬の頭に祝うてやらうぞ。▲いしや いや〜辱うござる。▲シテ それなら、この様子を諂に諂うて、天上せうほどに、汝も諂へ。▲いしや 心得ました。▲シテ 諂 打上、降つては照しつ〜、一千年が其間、水損早損あるまじき、御身はやくしのけげんかや。中風をなほすくすしをば、てんやくのかみと云ひすて、又なるかみは上のけり〜。▲シテ ぴつかり〜。

十 墨塗女

三人 シテ大名 熨斗目、素襖、大臣烏帽子、小さ刀  
をんな 箔小袖、ゆばうし  
アド男 半袴、上下、腰帶

彼の人一情人

▲シテ大名 遠國に隠れもない大名。長々在京するところに、訴訟思ひのまよに相叶ひ、新地を過分に拜領致した。これほど嬉しい事はござらぬ。まづ太郎冠者を喚び出し、悦ばさうと存ずる。やいく、太郎冠者あるかやい。▲冠者はあ。▲シテ居たか。▲冠者お前に居ります。▲シテ 汝を喚び出す事別の事でもない。長々在京するところに、訴訟悉く相叶ひ、新地を大分拜領したは、めでたい事ではないか。▲冠者これは御意なさると通り、おめでたい事でござる。▲シテそれにつき、國元へ追付下るであらう。さうあらば、彼の人に又何時逢はうも知れぬ程に、今日は暇乞に、彼の人の方へ行かうと思ふが、何とあらう。▲冠者これは一段と好うござりませう。▲シテそれなら、いざ行かう。汝も供をせい。

どち風が吹いて  
—いかなる風の  
吹き廻しかと也  
心もとなう—氣  
がかり也

▲冠者 畏 つてござる。道行 ▲シテさあ来い。▲冠者 参ります。▲シテ やいく、この仕合を國元に聞いたら、今日か明日かと思つて、待ちかねて居やうぞ。▲冠者 さやうでござる。申し、何かと申す内にこれでござる。お出なされた通り申しませう。それにござりませ。▲シテ 心得た。▲冠者 申し、ござりますか。頼うだお方のお出なされてござる。▲女やあ、珍しい聲がする。太郎冠者、何と、頼うだ人のござつた。▲冠者 なかく、さやうでござる。▲女 なうく、珍しや。これはどち風が吹いてお出なされた。此中は久々見えませなんだによつて、心もとなう存じました。▲シテ いかにも此中は久しうをりやる。まづわごりよも息災で、満足致した。それにつき、太郎冠者、今の事を云はうか。▲冠者 仰せられませ。▲女 何事でござる。心もとなうござる。▲シテ いや、別のことでもない。長々在京する所に、訴訟思ひのまよに叶ひ、近日國へ下るほどに、今日は其方に、暇乞ひに来てをりやるわ。▲女 やあく、何と仰せらる。國元へ下る。それなら又、いつ逢ひませうも知れまい。扱もく、悲しい事でござる。水入を側置き、▲シテ 其方の嘆は尤ぢや。さり

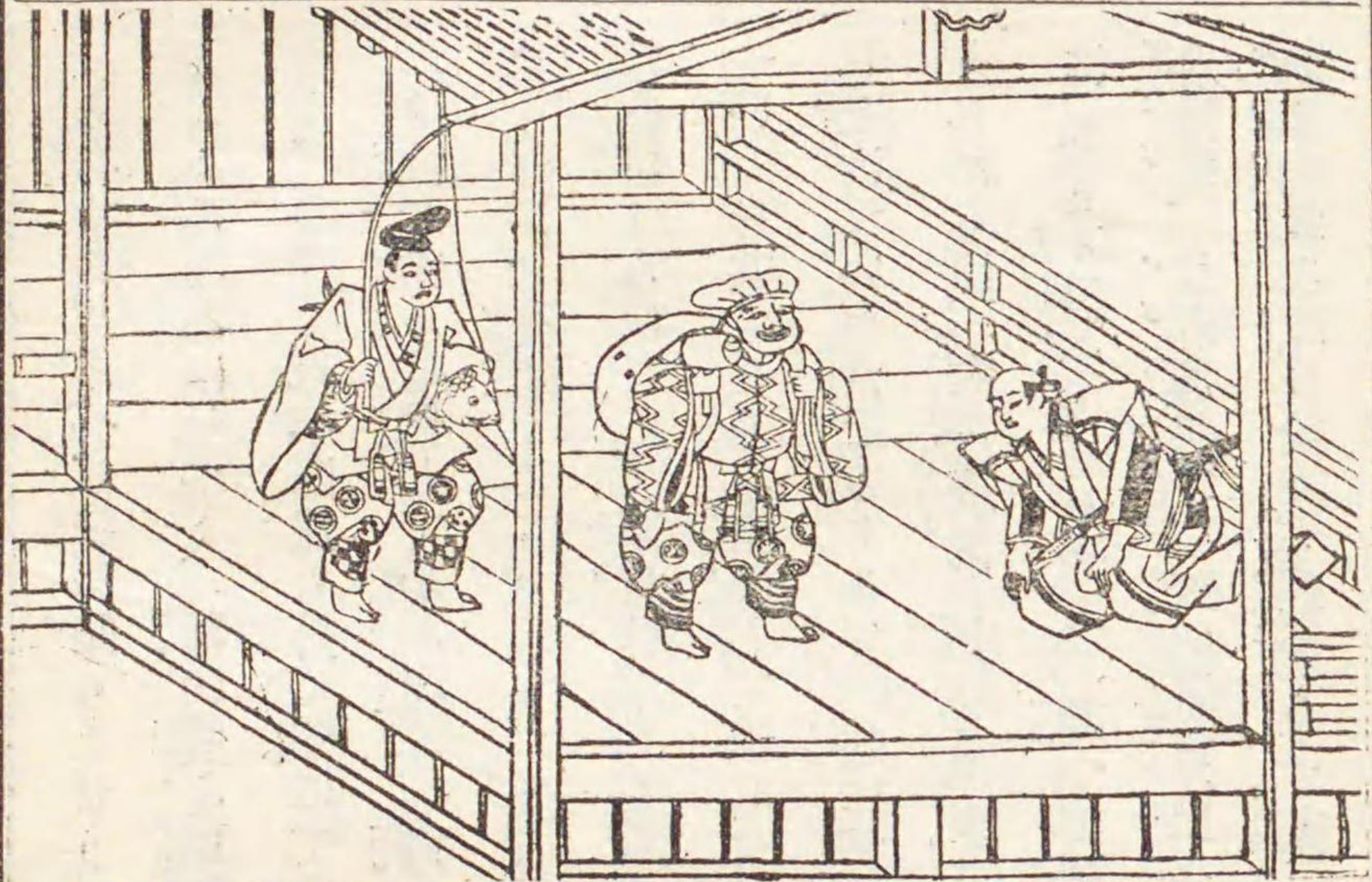
ながら、國へ下つたらば、追付迎を上すであらう。待つて居さしませ。泣く。▲女さう仰せられても、こなたの心が、國元へござつたら變り、妾が事を忘れさせられうと思へば、悲しうござる。▲冠者これは如何な事。まことに泣かるよと思つたれば、顔へ水を塗つて泣かるよ。憎い事ぢや。申し、一寸ござれ。▲シテ何事ぢや。▲冠者あれをこなたは、眞實泣くと思召すか。あれは、顔へ水を塗つて泣かれます。▲シテ何のその様な事が有らう。あれほど別を悲しがつて泣くものを。何を、譯もない事を云ひ居る。▲女申し。どちへござります。お目にかゝるも、小しのうちでござる。こゝにござりませ。▲シテされば、太郎冠者が、用があると云うたによつて、あれへ行たれば、譯もないことを云ひ居つた。▲冠者これは如何なこと。あれほど水を眼へ塗つて泣くに、まだ氣が付かぬ。思ひ付けた。致しやうがある。墨と取代へて置きませう。水入と墨と。とりかへる。▲女扱もく、悲しやく。片時も離れぬやうに思ひましたれば、別になりまして、悲しうござる。▲冠者扱もく、可笑しい事かな。取代へ置いたを知らいで、墨を顔へ塗つた。あの顔は、扱もく、をか

やく。申し、ござれ。▲シテ何事ぢや。▲冠者こなたはまことになされぬによつて、私が、水と墨と取代へて置きました。あの顔を見させられ。▲シテまことにあれは汝が云ふ通りぢや。扱もく、騙された。憎いことぢや。何とせうぞ。思ひ出した。この鏡を形見ぢやと云うてやつて、恥をかよせう。▲冠者一段と好うござらう。▲シテなうく、國元へ下つたらば、追付迎を上さうけれど、それまでの形身ぢやと思つて、この鏡を見てたもれ。わごりよにこれをやるぞ。▲女さてもく。彌悲しうござる。この様な形身を貰はうとは、夢にも思ひませなんだ。扱もく、情ないことござる。やあ、これは何者が、この様に墨を塗らし居つた。あゝ腹立ちやく。こなたがしやつたか。腹立ちやく。▲シテいやく、己は知らぬ。太郎冠者が才覺ぢや。▲女知らぬとおしやつても聽かぬ。墨を塗らねばおかぬぞ。▲シテこれは何とする。顔へ墨を塗つて。やれ、ゆるせく。逃入。▲女やあ、太郎冠者め。其所に居るか。おのれも塗つてやらう。▲冠者これは何とめさる。この様に塗られて、どう行なれうぞ。あゝ免さしやれく。▲女どちへ失せる。まだ塗ら

才覺工夫考案

ねばならぬ。やるまいぞ。

大黒―大國主命に附會すれどもと天竺の神にて福神の一とす即ち梵天の眷屬にて食厨の護神也勸請―神を乞ひ受けて祀ること



卷之二 蛭子大黒天

續狂言記卷之二

一 蛭子大黒天

三人

シテ大黒 大黒の頭巾、同面かけ、法被下半衿、脚絆くくり、右に槌持、左に袋かたげ

蛭子 子同じく面かけ折烏帽子、水衣半袴くくり、鯛釣竿持つ

アド男 長袴、小さ刀さし

▲アド 罷出でたる者は、津の國邊に住居致す者でござる。某富貴になりたう存じて、西の宮の蛭子三郎殿と、比叡山三面の大黒殿へと、祈誓をかけてござれば、まづ吉日を擇び、勸請せよと、示現を下させられてござる。幸今日は最上吉日でござる程に、注連などを張り、家内を清め、勸請致さ

大黒と云々一與  
へん迄曲がかり

うと存ずる。まづ注連を張りませう。やあ、なか／＼好うござる。 蛭子と大黒とさ 大黒と蛭子  
がりばにて出る 大黒と蛭子  
とこころをあはせつゝ、數の寶を取持つて、衆生にいざや與へん。この衆生にいざや與  
へん。▲アドこれへ四邊も輝く體にて御出でなされたは、どなたでござる。▲蛭子大黒二人こ  
れは汝が常々信仰して歩を運ぶ、西の宮えびす三郎、比叡山の 大黒殿にてあるぞとよ。  
▲アドはあ、有難うござります。先これへ御來臨なされて下され。▲大黒やい／＼、汝は常  
常信仰するほどに、富貴になして取らせうぞ。▲アドそれは有難うござります。▲蛭子やい  
やい、身共もそちを樂うして取らせうぞ。▲アド 忝うござります。それにつきまして申  
し上げたい事がござります。終に御兩殿の御由來を承りませぬ。語つて聞かさせられ  
ましたらば、愈信仰申したうござります。▲蛭子はて扱、汝は今までそれを知らぬと云ふ  
は、ちと不信心でをりやる。語つて聞かさう。よう聞け。▲アド 畏つてござる。▲蛭子 抑伊  
邪那岐、伊邪那美尊、天の岩倉にて、男女の御かたらひをなされ、日神、月神、蛭子、  
素盞鳴尊を設け給ふ。蛭子とは 某がことなり。天照太神より三番目の弟なればとて、

ゆゑしき一えら  
い立派な

衆徒一僧侶

いで／＼以下  
總て曲にかゝる

西の宮のえびす三郎殿と齋はれ、威光を現す。貧なる者には福を與へ、富貴に守る事なり。  
何ほうゆゑしきえびす三郎殿にてはなきか。▲アド 御由來承り、いよく有難う存じます。  
又大黒殿の御由來を承りたうござる。▲大黒 なかく、語つて聞かさう。好う聞け。▲アド 畏  
つてござります。▲大黒 抑比叡山は、尊き御山なり。此山に守護神なくてはかなはじと、  
傳教大師祈り給へば、この大黒殿顯るよ。傳教、この山には三千人の衆徒あり、大黒  
は一日に千人を扶持し給へば、三千人を守り給ふ守護神をと、重ねて祈誓し給へば、其  
時この大黒殿、忽ち三面六臂と顯れければ、傳教尊く思ひ、この大黒を、比叡山の守護  
神と齋ひ、佛法今に繁昌せり。信仰せよく、汝に福を與へうぞ。▲アドこれは彌有難う  
存じます。▲二人やい／＼、汝 寶を與へて今よりは、大富貴になして取らせうぞ。▲アド  
はあ 忝うござります。▲蛭子 諸辨有り、鼓 舞動 いで／＼寶を與へんとて あり、商みやう  
が、作り冥加、萬の幸あらする釣針を、魚ながらこそは取らせけれ。▲大黒 諸辨打あけて 舞動 ぞ  
の時大黒進み出で、 あり、く／＼て、七珍萬寶入れおきたる袋を汝にとらせけり。猶も寶を

打ちだす打出うちでの小槌こづちを、同じく取らせ。▲二人これまでなりとて、えびす大黒だいこく歸らんとせしが、猶なほも所の福神ふくじんと、ならんくと、この所にこそ納りなまけれ。

二 鶏立けいりふの江え

二人 シテ男 半袴、上下、腰帶  
アド主 長袴、小刀さし

時ときし時刻を  
指定しめすること

▲アド主 これは此邊このあたりに住居致すまひす者でござる。某一人召仕めしつかう太郎冠者たらうくわじやが、殊ことの外不精ほかぶしやうにござつて、使つかひにやれども、時ときさしをして呼よぶに、其時そのときまるりたる事もござらぬ。明日あしたも、さるかたへ使つかひに遣やらうと存ぞんずるほどに、前方まへかたより、参れと申し付けうと存ぞんずる。やいく、太郎冠者たらうくわじやあるか。▲シテ太郎冠者たらうくわじやはあ。▲アド 居ゐるか。▲シテ お前まへに。▲アド 念ねんなう早はやかつた。汝なんぢを喚よび出すこと、別べつの事でもない。明日あしたさるかたへ使つかひに遣やるほどに、一番鶏いちばんけいの唱うたふ時とき分に必ずかなら来こい。▲シテ 畏かしこまつてござる。やあ、頼たのうだ人の、一番鶏いちばんけいの唱うたふ時とき分にはんざり参れと申し付けられたを、臥ふせり過すいて、日ひの出でさせられた。何なんと致いたして好ようござらうぞ。さりながら、頼たのうだ人は騙たらしよい御方おかたぢや。如何いか様やうとも辯舌べんぜつに任まかせて申まさう。ござりますか。▲アド 太郎冠者たらうくわじやか。言語道斷ごんごだうだんの奴やつぢや。おのれは今いまうせをつたか。▲シテ されば鶏けいが鳴なくかくと存ぞん

今いまうせをつたか  
今いま時とき分ぶん来きたか

鶏立の江ノ作り  
言ならん立は泣  
の略より来る  
なげばこそ一音  
公の歌といふ  
裏にも晴にも  
よきにも悪きにも

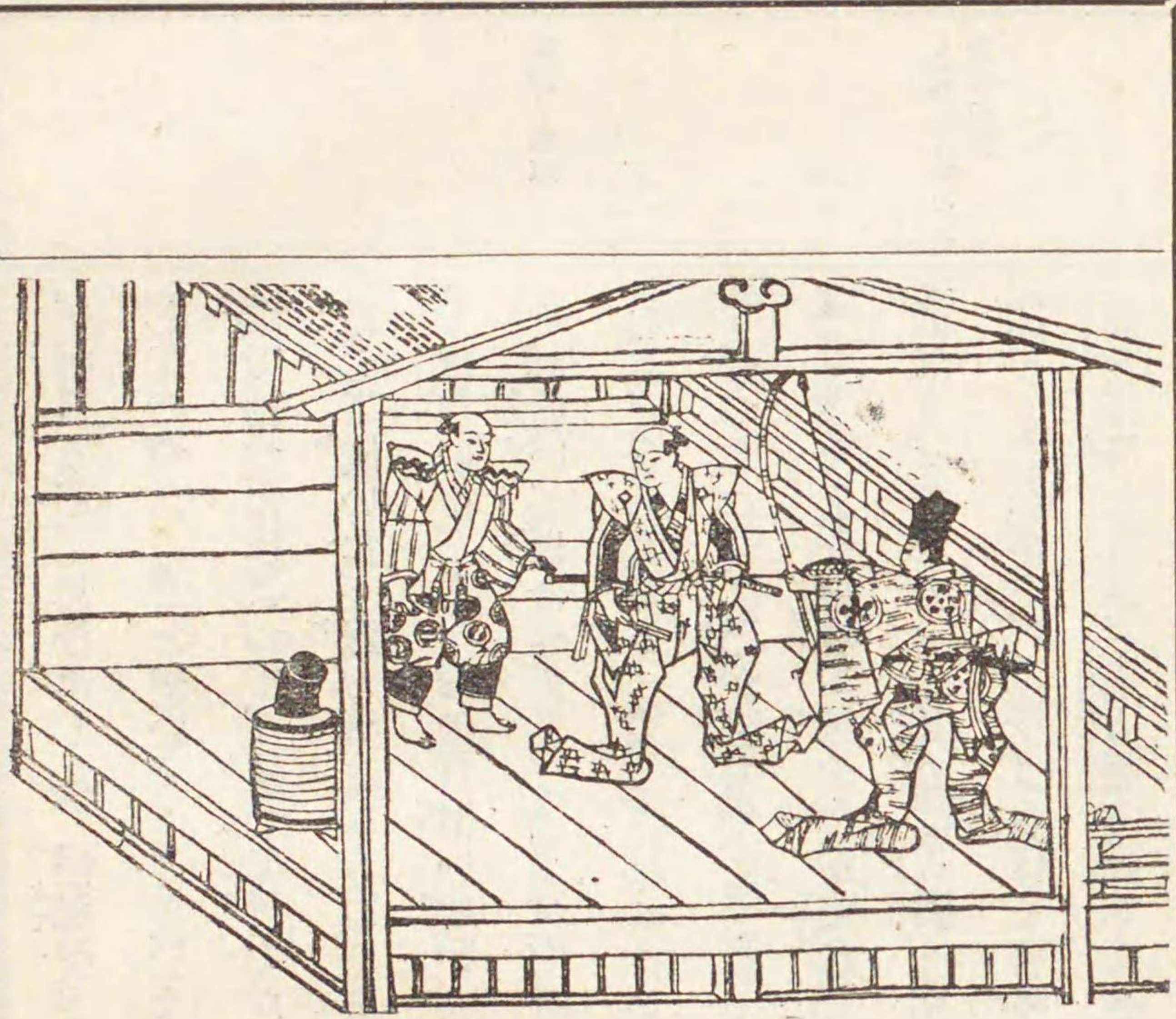
じて、随分聞いて居ましたれども、終に鳴きませなんだけれども、日がたけてござる程に、まづ参つてござる。▲アドやあ、おのれ、鶏の唱ふ時分に來いといふに、なくとは何としたことぢや。鶏は唱ふことこそいへ、なくとはいはぬ。▲シテ いやく、さやうではござらぬ。歌にも詩にも、鳴くとこそござれ、唱ふとはござるまい。▲アドさらば鳴くと云ふ事があらば云うて聞せい。▲シテ 畏つてござる。歌とりが鳴く東の奥のみちのくの、小田守る山に黄金花さくと申す時は、鳴くではござらぬか。▲アド 汝が方に歌にあれば、こちにも唱ふといふ歌がある。▲シテ 有らば仰せられ。▲アド 鶏立の江の邊には、その鶏もうたふなりけり。▲シテ こなたに一首などはござらうが、此方にはまだござる。▲アド あらば急いで詠め。▲シテ なげばこそ別もうけれとりの音の、聞えぬ里の曉もがなと申す時は、何と鳴くではござらぬか。▲アド 此方にもまだある。▲シテ 有らば仰せられ。▲アド 鶏立の江の邊には、その鶏もうたふなりけり。何と唱ふではないか。▲シテ 扱はこなたの事でござる。▲アド こなたの事とは。▲シテ 褻にも晴にも歌一首と申すは、疑もなきこなたの事でござる。

夜も明けば伊  
勢物語にあり、  
きつねはきつに  
はめなてははめ  
なむの誤

る。その上此方にはまだござる。▲アド 有らば詠め。▲シテ 心得ました。夜も明けばきつねはめなでくだかけの、まだきに鳴きてせなをやりつる。▲アド それもうたふであらう。▲シテ いやく、鳴くでござる。其上唐土にも鳴くといふ證據がござる。胡會詩といひし者の詩にいはく、寂々 函關鎖未開。田文車馬出秦來。朱門不養三千客。誰爲雞鳴得放廻。これは唐土に函谷が關と申す關がござる。鶴の鳴く聲を聞き關の戸を開く。孟嘗君と申す者、討ちもらされて隣國へ落ちて行く時、夜半時分に彼の關に到り、鶏の鳴く真似をしければ、まことかと存じて關の戸を開く。かるがゆるに、難なく隣國に著きたり。これにも空鳴きしつるとこそあれ、やはり唱ふとはござるまいぞ。▲アド いや、此方には歌にこそなけれ、鶏の唱ふといふ謠がある。謠うて聞かさう。よう聞け。▲シテ 畏つてござる。▲アド 謠 うちうたふく、ちまちの鶏がうちうたふ。▲シテ 頼うだ人の作謠をうたはるよ。いたしやうがござる。主殿▲アド 何事ぢや。▲シテ 謠ちまちばかりの鶏はんないて、他所の鶏はなかぬか。▲アド 何でもないこと、あつちへうせい。▲シテ は



あ。▲アドえい。▲シテはあ。



三 雁 争あらそひ

三人 シテ大名 髪斗目、素襖、大臣烏帽子  
アド男 半袴、上下、腰帶  
所の者 長袴、小さ刀さし

▲シテ 罷出でたる者は、この邊に隠れもない大名でござる。今日も野遊に参らうと存ずる。道行まことに慰は多けれど、殺生ほどよい慰はあるまい。やあ、これに雁が居る。何でも此弓で射てやらう。これから射やうか。何處から射やうぞ。▲アド 罷出でたる者は、この邊の者でござる。某は急用あつてさる方へ参る。まづ急いで参らう。やあ、これに雁がある。これは捕りたいものぢや。何とし

聊爾粗忽

人體立派なる  
身分の意

て捕らうぞ。思ひ出した。飛磔をうたう。やあ、えい。さればこそあたつた。まづ雁はしてやつた。▲シテやい／＼／＼、その雁はなぜに取つて行くぞ。▲アドこれは、身共が飛磔で捕つたによつて、持つて行くが、何と。▲シテいや／＼、それは身共が最前から瞰み殺して置いた。遣る事はならぬ。おこせ。▲アドいや／＼、身共が飛磔で捕つた。遣る事ではないぞ。▲シテおのれ憎い奴の。おこさぬに於ては、この弓矢で射てくれうぞ。▲アドやれ危い。出合へ／＼。▲所の者やい／＼／＼。これは何事ぢや／＼。聊爾をすなく。これはどうした事ぞ。▲アドされば／＼、能う聞いて下され。この雁を、身共が飛磔をうつて捕つたれば、己が雁ぢや、おこせといふによつての事ぢや。無理な事ではござらぬか。▲所の者そちが飛磔で捕つたが定か。▲アドなかく、定でござる。▲所の者それなら、その通云はう。これ／＼、其方は人體と見えた。あの者が飛磔をうつて捕つた雁を、おこせとはどうした事ぞ。▲シテさればその事ぢや。身共が捕らうと思つて、この弓矢で最前から狙うて居たれば、大方瞰み殺したを、彼奴が取つて行く。どうでもこちへおこせと云う

てたもれ。▲所の者その通云はう。これ／＼、今のを聞かしましたか、無理な事を云ふわ。▲アドされば／＼、無理な事を云ひます。どうでも遣る事はならぬと云うて下され。▲所の者心得た。どうでも遣る事はならぬと云はるよわ。▲アド何と、遣る事はならぬ。それなら其所を退きやれ。この弓矢で射殺してくれう。▲シテそれ／＼、止めてたもれ／＼。危い／＼。▲所の者まづ待たしませ／＼。身共がこれに居るからは、聊爾はさせぬぞ。兎角身共が思ふは、その様に云うては埒が明かぬ。この上は、彼の雁を元の所に置いて、も一度射て見さしませ。あたつたら其方取りやれ。若しあたらすば、そちへ遣る事はなるまい。▲アドそれなら射やう程に、元の所へやつて置け。▲所の者心得た。なう／＼、今の通ぢや。身共次第にして射したら好からう。あの手許ではあたるまい程に、元の所へやつて置かしめ。▲シテ心得ました。こなた次第に致さう。▲所の者さあ／＼、射て見やれ。▲アド心得た。射るぞ。これから射やうか。どこから射やうぞ。▲二人これ／＼、それは近い。初の所から射やれ。▲アドそれなら、これから射やう。さあ射るぞ。南無三寶、あたら

ぬわ。▲シテそりやこそあたらぬぞ。まづ雁は身共が取つて歸らう。なうく嬉しやく。  
 ▲アドやいく、も一度射さして見よ。やれ待てく。せめてその羽なりとくれ。▲シテ羽  
 を何にするぞ。▲アド羽箆にするわ。▲シテいやく、それもならぬぞく。▲アドやれ、それ  
 は聞えぬ。せめて羽をくれく。

菊の花―北野参  
 り或はぼうく  
 頭とも云ふ

四 菊の花

二人 シテ男 半袴、上下、腰帶  
 主 長袴、小刀さし

▲アドこれは、この邊に住居致す者でござる。某一人召仕ふ下人が、身共に暇も乞はいで、  
 何方へやら、参つてござる。承れば、夜前歸つたと申せども、未だ某に目見を致さぬ。  
 言語道斷 憎い奴でござる。今日は彼奴が私宅へ参り、急度折檻を致さうと存する。道行  
 やれ扱、身どもに暇をくれいと申したら、五日や七日の暇は取らせうものを、暇を乞は  
 ぬ所が憎うござる。やあ、参るほどに、彼奴が私宅はこれでござる。某が聲と聞いてござ  
 らば、定めて留守を遣ひませう。作聲をして、喚び出さうと存する。ものも。案内も  
 う。▲シテやら奇特や。夜前某が歸つたを、はやどなたにやら御存じあつて、表に案内と  
 ある。案内とは誰ぞ。どなたでござる。▲アド退り居る。▲シテはあ。▲アド俄の慇懃迷惑致  
 す。ちとお手を上げられ。おのれは誰に暇を乞うて、此中は何方へをりそうてあるぞ。

をりそうて―田  
 かけて

かそうでーこつぞりと

身の毛をつめてー恐るること

▲シテされば、一人召仕はるよ下人の事でござれば、お暇と申したりとも、よもお暇を下さるまいと存じて、かそうで京内参致してござる。▲アド何と、一人召仕ふ下人が、京内参すれば、主に暇を乞はぬ法でおちやるか。▲シテはあ。▲アドえい、憎い奴の。やれ扱、急度折檻を致さうと存じて、これまで立越えたれども、彼奴が京内参したとあれば、都の様子も聞きたうござる。まづこの度は、差置かうと存ずる。やいく、存ずる仔細あつて許す。まづ立て。▲シテそれは誠とでござるか。▲アド誠ぢや。▲シテ眞實か。▲アド眞實ぢや。▲シテ一定か。▲アドおんでもないこと。▲シテやら心易や。▲アドして、今の心は何とあつた。▲シテその事でござる。いつもとは、御機嫌もかはり、お手討にもあふかと存じて、身の毛をつめてござる。▲アドさうあらう。身共もいつもとは云ひながら、今日は急度折檻をせうと思つて立越えたれども、汝が京内参したとあれば、都の様子も聞きたさに許した。急いで語れ。▲シテ畏つてござる。まづ、天下治りめでたき折なれば、此所彼所の参下向が、夥しい事でござつた。▲アドさうあらうとも。まづ都は何所々々を見物したか。▲シテ

ほくをかしらー一本ほうー頭とあり  
 鸚鵡返しー先方の歌を少し變へて返歌する也口眞似の義  
 おめたはー怖(こは)がるは

ればまづ都は、北野へ参り、路次に見事な菊の花が咲いてござつたほどに、一枝折りまして、手に提げて参りたれば、萎れませうと存じ、頭にさいて参りましたが、それより祇園へ参らうと存じ、啜へ参つてござれば、都上臈と見えて、華やかに出立ち、腰元はしたなどを數多連れてござりました。通りさまに、私が頭にさいた菊の花について、歌を一首詠ませられてござる。▲アドそれは何といふ歌ぢや。▲シテ都には所はなきか菊の花、ほくをかしらに咲きぞみだると、なされた程に、私も返歌を致さずはなるまいと存じ、鸚鵡返しに、返歌を致してござる。▲アド何としたぞ。▲シテ都には所はあれど菊の花、思ふかしらに咲きぞみだると、致してござれば、扱もく、田舎者さうなが、優しい者ちやと仰せられ、これより祇園清水へ参る程に、來いと仰せられ、私も参りましてござれば、東山の邊に、幕うちまはし、皆々その内へ入らせられた。身共にはこちへ這入れと申す者もござらぬほどに、田舎者のおめたは見苦しいものぢやと存じ、幕を攫み上げて内へはいつてござれば、私をこちへ來いと仰せられ、一の上座に置かせられ

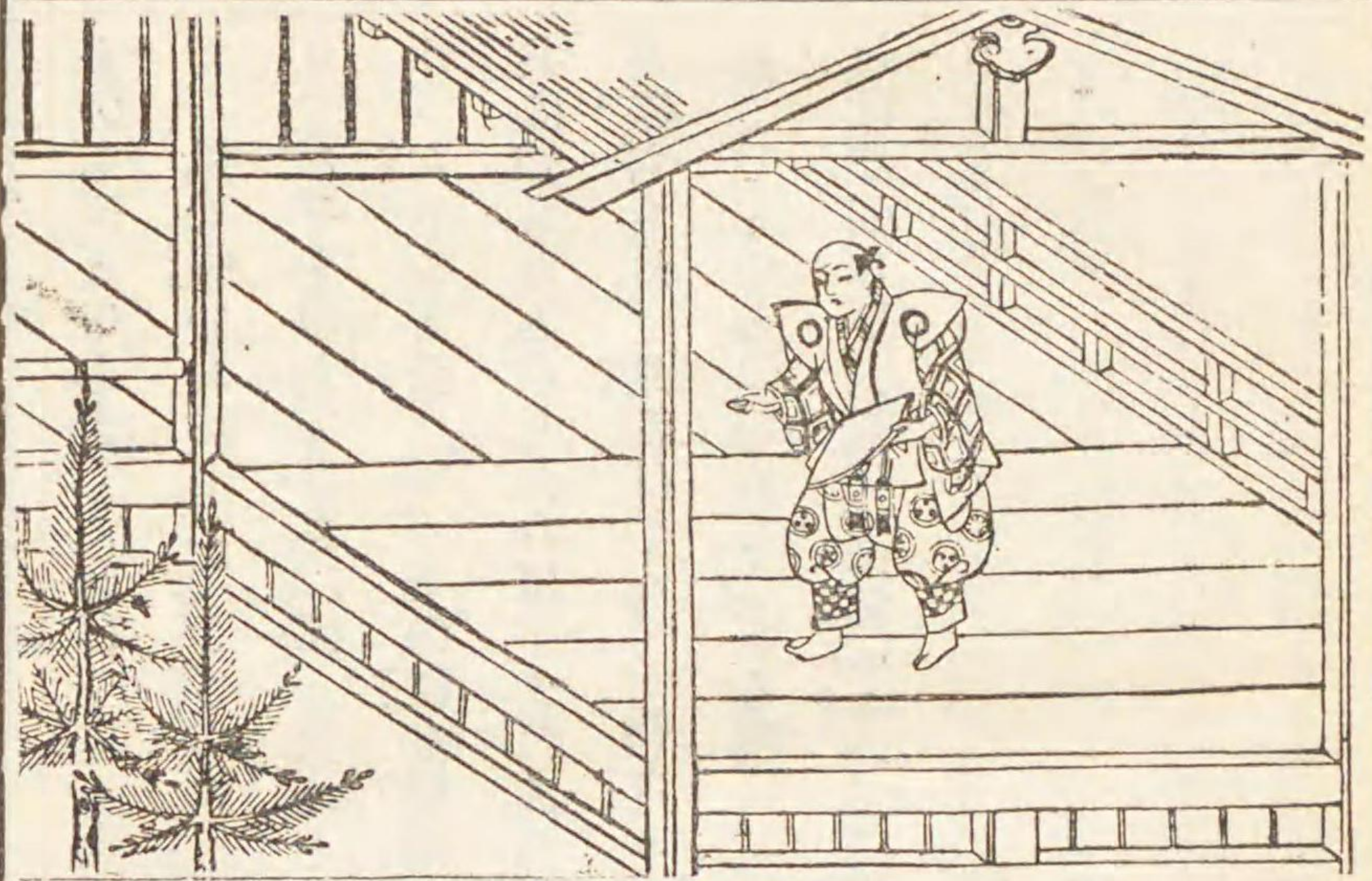
大ぶとの金剛一  
草履の一種、大  
ぶとは緒太の誤  
歟

てござる。▲アドそれは何とも合點がいかね。汝が居たあたりには何があつた。▲シテ私の居ましたあたりには、大ぶとの金剛がござつた。▲アドそれは上座ではない。履脱と云うて下座ぢや。して何とした。▲シテ時に腰元が、まづ盃を持つて出ました。何でも一つたべうと存じて居ましたれば、つよと脇へ持つて行きました。又その次に、結構な蒔繪の重箱に、色々の肴を入れて持つて出ました。定めてこれは私が方へ持つて参ると存じてござれば、身共が鼻の先を、すりこすつて通つて、これも奥へ持つて参りました。ところ  
で私も腹が立ちまして、とかく此様な所に居ていらぬものぢや。酒はくれず、振舞は食はせずと存じ、それよりつよと立つて歸りましたれば、後からおはしたが急に呼びました。やれく、歸れ、戻れ、用があるかと申して追ひかけました。身共の存じまするは、今まで居てさへ何もくれぬ、何の用があらう、戻る事ではないと存じ、聞かぬ顔して歸りましたれば、かのはしたが難なく追付きました。其儘、私の腕を無手と取り、おのれは憎い奴の。今の盗んだ物を返せと申してござる。私は何も取りはせぬ。聊爾な事を云ふ

あらがふ一語ふ

ものぢやと申しましたれば、取らぬとは云はせぬ、そちが取らうと申して、扱も強いおはしたでござつた。私の腕を扱上げました處で、私が、まづ夫は何でやりやるぞと申してござれば、大ぶとの金剛が見えぬ、返せくくと申しました。それで私が、女ぢやと云うて、その様な粗漏な事を云ふ、田舎者ぢやと思つて侮つて云ふか、身共は知らぬと申したれば、まだあらがふかと申して、腕を頻に振ぢあげました程に、餘り振ぢられ、息がはづんで、物が云はれぬ。やれまづ物を云はせくと申してござれば、そこでちつとゆるめてござる程に、これかと申して懐から出し、返しました。▲アドこれは如何な事。おのれは都へ上つて、盗をし居つたか。憎い奴の。やるまいぞく。▲シテ許させられく。

深草祭—深草郷の總社藤森神社の祭



### 五 見物左衛門

一人 男 半袴、上下、脚絆くくり、菅笠持

罷出でたる者は、この邊に住居致す、見物左衛門と申す者でござる。今日は加茂の競馬、深草祭でござる。毎年見物に参る。今日も参らうと存ずる。又某一人でもござらぬ。爰にぐつろ左衛門殿と申して、毎年同道致す人がある。今日も誘うて参らうと存ずる。道行内に居られたらようござらうが、どれへも出ぬ人ぢや。定めて内に居らるゝであらう。やあこれぢや。ものもう。ぐつろ左殿、内にござるか。何とはや見物にござつた。やれく、

笠をとらせらるる—挨拶する也

巳午の刻—巳は午前十時午は十二時  
とてものことに—いつその事に

十二因縁—生々相續の因果を十二等に分つ  
八景—支那の瀟湘八景也  
毗首—天竺の佛師毗首羯磨の事  
達磨—天竺の僧支那に入りて禪を傳ふ  
牧溪—宋人也範無進の弟子  
うんけいべり—雲爛縁の訛

ぐつろ左殿と同道せねば、身共の慰がない。やあ身共に逢うて、笠をとらせらるゝはどなたぢや。やはり召せ。こなたは、祭は見物なされぬか。何ぢや、刀がない。なくば大事か。身共はこれ持たねばさしませぬわ。扱祭の刻限は何時でござる。何と巳午の刻ぢや。えい身共は一刻も二刻も早う出た。とてものことに、九條の古御所を、見物して歸らう。御馬屋を見やうか。えい、これが御馬屋ぢや。扱もく、見事なことかな。姫栗毛、額白、黒毛、白毛、あれからこれへ。扱もく、これは十二因縁の心を以て立てさせられた。扱御所を見物致さう。はあ、是に八景の押繪がある。洞庭の秋の月、遠浦の歸帆、遠寺の晩鐘、平砂の落雁、瀟湘の夜の雨、寄する波に音なき夜の泊、さてもく、見事な。これに掛物がある。何ぢや。毗首が達磨、東坡が竹、牧溪和尚の墨繪の観音、三幅一對。扱もく、見事く。覺は皆うんけいべりに高麗縁、あれから是まで敷きつめられた。柱は黒塗柱に、蒔繪を書かせられたは、申さう様もない事ぢや。何といふ馬子達、具足がかけるといふか。えい、身共はそれこそは見に来たれ。はあ、扱もく、のつたりく

高麗縁―白地に  
雲形などを黒く  
染め出したリ

先さきなは乗人のりてと見えた。あれは誰たれでござる。何なにと梅うめの木原きはらのすい右衛門殿ゑもんどの。その後あとなは誰だれでござる。何なにぢや、柿かきの本もとしぶ四郎左衛門しろうざゑもん。扱あつかもく、くひしばつて乗のられたが、落おちられずはよからうが。ありやく、ありやくこそ、いふ言葉ことばの下したから落おちられた。扱あつかも扱あつかもをかしい事ことぢや。何なにぢや、其方そなたは、身共みどもが笑わらひになるか。何なにとおしやる。打ぶたれうとお云いやるか。其方そなたに疵きずはつけまい。身共みどもは町まちで隠かくれもない大おほいたづら者ものぢや。おかまやるな。扱あつかもく、あれく、したよか腰こしを打うたれたやらして、ちんがりく。扱あつかもく、可笑おかしい事ことぢや。やあ、あの大勢人おほぜいひびの寄よつて居ゐるは、何事なにごとでござるぞ。やあ子供こどもが角力すまふをとる。えい、身共みどもは、小ちひい時から角力すまふが好きぢや。行いて見物致みぶつさう。はあ、これは、どうも這入はいられまいが、まづこの笠かさを破やぶつては、女おんなどもが吐しかるであらう。まづこれをかうして、ちと御免ごめんなされませう。これく、此處こゝな人ひと、草履ぞうりの後あとを踏ふむによつて、先さきへ行ゆかれぬ。南無三寶なむさんぼう、身柱みぢの灸やいをむいてのけた。はあく、痛いたやく。まづ這入はいつた。これ行司ぎやうじ、腰こしが高い、下したにござれ。何なにといふ、某それがしをあばれ者ものと云いふか。やあ何なにとい

柿―染色也代赭  
の濃き色

ふ。角力すまふの作法さほうを知らずば、かまふなと云いふか。身共みどもが知るまいと思おもふか。總そうじて角力すまふは、四十八手てとは云いへども、碎くだけば八十八手ても、百手ひゃくてにもとる。鴨かものいれ首くび、水車みづぐるま、反返そりかへり、腕投かひななひ、あをりがけ、河津かはづがけ、この様やうな手てを知しつて居ゐる。何なにと、それ程ほどならば出でてとれといふか。身共みどもぢやというて、とりかねうか。何なにと、小言こごみを云いうたらば飛つ躑ぶをうたう。そちがうつたらば、この方ほうからも參まゐらせうまでよ。あ痛いたく。これは堪忍かんにんがならぬ。やい其所そこな柿かきの帷子かたびら、柿かきの鉢巻はちまき、おのれ見知みしつたぞ。やれ子供こどももかゝつてくれ。えい、とうとうく、南無角力御退散なむすまふごたいさん、又明年參またあしたねんらう。

六 成 上 者

三人 シテ男 半袴、上下、腰帶  
ぬす人 同前  
主 長袴、小き刀さし

▲初アド 罷出でたる者は、この邊に住居いたす者でござる。某常々清水の觀世音を信仰致し、參詣致す。今日も參らうと存ずる。まづ太郎冠者を喚び出し申し付けう。やいやい、太郎冠者あるか。▲シテ はあ。▲初アド 居たか。▲シテ お前に。▲初アド そちを喚び出す事、別の事ではない。常々清水の觀世音を信仰する。今日も參らうと思ふが、何とあらう。▲シテ これは一段と好うござりませう。▲初アド それならば太刀を持て。▲シテ お太刀持ちましてござる。▲初アド さあ、來い。▲シテ 畏つてござる。▲初アド やい、某も觀音を信仰する故、次第に仕合もなほる。この様な嬉しい事はない。▲シテ 仰せらるゝ通でござる。▲初アド 取分今日は、夥しい參ぢやなあ。▲シテ 左様でござります。▲初アド や

大參 大勢の參詣

あ、何かといふ内に清水へ著いた。さあ、汝も拜め。▲シテ 心得ました。▲初アド やい、今宵は通夜をする。汝も睡め。▲シテ 畏つてござる。▲初アド やい、その太刀を取られぬやうにせい。▲シテ 心得ました。▲アド これはこの邊を走り廻る、心も直にない者でござる。今日は清水へ大參でござるほどに、あれへ參り、仕合を致さうと存ずる。やあ、これに一段の事がある。調戲致さうと存ずる。なう、嬉しやく。まんまと杖と太刀とを換へました。まづ一段の仕合ぢや。急いで退かう。▲初アド やい、太郎冠者、夜が明けた。いざ下向せう。▲シテ 好うござりませう。▲初アド さあ、來い。▲シテ これは合點のいかぬ。扱は取られたものであらう。何と致さう。さりながら、頼うだ人は騙しよい、面白可笑しう申しなさう。申し、▲初アド 何事ぢや。▲シテ 夜前は夥しい通夜を爲る人がござつたが、身共があたりで、色々の雜談申したを、聞かせられたか。▲初アド いや、眠りて聞かなんだ。何を云うたぞ。▲シテ 總じて、物の成り上ると申すこと、御存じでござるか。▲初アド いや何とも知らぬ。▲シテ されば、物の變ずると申す事は、目前にあつて合點



一定必ずの意

かう云ふ内にも  
云々一獨言也

この杖も云々一  
これも獨言也  
くちなは一蛇の  
こと

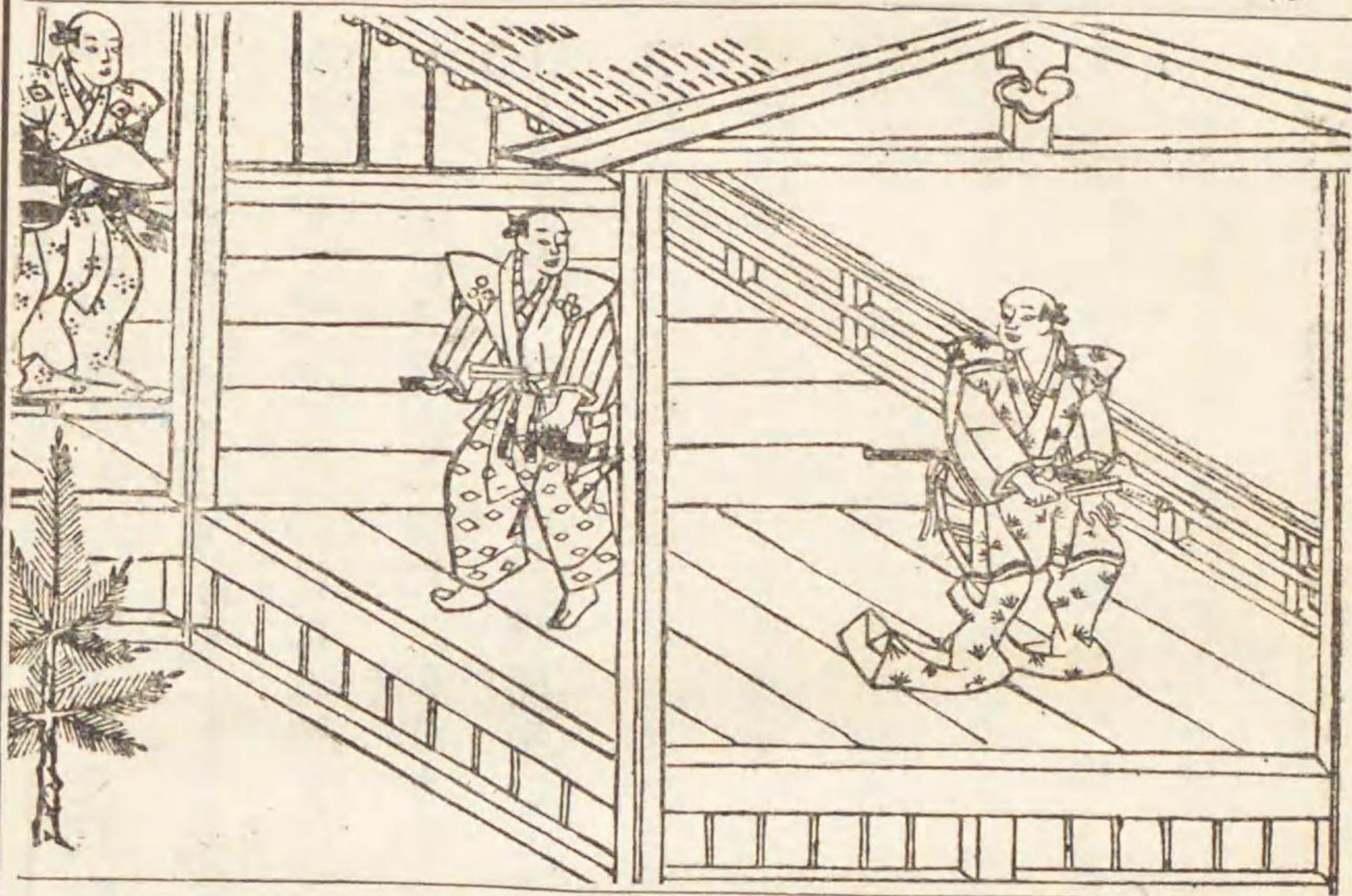
物ぎれ一切れ味  
の好きこと  
これでもまだ元  
の太刀にならぬ  
一これも獨言也

の参らぬ、不思議な事でござる。まづ、嫁が姑に成上るは、ほどがござらぬ。▲初アドそれ  
れは珍しうもない事の。▲シテ又山の芋が鰻になるも一定でござる。その仔細は、大雨な  
どが降つて、山などが崩れて、山の芋が川へ流れて、それが鰻になると申します。▲初アド  
その様な事もあらう。▲シテかう云ふ内にも、元の太刀になれかし。申し、又澁柿が熟  
柿に成上ります、ゑのころが親犬になりあがります。▲初アドそれは汝が言はいでも知れ  
た事ぢや。▲シテまだござります。小僧が後には長老に成り上ります。この杖も元の太刀  
に成り上れかし。申し、まだござる。田邊の別當がくちなは太刀と申す事がござる  
が、御存じでござるか。▲初アドいや、知らぬ。▲シテその太刀は、他人の目には朽繩に見え  
まして、いづかたに捨てて置いて、のいて通つて、え取らぬと申します。その上、名  
作物なれば、物ぎれでござると申す。これでもまだ元の太刀にならぬ。總じて人の樂し  
うならうとは、その人の太刀が、色々に化けると申すが、聞かせられましたか。▲初アド  
いや聞かぬ。如何やうの事ぢや。▲シテこなたの御富貴にならせられう御瑞相がござる。

▲初アドそれは嬉しい。まづ云うて聞かせい。▲シテやあ、申しますまい。▲初アド早う云へ。  
▲シテこなたのお太刀を、私に持たせておかせられたは、物になりました。▲初アド何に  
なつたぞ。▲シテ青竹の杖になつてござる。▲初アド言語道断の事ぢや。おのれが人に取ら  
れて、云はう様がなさに、何のかのとぬかすな。▲シテさうではござらぬ。この杖になり  
上りました。▲初アドまだ理屈をいふ。あつちへうせい。▲シテはあ。▲初アドえい。▲シテは  
あ。

寶の笠一名隠れ笠

目の前に奇特の見ゆる一眼前に不思議の靈驗あること



七 寶の笠

三人

シテ男 半袴、腰帶

アド男二人 長袴、小き刀さし

▲初アド 大果報の者。まことに天下治り、彼方此方の御參會お振舞は、夥しい事でごさる。それについて、この度は、目の前に奇特の見ゆる寶を競うとある。某が藏の内に、さやうの寶があるか存せぬ。尋ねませう。やい、太郎冠者あるか。▲シテはあ。▲アド 居たか。▲シテ お前に。▲アド そちを喚び出すこと、別の事でない。此中の彼方此方のお振舞は、夥しい事ではなかつたか。▲シテ その通でござる。▲アド それについて、この度は、手前で奇特

也少しも也 更に

の見ゆる寶を競うとあるが、藏の内に寶があるか。▲シテ いや存じませぬ。▲アド それならば都にはあらうか。▲シテ いかにも都にはござらう。▲アド そちは大義ながら都へ行て、寶を求めて來い。▲シテ 畏つてござる。▲アド もはや行くか。▲シテ なかく。▲アド やがて戻れ。▲シテ はあ。▲アド えい。▲シテ はあ。扱もく、急な事を申し付けられた。まづ都へ參らう。扱都へ參つたらば、それを序にして、此所彼所へ參らうと存ずる。都と見えて賑かにござる。さればこそ都ぢや。扱もく、賑かな事かな。はつたと忘れた事がある。寶屋が何所やら、又名を何と云ふやら存せぬ。是から問ひに歸る事もはるくなり。何と致さう。扱もく、都でござる。知らぬ事は、呼ばはれば知れるさうな。なう、其所許に寶屋はござらぬか。寶買はう。▲スツパ これは洛中に心も直に無い者でござる。見れば田舎者やら、わつぱと云ふ。騙してやらう。これ。▲シテ こちの事か。何事でござる。▲スツパ 如何にもそちの事ぢやが、洛中を何と云やるぞ。▲シテ 田舎者なれば、聊爾は申さぬ。御免なれ。▲スツパ いや、其方がさらく、聊爾を云ふではないが、何やら尋ぬる

南無寶一寶を大切さうに奪び云ふ也

服せう一食べる

態ぢやが、何が欲しいぞ。▲シテ身共は、寶が求めたうござる。▲スツパして、その寶を知つて居やるか。▲シテ都人も存ぜぬ。それを存じて居れば、それから参れども、知らぬによつてかやうに申します。▲スツパいかにも誤つた。賣つてやらう。それに待ちやれ。▲シテ心得ました。▲スツパこれく、これが寶ぢや。▲シテ此様な笠はいりませぬ。寶をくだされ。▲スツパ南無寶く。▲シテその様に仰せらるよには、仔細がござるか。▲スツパいかにも仔細がある。語つて聞かしませう。よう聞きやれ。▲シテ畏つてござる。▲スツパ昔鎮西の八郎爲朝と申す御方が、鬼が島へござつたれば、鬼どもが取つて服せうと云うた。いやく、むざとは服せられまい。何にても勝負をせうと仰せられて、色々勝負にお勝あり、乃ち鬼が島で取つてござつた隠笠でをりやる。これにつき添うた隠蓑、打出の小槌は、方々の大名衆へ買ひ取らせられた、その残でをりやる。其方が欲しさうなによつて、賣つて遣らうと云ふ事ぢや。▲シテ扱は聞き及うだ隠笠でござるか。▲スツパなかなか、これぢや。▲シテそれならば求めませうが、代物は何程ぞ。▲スツパ萬正でをりやる。

田舎のく、姿の見えぬまねして探す體也

▲シテ餘り高い。負けて下され。▲スツパ厭ならば置きやれ。▲シテそれならば買ひませう。扱奇特は、どうした事でござるぞ。▲スツパ奇特は、それを被れば、その者の姿が見えぬわ。▲シテそれは重寶なる事でござる。それならば被てごらうぜられ。▲スツパいやく、そこが寶ぢやわ。これは主を思ふ故に、主が被れば見えぬ。又身共が被ると、なかく見える。▲シテそれならば被て見ませう。▲スツパ早う被やれ。▲シテさあ被ました。▲スツパ田舎のく。▲シテ此所に居ます。▲スツパ何所に居やるぞ。▲シテこれ此所に居ます。▲スツパはれやれ、被逃しやるかと思つた。▲シテそれならば、代物は三條の大黒屋で渡ませう。▲スツパいかにも明日あれで受取らう。▲シテさらばく。▲スツパようをりやつた。▲シテはあ。なうく嬉しやく、重疊の寶を求めてござる。まづ頼うだ人に見せませう。これぢや。ござりまするか。▲アドえい、太郎冠者が戻つたさうな。歸つたかく。骨折や骨折や。寶を見せい。▲シテ心得ました。これでござります。▲アドこの様な笠はいらぬ。まことの寶を見せい。▲シテ扱はこなたも御存じないと見えた。南無寶く。▲アドやいく、

その様に南無寶と云ふは、仔細がある事か、▲シテ如何にも仔細がござる。語つて聞かしませう。▲アド急いで語れ。▲シテ心得ました。昔鎮西の八郎爲朝が、鬼が島へお出なされ、鬼共が取つて服せうと申した。いや／＼、むざとは服せられまい。勝負をせうとあつて、勝負をなされたれば、悉くお勝あり、隠義に隠笠、打出の小槌を取つて歸らせられた。乃ち隠義と打出の小槌は、方々の大名衆に買ひ取らせられた。又この隠笠は、賣るまいと申したを、何かと申して、漸求めて参りました。▲アドこれが聞き及うだ隠笠か。▲シテなか／＼、さやうでござる。▲アド扱又奇特は、どうした事ぢや。▲シテされば、此笠を被ますれば、その被たものの姿が見えぬが不思議でござる。▲アドそれならば被て見よ。▲シテそこが寶でござる。これは主を思ふ物でござるによつて、私が被ますれば見えませう。こなた被てごらうぜ。▲アドそれならこれへおこせ。汝は、見えぬか見ゆるか、それで見よ。▲シテ畏つてござる。▲アドさあ太郎冠者、見えぬか。▲シテいや見ませぬ。これは如何な事、都の奴が騙し居つた。▲アド何と、見えぬが定か。▲シテいかなこと。見えぬ

これは如何な事  
— 獨言也實際見  
ゆるを以て也

事でござる。▲アドこりや此所に居るが見えぬか。▲シテかつて見えませなんだ。▲アド某もその見えぬ處が見たいほどに、そち被て見せい。▲シテ最前も申す如く、主を思ふものでござれば、某の被ました分では見えます。▲アドそちに遣る分にせうほどに、被て見せい。▲シテいや／＼それでも見えます。とかくお藏へ納めませう。▲アドそれならば、そちに最早遣るほどに、被て見せい。▲シテそれは定でござるか。▲アドなか／＼、取らする。▲シテいや／＼、見えぬ時は、こちへおこせいと仰せられませう。とかくお藏へ納めませう。▲アド是非とも取らする。▲シテ眞實。▲アド弓矢八幡取らする。▲シテそれならば被て見ませう。▲アド早う被て見い。▲シテさあ被ましたは。▲アドおのれ、そりや見ゆるわ。▲シテ見え致すまい。▲アド此所が見ゆるわ。▲シテいや見えますまい。▲アド扱はおのれは、都でしたよか抜かれてうせ居つた。憎い奴の。やるまいぞ／＼。▲シテあゝ悲しや、許させられ／＼。▲アドやるまいぞ。やるまいぞ／＼。

弓矢八幡— 誓言

した／＼か— 充分

土産の鏡—謠曲  
松山鏡参照

### 八 土産の鏡

二人 シテ男 つぎ素襖、下脚絆くくり、腰帶  
女 箔小袖、ゆげうし

▲シテこれは越後の國、松の山家の者でござる。某訴訟の事有つて、長々在京致いてござる。この度訴訟相叶ひ、満足仕つた。急いで國へ罷下り、女子どもに喜ばせうと存ずる。まことに國許を出づる時は、都へさへ上りたらば、別義はあるまい、五日か十日の内に、埒もあかうやうにも存じてござるが、思の外逗留致してござる。さりながら、内々私わたくしの何とぞと存じたる事も首尾致し、この様な嬉しい事はない。それについて、國許へ、何ぞ土産を調べて、一門の者共へ取らせたい存じたれども、長々の在京なれば、さやうの事も思ひながら、なりませなんだ。さりながら女どもの方へは、珍しき物を調べてござる。すなはちこの鏡と申す物でござる。これは大事の物で、昔はたやすく人間の持つ物では無かつたと申す。さやうにあればこそ、われ等の國許などでは、鏡と申す物を、持

首尾致し—成功  
し

倭姫—原本「大  
和姫」に作る

つ事はにおいて、見た事もござない。この度、某も在京のうちに、この鏡の仔細を懇に承りてござる。そのかみ、人皇十一代垂仁天皇の皇女、倭姫の尊、天照大神より御神鏡を頂き、日本を回國あつて、われこの所をば、五十六億七千萬歳まで、國土安穩に治め給はうするとあつて、そのしるしに、御神鏡を收め給ひ、代々御門にござあり。三種の神器のうち、内侍所と申すは、すなはちその時の鏡の由を申さるによつて、昔は御神物と申して、神々の御寶物として、人間などの持つ物ではなかつたと云ふが、今程は人間の重寶となり、上々は申すに及ばず、われ等如きの者まで、これをたしなむ事である。まことに珍しき物なれば、女どもに取らせうと存じて、漸う求めてござる。只假初の様なれども、鏡の徳によつて、わが身の善悪を知る事もある。その仔細は、まづ世上の有様を見るに、高きも賤しきも、この世の利欲名聞に溺れて、死の近づいたも知らず、我が身の賤しきをも忘れ、老い衰へたるを知らず、徒に月日を送る。何となく鏡を見れば、はや何時となく衰へ、額に四海の波をたて、白髪たる有様を見て、心ある人は打驚

いて、この世の善悪について心を盡さんより、來世の道こそ大事とて、頓て佛道に入りて、後世菩提を思ひよつて、後の世を願ひ、生死無常を知らずるも、鏡の威徳なり。或時は鏡に向ひ、鬚を剃り鬢を撫で、衣紋引繕ひ、見苦しき有様を、われと知らずること、これ第一の重寶なり。又女は鏡に對ひ、顔に白粉を塗り、紅鐵漿をつけて、われと形を飾ること、高も賤しきも遍くすることなり。扱又わが心に嬉しき事あつて、罪も報もなく笑ふ處は、我が身ながら扱々賑かとも、うつよなき。此所にて鏡に對ひ笑ふべし。又心に腹の立つ事あつて、氣色を變へ、われと炎を燃やす。此所にて怒る顔する。扱もく怖しい事かな。我が身でさへ、すさまじく思ふ。かやうのことを思へば、人間は少々腹の立つこともあるとまよよ、堪忍をせうことぢや。人に雜言を云へば、人も腹を立て、われも腹を立て。慳貪邪見にして、佛になり難しとあれば、假初にも悪き心を持つ筈ではない。まことに鏡の徳によつて、我が身の善悪を知ること、これ第一の重寶なり。急ぐ程に、これははや國許に著いた。女どもを喚び出さう。女どもは内に居るか。某が上方より今戻つた。早う出さしめ。

第一の重寶前に對して第二にあるべきか

これの人一こちの人などに同じく我が夫のこと息災—無事

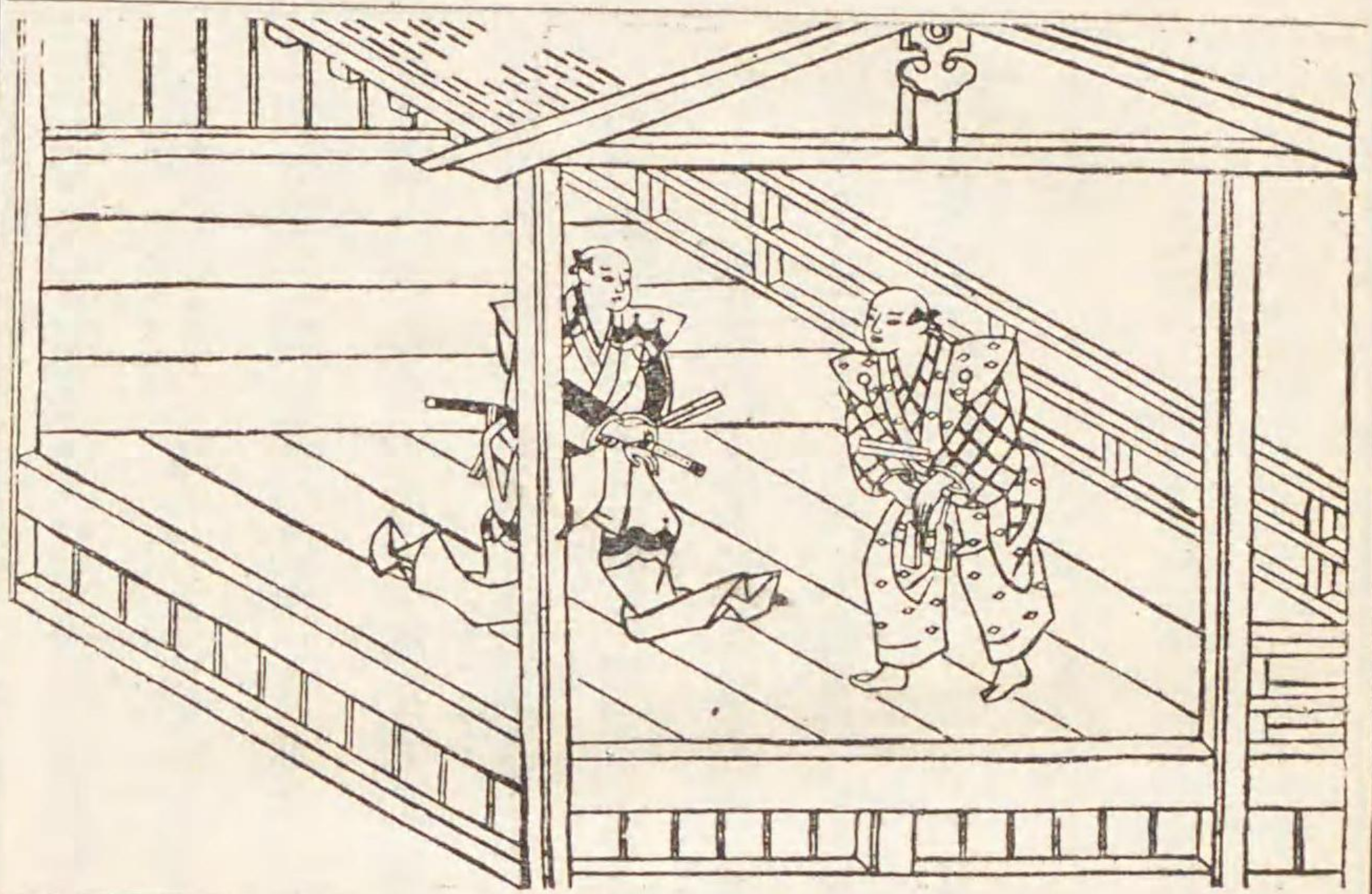
▲女房 これの人の聲がするが、お戻りやつたかしらぬ。▲シテ 女ども、今下つたわ。▲シテ やれく嬉しや。この間は久しく便もなかつたによつて、殊の外氣遣をしたが、まづ息災で下らせられて、めでたうござる。▲シテ なかく。思の外埒が明きかねて、長々在京した。さりながら、内々の訴訟は、思のまよに叶うて下つたほどに、喜ばしませ。▲女房 それはめでたい事でござる。如何ほど暇がいつても、訴訟の事が叶はねば迷惑ぢやが、思の儘に叶うて、お下りめでたうござる。▲シテ それについて、適都へ上つた事ぢや程に、何ぞ土産物を調べて下りたう思つたれども、長々の在京なれば、さやうの物をも調ふる事もならなんだ。▲女房 何が、土産がいりませうぞ。まづこなたの息災で、訴訟が思のまよ叶ひ、これほどの土産がござらうか。▲シテ さりながら、其方には珍らしき物を求めて下つてをりやる。▲女房 それは嬉しい。何と云ふ物でござるぞ。▲シテ その事ぢや。鏡と云ふ物ぢやが、これは昔は神々の寶物で、人間の持つ物ではなかつたけれども、今は人間の嗜道具となつて、都では如何様の賤しき者までもこれを持つ。その仔細は、まづ

この鏡といふものを我が前に立てて見れば、我が形の善悪が目の前に映りて見ゆる。さ  
 るによつて、或は女の顔に白粉を塗り、紅鐵漿をつけて形を飾る。わごりよ達は、見た  
 事もあるまいと思つて、求めて來た。これ見さしませ。▲女房それは嬉しうござる。その  
 様な重寶な物は、遂に聞いたこともござらぬ。まづこれへ見せさせられい。鏡を見る。これ  
 は如何なこと。其方は都へ上つて長々の在京のうち、女を置いて慰まれたと見えた。  
 ▲シテそれはなぜに。▲女房いや、さうあればこそ、この鏡とやらん云ふ物に、女の影がある。  
 これは其方の都で置かれた女ぢやと見えたが、その執心が此所までついて來て、あると  
 見えた。なう腹立や。彼奴を何とせう知らぬ。▲シテ言語道斷の事を云ふ奴ぢや。その女  
 の影は、おのれが影が見ゆる。それを知らぬか。これを見よ。身共が對へば某が影が映  
 る。扇を映せば扇の影、これほど目の前に映す物の影が見ゆる。それが何が腹の立つこ  
 とぢや。▲女房いや、さやうではない。あれ見さしませ。妾が腹を立つれば、彼の女奴  
 が怖しい面をして、妾に向ひ居る。おのれ何としてくれう。よう妾が男を寢取つて、こ

れまで後を追うてうせたなあ。見ればなか／＼腹が立つ。打割つたがよい。臺の板へ投げ  
 て割る態。表を下に投げ  
 ▲シテ 汝は憎い奴ぢや。はる／＼都より求めて來た物を、その如くにう  
 ち割り居つた。思へば憎い奴ぢや。目に物を見せう。▲女房おぬしが分では、妾に物を見  
 する事はなるまい。▲シテ 何のならぬと云ふ事があるものか。つ、女常の通り腹を立てる。▲女房これ  
 は如何なこと。思ふまゝ打擲をした。堪忍をせぬ。合うて、男を打倒して、今こそおれが本望  
 ぢや。屋へ入る。▲シテ 憎い奴。やるまいぞ／＼。

この狂言殊の外むづかしきなり。尤もこれも四十よりうちにては、大方せぬ狂言なり。よく  
 よく分別してすべし。女悪しければ不出來おほし。右出立、つき素袍、下、狂言袴、裾括り、  
 寂びたる小刀よし

くわんどなりー  
官途成りの義か  
出仕若しくは昇  
進などの祝事な  
らん



### 九 鱸 庵 丁

二人

シテ男 長袴、小き刀さし  
アド男 半袴、上下、腰帶

▲をひ これは淀邊に住居致す者でござる。某は都に  
伯父を持つてござるが、この間くわんどなりをす  
るほどに、鯉をくれいと云うて状をおこされてご  
ざる。何かと致して、今日まで鯉を求めませぬ。  
定めて鯉を當にしてござる事もあらう。何卒申  
譯を仕らう。さいく用を申さるれども、何を一  
色調へた事もござらぬほどに、定めてこの度は腹  
をお立ちやる事があらう。さりながら、面白可笑  
しう申譯を仕らう。参るほどにこれぢや。まづ案

淀一番の鯉ー淀  
は鯉の名産地な  
り

片身さかうてー  
片身割きての意  
か

律義ー嚴重正直  
などの意  
肴物を下されて  
一方々より也

わざとさへーわ  
ざわざ

内を乞はう。常の 只今参ります事、別の儀でもござらぬ。先日鯉の事を仰せ下されて  
ござるによつて、方々才覺致して、淀一番の鯉を求めまして、とても事に生鯉に致い  
て、持つて参らうと存じまして、藤蔓にて繋ぎまして、淀の橋杓の二番目の杓に繋いで  
置いてござる。今日これへ参りさまに、そりりくと引き上げてござるが、何とやらん  
手當が輕うござつたによつて、不思議な事ぢや、鯉は水離れが大事ぢやと存じて、きつ  
と引き上げて見ましてござれば、大事の事がござりまするは、片身さかうて、鯉が食べ  
てござるによつて、御祝儀に使はせらるゝに、疵のついた物はいらぬ事ぢやと存じて、  
持つて参りませなんだ。自然鯉をあてになされてもござらうかと存じまして、その申譯  
に参りました。▲をひ 扱々わごりよは、遠路の所を來るに及ばぬに、律義な事ぢや。さり  
ながら、肴物を下されて、客衆も大方もてないたによつて、鯉がなうても苦しうない。  
まづかう通らしませ。一つ變いてやらうぞ。▲をひ それは忝うござりまする。さりなが  
ら、お忙しうもござらうぞ。まづお暇申しませう。▲をひ わざとさへ呼びにやらう所ぢや。



合うた事一叶へ  
た事

一こん一魚一尾  
のこと

内證の者一内輪  
の者

打身一刺身

幸のこと、まづかう通らしませ。▲をひ 左様にござらば通りませう。▲をひ なかく。まづそれにゆるりと居さしませ。▲をひ 畏つてござる。▲をひ 扱もく、憎い奴である。あれは私の甥でござるが、何を云うても、百に一つも合うた事がござらぬ。今度も、鯉は定めて求めますまいが、某が何も知らぬと思つて、今の様なことを申す。憎い奴ぢや。身共も、ちよつほりと口で響いて戻さう。やいく、最前の鱸をどれなりとも一こん洗へと云へ。えい。いやなう、わごりよは慇懃にせずとも、平にゆるりと居さしめ。▲をひ いや、苦しうござりませぬ。▲をひ 其方の仕合に、さる方より見事な鱸を三こん貰うた。其方に振舞はうと思つて、一こん洗へと云ひ付けた。とても事に、何なりとも料理を好ましめ。▲をひ いや、私は内證の者でござる。さやうの肴をば給はせられで、お客へ使はせられませ。▲をひ いや、客も大方響いて暇になつた。氣遣をせずとも料理を好ましめ。▲をひ さやうにござらば、打身で下されませう。▲をひ いや、鱸でをりやるわいの。▲をひ 鱸でも打身が好い。▲をひ 鱸でも打身が好い。▲をひ なかく。▲をひ 扱はわごりよは、打

身の仔細を知らぬと見えた。今の鱸を洗ふ内に、打身の仔細を語つて聞かせう。▲をひ 是れは忝うござりませう。▲をひ 抑打身と云ふ事、寛和元年、その頃は花山の院の御代なりしに、四季折々の御遊、殊に越え、御狩に好かせ給ふにより、政頼に鷹をすゑさせ、國々へ御下向ある。折節遠江國、橋本の長が宿所に著き給ふ。長は出で合ひ、三獻の土器据ゑたりし時、板に鯉を出す。その時庖丁人は、四官の大夫忠政なり。忠政は三廊近き釣殿に出でて畏る。それ忠政とありしかば、忠政何とか思ひけん、板なる鯉をば切らずして、簀子の竹を一間外し、下なる魚を挾んで上げ、みさごの鰭を拂ひおろし、魚を離せば魚喜び、石菖の蔭に遊び隠れぬ。扱その後板引き寄せ、すつぱと切つては、しつととうちつけ、すつぱと切つては、しつととうちつけ、竝居たまへる上北面、下北面、納言、宰相、檢非違使、黒袴の徒黨に至るまで、三刀づつうちつけ參らせしかば、忠政が只今の庖丁神妙なり、勳功は乞ふによるべしと、御感なりてより此方、打身と云ふ事始まりたり。されば打身は、海のものにては鯛、川のものにては鯉ならではあるべ

かまひて一構へて也必ず也  
手ねばな者一手のさき者

よしにあまり十分氣取つての義歟

からず。御内の親は庖丁人、庖丁人のその子として、鱸にうちみ食はうなどというて、立居の人に笑はれ給ふな。かまひて無い事でをりやるぞ。▲をひ扱は無い事でござりまするか。▲をひなかく。最前の鱸を、手ねばな者に云ひ付けたれば、暇がいる。やい、今の鱸を洗うたらば、早う持つて来いと云へ。扱最前の鱸をまんまと洗ひすまいて、切目尋常なる俎に、備前庖丁、青木の箸、紙一重おつ取り添へ、しつけ知つたる若者が、二人して持つて出やう。その時其方にお切りそへと申さう。其所でわごりよが云はうには、いや、伯父御の庖丁久しく見參らせぬ程に、一手遊ばされい、見物仕りたいと云はでは叶ふまい。▲をひなかく。さやうに申しませう。▲をひその時某がよしにあまり、板際にするくと立ち寄り、箸刀、おつ取つて、紙を三つに切り、二つを下へおしおろし、一つを俎へどうどおき、禮式の水こそけ、さつくと三刀する。するまよに、一の刀にて魚頭をつき、二の刀にて上身をおろし、おろしもあへず、魚頭俎頭にどうとおき、中打ちやうくと三つに切つて、いざこれを煎物にして申さう。幸うはみ、したみがある。

かいしき一南天の葉を敷くこと

香頭一吸物などにあしらふ吸口

これをさつと、かき壺にして振舞はう。魚の身の、厚い所を薄う見えい、薄い所を厚う見ゆるやうに作るが、庖丁人の腕でおぢやる。いかにも、かつつくばうて、刀ばやに、すはりく、すはくくと作つて、生姜酢をもつて、きつくと壺へ、深草土器に、南天燭のかいしきを敷き、ちよほくと盛うて、其方にも振舞はうず。身共も相伴せうが、何とこれは好い肴ではあるまいか。▲をひ仰せの通、これは一段と好うござりませう。▲をひそれならばこれを肴にして、左をもつて五盃飲うでくれさしませ。▲をひ尤も肴は好うござりますれども、それはなりません程に、御許されて下されませ。▲をひいや、酒と云ふ物は、強ひねば飲まれぬ物ぢや。是非とも飲うでくれさしませ。▲をひそれ程に、仰せらるゝ程に、下されても見ませうか。▲をひ飲まう。▲をひなかく。▲をひ近頃満足した。扱勝手よりも、煎物こそ出来たれとて、柚の香頭に、貝杓子おつ取り添へ、持つて出やう。これをも好い所をよそうて、其方へも申さうず。某も相伴せうが、何とこれは、五盃目の盃には好うはあるまいか。▲をひないこととござらう。▲をひそれ程に思ふならば、

ねらうて一飲む  
つもりになつて

とう一未詳  
極一上品

今度は右を以て、七盃飲うでくれさしませ。▲をひ 最前の五盃さへ迷惑に存じましたに、  
 況やその大盃で、存じも寄らぬことでござる。御免なされて下されませ。▲をひ いや、  
 わごりよはよう上戸を知つて、強ひる事ぢやに、是非ともに飲うでくれさしませ。▲をひ そ  
 れほどに、強ひさせられますならば、何卒ねらうて見ませうまで。▲をひ 狙うて見やう。  
 ▲をひ なかく。▲をひ それは嬉しい。扱小盃を以て、ちよろりくと廻さうか。さつと取  
 らうか。▲をひ いや、もう早うお取りなされませ。▲をひ それならば、さつと取らうぞ。扱  
 酒の上に、濃茶は好い物ではないか。▲をひ なかく、一段好いものでござる。▲をひ 某は  
 宇治邊に知音を持つたが、今度このとうを營むとあつて、極を三袋くれた。折節一袋は、  
 挽かせて置いた。其方が知る通り、身ども茶の湯に好いたによつて、奥の間に湯がりん  
 りんと沸りすまいてある。これへ其方を同道してお茶を申さう。▲をひ それは忝うござ  
 りまする。▲をひ これも其方にお立てそいと申さうが、茶は亭主の役ぢやによつて、某が  
 立つるであらう。湯七分に泡八分、むくく、やはく、ほらくくと、昔様に中高に、

猫の背をたてた如くに、立てないて振舞はう。▲をひ それは好うござりませう。▲をひ 其處  
 で其方が褒めてくれたがよい。▲をひ 何と褒めましたか好うござるぞ。▲をひ 最前鱸を料理  
 なされたお手許、近頃見事でござると存じましたれば、殊に御茶の湯の御手前、見事さ  
 うにござると、おりしきつて、褒めてくれたが好い。▲をひ なかく。さやうに申して褒  
 めませう。▲をひ 總じて人は、乗せらるよといへども、褒めらるよは嬉しいものぢや。そ  
 こで某がふはと乗つて、いや、わごりよは、言はれぬ辭儀を云ふ人ぢや、親子の心安さは、  
 この様な時ぢや、ゆるりと居て、二服も三服もお飲みそいと申さうが、如何に其方が茶  
 好でも、極を二服とえ飲むまいぞ。▲をひ 思ひも寄らぬ事でござる。▲をひ 手前をさつと仕  
 舞はうぞ。後にはなるまい。とてもものことに、暇乞の様子を教やう。お立ちやれ。▲をひ 畏  
 つてござる。▲をひ 最前の酒は、五盃と七盃と十二盃よ。▲をひ なかく、十二盃でござる。  
 ▲をひ 十二盃飲うならば、如何にわごりよは、強いと云うたりとも、舌元も立つまいし、  
 足元も定まるまい。▲をひ さやうでござらう。▲をひ その時、科もない扇をひねりまはして、

はうちやう一尉  
鳥(五位鷹)に庖  
丁を言掛く

今日はいかい御馳走でござる、殊にお茶と申し、御酒と申し、忝う畏り候、重ねては鯉をこそ持つて参らずとも、鱒なりとも、鮠にても、持つて参らう、さらばくくと、おしやるほど饗いて戻したいが、わごりよが鯉は獺が食うたとおしやる。某が鱸をばうちやうが食うたといふ。今の物語を食うた心をして、とつととお歸りそへ。▲をひ面もござらぬ。▲をちようおぢやつた。

十 瓜 盗 人

二人 シテ盗人 半袴、上下、腰帶  
アド男 出立同前なり

臍落一帯の落ち  
たるなり

人形一案山子な  
り

▲瓜主 罷出でたる者は、この邊の耕作人でござる。當年は瓜を作りてござるが、身共が仕合で、殊の外よう出来てござる。今日は畑へ見舞うて、臍落の致したを、ちと取つて参らうと存ずる。まことにこの邊 方々に瓜を作りたれども、某がやうなはござらぬ。畑へは毎日見舞はねばならぬ。これが身共が畑ぢや。やれく嬉しや。夥しう生つた。思ひ出した。いつも畑へ 獸がついて瓜を荒す。人形を作りおかう。人形を一段好い。明日見舞うて臍落を取らう。太鼓座へ ▲瓜盗 これはこの邊に住居致す者でござる。今日用所ござつて、山一つ彼方へ参つてござるが、道に見事な瓜が生つてあつた。私にお目をかけらるるお方に、瓜好きな人がござるほどに、今夜あれへ参つて、四つ五つ取つて参らうと存ずる。方々に瓜畠が数多ござれども、今日見て置いたやうな、見事な瓜はござらぬ。この

轉びをうつ一畠の上を轉びまはる也

眞平御免されませ一案山子を見て眞の人と思ふ也

邊にあつたが、どの畠ちや知らぬ。これちや。まづ榎杓を抜かう。垣を二三本抜く態をして、腰かどめて畠へはいる。さあ畠へは這入つたが、番の者は無いか知らぬ。有るならば聲を立てうが、無いものちや。晝見たれば瓜がいかい事見えだが、夜ちやによつて見えぬ。これが瓜さうな。瓜かと思ふたれば枯葉ちや。あそこ此所を捜して見て、瓜にあたらぬ。この様な事では、瓜を取る事はなるまい。何としたものであらう。思ひ出した。夜瓜を取るには、轉びをうつて取るものちやと聞いた。さらばこれから轉びをうつて見やう。さればこそ、枕のやうにあたつた。枕の時寐て居つた。扱もく、好い匂ちや。此所にあるわ。此所にて地唄ひの方にかせあり。その側へ轉びかゝる。人形を見て肝を潰す。眞平御免されませ。私は如何ほどなりとも取られう。此所にて地唄ひの方にかせあり。その側へ轉びかゝる。人形を見て肝を潰す。眞平御免されませ。私は盗人ではござりませぬ。こなたの畠が、餘り見事に瓜が生りましたと承りまして、見物に参りました。命の義を御免されませ。瓜二つ三つ取りましてござる。皆返しませう。御免なつて下されませ。申し、物を仰しやらねば、何とも迷惑でござる。重ねては最早参りますまい程に、平にゆるさせられて、返させられて下されませや。申し、なう。手をあげて、

うしにくらはれし未詳い合せの事一色の事

うせた一來たの意

お目をかけらるる方一自分を愛せらるる人也

暗き時物を見る態して、人形と見付けて、これは如何なこと。うしにくらはれ、さてもく、よい肝を潰した。瓜主かと思つて、い合せの事を思ひ、迷惑した。この様にようもく、上手が作つたものちや。その儘人のやうな。獸が見たらば肝を潰して、あたりへは寄るまい。此奴故思ひも寄らぬ肝を潰した。重ねて来る事ではなし、うちこかいて退けう。腹の立つ事ちや。瓜蔓も引き撈つて退けう。よい仕合。急いで戻らう。太鼓の側へ入る。▲瓜主 昨日瓜畠へ参つた。まだ臍落が致さなんだ。今日は大方臍落がござらう。取つて参らう。内の者を遣れば、瓜を盗み居るによつて、某の毎日参らねばならぬ。これは如何な事。散々に畠を荒いておいた。これは扱、瓜蔓も引き撈つて置き居つた。その上人形も打ち倒しておきをつた。これはいかさま、獸の業ではない。瓜盗人め、ゆうべうせたものであらう。扱もく、腹の立つ事ちや。今夜は某が案山子になつて捕らへう。定めてゆうべの味を得て、又今夜も取りに参らぬことあるまい。右の人形の様に烏帽子を着、面を被り、左に綱、右に竹の杖、床几に腰をかけ居る。▲瓜盗 他所へ物を遣るとも、後前の分別して遣らう事ちや。盗んだ瓜を、さるお目をかけらるる方へ進上致した

れば、扱も好い瓜ぢや、これはそちが手作かと仰せられたによつて、なか／＼、私の手作でござると申したれば、扱も好い瓜ぢや。近頃無心なれども、客があるほどに、瓜をま四つ五つくれいと仰せらるよ。何とも返事の致しやうがなうて、畏つてござると申した。某の手作でござると申したによつて、今更なりますまいとも申されぬ。是非に及ばぬ。今夜あれへ行て、瓜を取つて参らうと存する。この様に又参らうとは知らいで、瓜を散々に荒して置いた。瓜主が見舞はぬ事はあるまい。見舞うたらば腹を立てて、今夜は番をして居る事もあらう。何とやら胸騒がして氣遣な。この畠ぢや。いや、ゆうべ垣を破つて置いたが、そのまゝある。定めて瓜主が見舞はなんだものであらう。見舞うたらば、この様にしては置くまい。さればこそ、撈つておいた瓜蔓が、その儘である。嬉しい事ぢや。見つけて大に肝潰す。これは如何な事。不思議な事ぢや。ゆうべ人形をうちこかいて置いたが、又立てて置いた。これは思へば、瓜主が見舞はぬではない。合點がいかぬ。はあ、合點した。定めて内の者の業であらう。主が畠を見舞うて来いと云ひ付け

この様なことぢや  
や一骨惜しみを  
する也

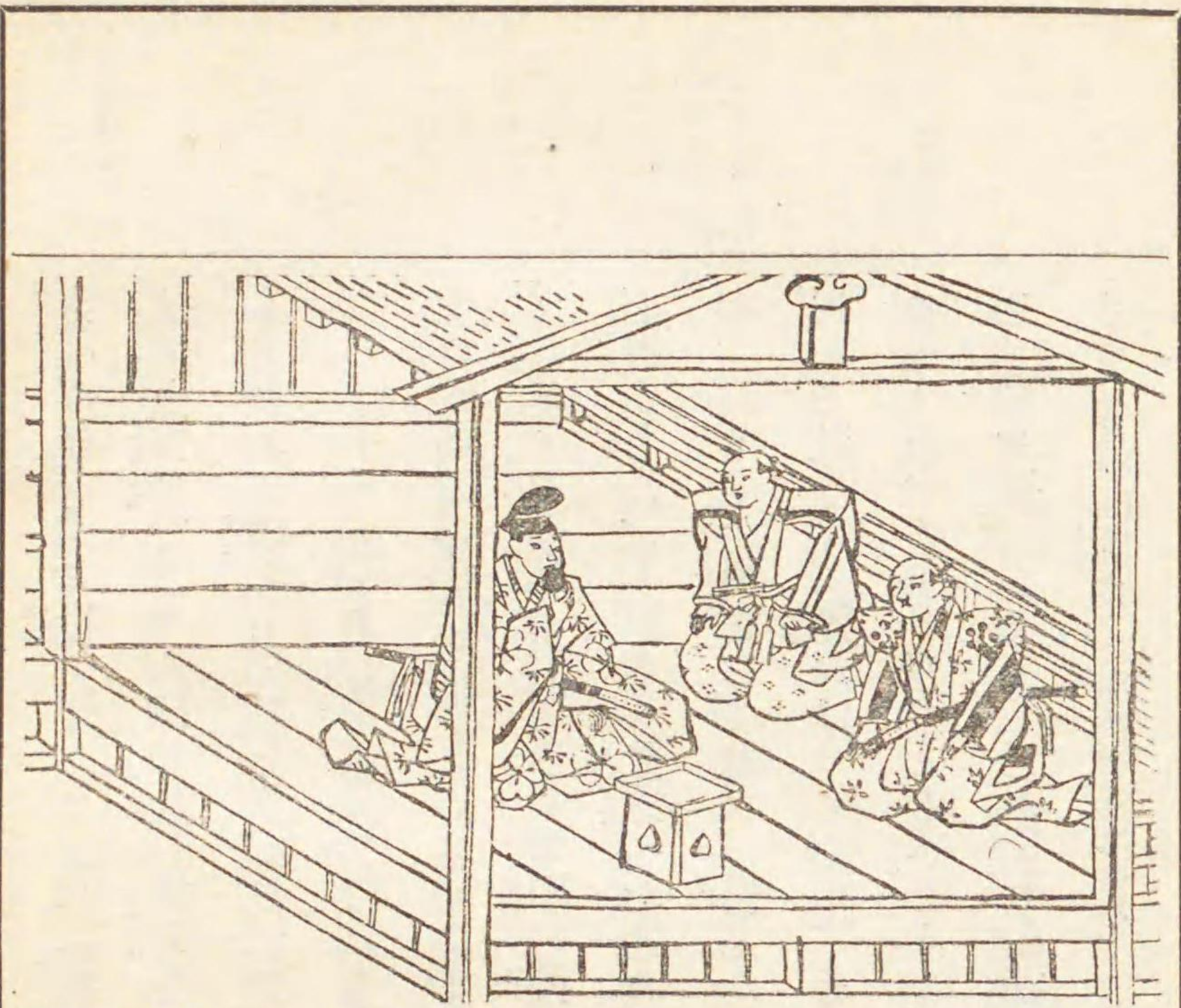
如何に罪人一責  
の文句

死田の山一冥途  
にありといふ山

たによつて、見舞はしたれども、人形ばかり立てて置いて、垣もその儘で戻つたものぢやあらう。總じて下々は、どれもこの様なことぢや。殊にこの案山子は、ゆうべよりは猶よう人に似た。こゝにて仕様あり。下に居て、うそその儘人ぢや。某をきつと見て居る。いや、思ひ出した。いつも盆になれば、若い衆が踊をせらるよ。當年は中踊に、鬼が責める所をせうと云はれた。幸のこと、この人形をば罪人にして、某が鬼になつて、責めて見やう。わい／＼。よい杖もある。急いで責めて見やう。如何に罪人、地獄遠きにあらず、極樂遙なり。急げとこそ。かけりせめてまづ鬼の責はこれが好からう。人形ぢやによつて、責力が無い。さりながら、これも鬨であらう。某が罪人に取當る事もあらう。この人形を鬼にして、身共が罪人になつて責められて見やう。幸よき引綱がある。あら悲しや。これほど参り候に、さのみな御責め候ひそ。行けど行かれぬ死出の山、行かんとすれば引止む。止まれんば、杖でちやうど打つ。▲瓜盜これは如何なこと。何者やら飛礫を打つた。あたりに人は無いが、不思議な事ぢや。何者が打つたぞ知らぬ。合點が行かぬ。今

この綱つなを引いて肩かたにかけたればうつつたが、はあ、扱こしらへたものぢや。この綱つなを引けば上あがる。下さけると下さがる。ばつたりくく。さてもく可笑をかしい事ことかな。百姓しやうは賢かしこい者ものぢや。これなれば氣遣きづかひない。さらばも一度責せめられて見みやう。行ゆけど行ゆかれぬ死し出での山やま、行ゆかんとすれば引止ひきどむ。止とまれんば、杖つゑにてちや、うど打うちつ。▲瓜うり主まり、面と、がつきめ、やるまいぞく。▲瓜うり盜ぬすあら悲かなしや。免ゆるさせられく。

がつきめ、餓鬼めと罵ののる也



續狂言記卷之三

一岡大夫

四人  
シテ聲  
をんな  
舅

素襖、折烏帽子、小さ刀  
箔小袖、ゆばうし  
長袴、小さ刀  
太郎冠者 半袴、上下、腰帶

▲しろうと 罷出まかりいでたる者は、この邊あたりの者ものでござる。今日け日は最上吉日さいじやうきちにちでござるによつて、聲殿むこぎのの御出おいでなされうとある。まづ太郎冠者たらうくわじやを喚よび出し、申し付けう。やいく、太郎冠者たらうくわじやあるか。▲冠者かむらはあ、御前おまえに居をります。▲しろうと 汝なんぢを喚よび出すこと、別べつの事ことでない。今日け日は最上吉日さいじやうきちにちなれば、聲殿むこぎのの御出おいでなされる筈はずぢや程ほどに、きれいに掃除さうじをせい。御出おいでなら此こゝ

いとしがらるゝ  
可愛がらるゝ  
也

方へ申せ。▲冠者 畏つてござる。二人下に居る。▲むこ 舅にいとしがらるゝ花聲でござる。今日は最上吉日でござるほどに、聲入を致さうと存ずる。まづ急いで参らう。道行まことに聲入といふは晴なもので、人が見たがると申す。定めて、垣からも、窓からも、目ばかりでござらう。やあ、参る程に、これぢや。まづ案内を申さう。ものも。案内も。▲冠者 表に案内がある。案内とはどなたでござるぞ。▲むこ これは、この花聲が参つたと申せ。▲冠者 畏つてござる。申し、聲殿の御出でござる。▲しうと 此方へ通らせられと申せ。▲冠者 心得ました。申し、此方へお通りなされませ。▲むこ 心得た。無案内にござる。▲しうと やあ、好うこそ御出なされた。待ちかねました。▲むこ されば、早々参りませう所に、何かと致して、遅なりました。その段は、これのお娘子にめんじて、御免なされ。▲しうと いや、ちつとも苦しいござらぬ。太郎冠者、今の言ひ付けて置いた物を出せ。▲冠者 畏つてござる。三方に、蕨餅載せ出す。聲の前に置くなり。餅は黒き絹切にて丸めぬひ、のせあくなり。▲しうと さあ、これを参れ。▲むこ これは旨さうな物でござる。さらば食べませう。餅を取り食ふ態する。懐中へ入る也。扱も、旨い物

朗詠―藤原公任  
撰和漢朗詠集な  
り  
をなあ―女也娘  
即ちこの聲の妻

でござる。これは何と申す物でござる。▲しうと これは蕨餅と申すものでござるが、延喜の帝の御寵愛なされたによつて、官を下されて、蕨餅を岡大夫とも申します。すなはち朗詠の詩にも載つてござる。▲むこ 扱も、旨い物でござる。も一つ食べませう。▲しうと やい、太郎冠者、も一つ進ぜ。▲冠者 いや、最早ござりませぬ。▲しうと はて扱、残多ござる。最早無いと申す。お歸りなされたら、この仕様を、をなあが存じて居ます。拵へさしてまるれ。▲シテ 私はない物は食べませぬ。それなら歸りまして、宿で食べませう。最早かう参ります。▲しうと 何の御馳走もなうて、残多ござる。さらばさらば。ようござつた。▲むこ はあ、なう、嬉しや。まんまと聲入しました。道行まづ急いで歸つて、今の餅を食べませう。はやこれぢや。なう、をなあ、今歸つたわ。▲女やあ、はや歸らせられたか。早うござつた。▲むこ されば、舅殿も機嫌がようて、馳走にあうた。それにつき、何やら珍しい物を振舞はれたわ。▲女 それは何でござつた。▲むこ はあ、何やらであつたが。藤太夫とやら云はれたが、老子にも載つてあると云はれた。



鶏既鳴云々唐の賈島の詩  
 かいじやうとき一粥常齋か  
 かいのすざい一粥の素菜か  
 氣馨云々都良香の詩  
 ところ一野老也薯預也  
 池凍云々藤原篤茂の詩  
 こしゆ海云々未詳  
 紫塵の云々紫塵嫉人舉手といふ小野篁の詩による

▲女 いやく、それは朗詠の詩の事でござらう。▲むこ それく、それを食はう。▲女 これ  
 は食はるゝ物でござらぬ。妾が一つ二つ覚えて居ます。云ひませう程に、その内に有る  
 なら有ると仰せられ。▲むこ 心得た。云うて聞かしやれ。▲女 鶏既鳴忠臣待旦。あし  
 たとは、かいじやう時、若しかいのすざい、鶏冠菜ばしまるつたか。▲むこ いやく、そ  
 の様な物でもなかつたわ。▲女 氣馨風梳新柳髮。氷消波洗舊苔。鬚ひけにて  
 思ひ出した。若しところばしまるつたか。▲むこ いやく、ところは己も知つて居るが、  
 それでもない。▲女 池凍東頭風度解。窓梅北面雪封寒。梅にて思ひ出した。若  
 し梅干ばしまるつたか。▲むこ なうく、酸やのく。聞くさへ酸い。それでもをりやら  
 ぬ。▲女 こしゆ海の底には、なつとうの沙を敷くとは、納豆を肴にして、酒ばしくらう  
 たか。▲むこ 酒ばしくらうたかとは、葉で作つても男ぢやに、くらうたかとは、どうした  
 事ぢや。おのれ聴かぬぞ。ぶつておいたがよい。あゝ腹立ちや。▲女 なうく、はらだち  
 やく。したよか妾が手を打つた。扱も痛やく。まことに紫塵の懶さは、蕨一手をと

ると云ふが、このことであらう。なうく、痛い事かな。▲むこ やあく、今のは何と云う  
 だぞ。も一度云うて聞かしやれ。▲女 何ぢや、も一度云へ。紫塵の懶さは、蕨一手をと  
 と云ふ事ぢや。▲むこ それく、蕨で思ひ出したわ。蕨餅のことぢや。▲女 何と、蕨餅と仰  
 せらるゝか。それは妾が仕様を知つて居ます。拵へて進ぜうぞ。▲むこ なうく、嬉しや  
 嬉しや。旨い物ぢやわ。よう拵へてたもれ。食ひたうてならぬ。▲女 心得ました。易い事ぢ  
 や。こちへござれく。▲むこ 嬉しい事ぢや。わごりよは立派な人ぢや。生長い事をよう  
 覚えて居やる。今の打擲したは堪忍さしませ。▲女 何が扱、堪忍せいでなりませうか。氣  
 遣召さるな。▲むこ なうく、いとしやく。こちへをりやれく。女を負うて  
 這入る也。

竹子争一名竹の子

二 竹子争

三人

シテアド二人 半袴、上下、腰帶  
アド男 長袴、小さ刀さし

根がさいて一  
根が蔓る也

▲初アド 罷出でたる者は、この邊に住居致す者でござる。某は畑を數多持つてござるが、當年は、某の畑へ、隣の藪から根がさいて、竹の子がきたと申す。今日は参り、ちと竹の子を取つて参らうと存ずる。まことに世の中に、蒔いた物の生ゆるは尤でござる。蒔かぬ物の生えると云ふ事は、調法なことぢや。参る程にこれぢや。扱もく、見事な竹の子が出来た。まづこれは折りませう。ほんく。扱もく、見事な事や。▲シテ 罷出でたる者は、此邊の者でござる。某藪を數多持つてござるが、當年は、竹の子が、大分出来てござる。今日はちと藪へ参り、垣なども結はせ、人の取らぬやうに致さうと存ずる。總じて、何時とて、竹の子時分には、人が取りたがる事でござる。やあ、参る程にこれぢや。扱もく、夥しう出来た。▲初アド ほんく。▲シテ これく、なぜにその竹

ていとーきつと

の子を取らします。▲初アド やあ、お出やつたよ。何と、この竹の子をなぜに取る。▲シテ なかく。▲初アド これは身共が畑へ生えたによつて取る。わごりよは構ひそ。▲シテ 尤も畑はそちのなれども、竹の根のさいたは、こちの藪からぢやによつて、取らする事はならぬ。▲初アド わごりよは無理な事を云ふ。どうでも身共が畑に生えたゆゑ、取らねばならぬ。構やるな。▲シテ お主はていと取るか。▲初アド ていとと云うて何とする。▲シテ 目に物見せう。▲初アド それは誰が。▲シテ 身共が。▲初アド そちが物見せ立は、おいてくれい。▲シテ 悔むな。▲初アド 悔むことはをりない。▲シテ おのれは憎い奴の。▲初アド やれ出合へく、あ、よい所へ御出やつた。まづお主も聞いてたもれ。あれが、身共 筍を取るによつて、取らすまいと云へば、是非取らうといふ故に、追ひ廻す。取らぬやうに云うてたもれ。▲後アド 尤ぢや。その通いうてやらう。それに待たしめ。なうく、わごりよは、なぜに隣の筍を取るぞ。▲初アド やあ、其方はよい所へ出さしました。まづ聞いてくれさ

ひかせてやつた  
取らせたこと

しませ。隣の竹の子を取りは致さぬ。身共が畑に生えた筍を取れば、取らすまいと云ふによつての事でをりやる。▲後アド扱は、わごりよが畑に出来たか。▲初アドなかく、

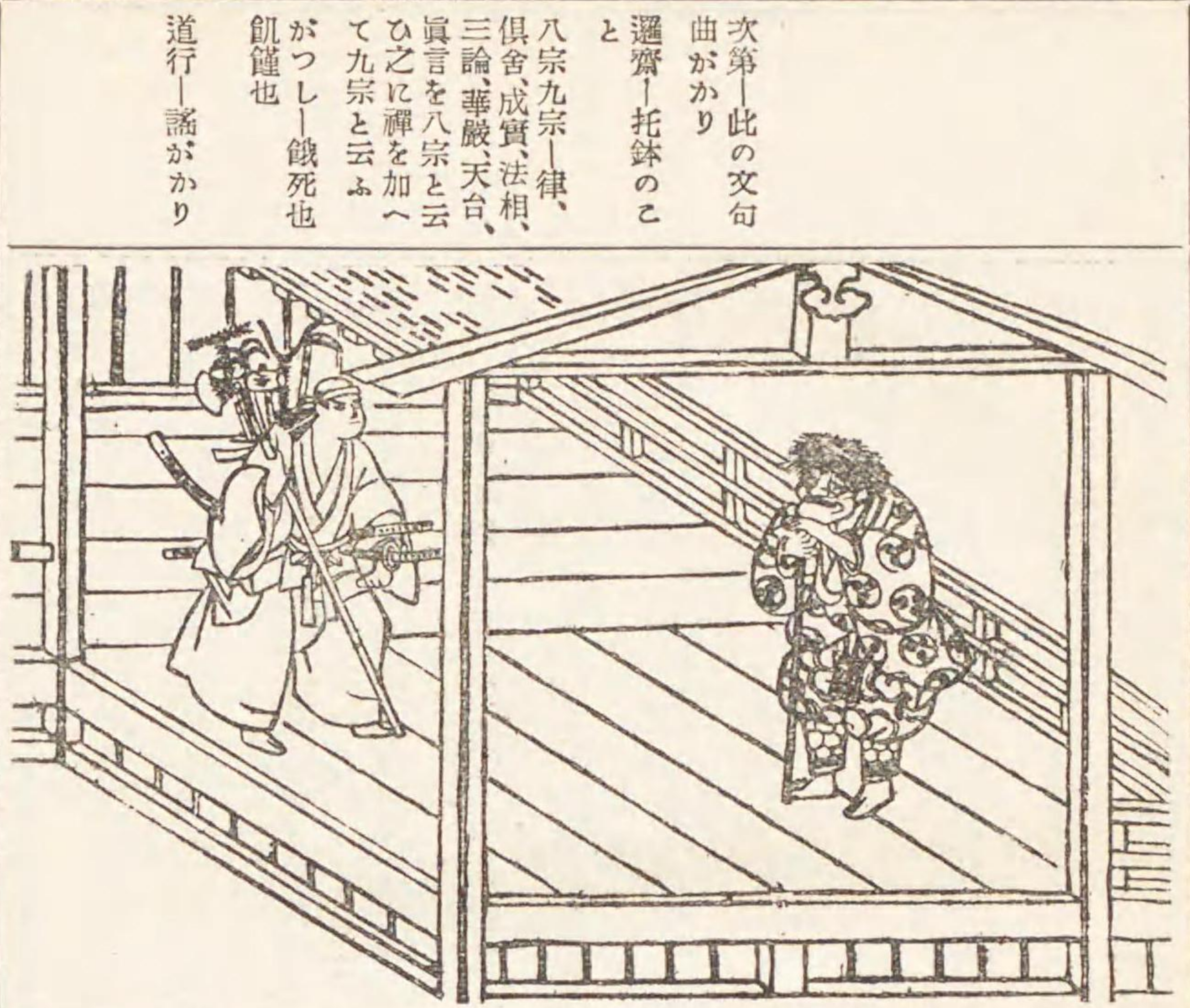
▲後アドこれはあれがのが無理ぢや。その通いはう。今の聞かしましたか。▲シテなかく、聞いた。尤も畑へ生えたれども、根をさいたは此方の藪からなれば、竹の子を取らすまいと云ふ事ぢや。▲後アド尤もさうなれども、さうは云はれまい。▲シテ云はれまい。お主頼む事ではない。退かしめ。▲後アドまづ待ちやれ。その通いうて見やう。今の聞かせられたか。▲初アドそれは無理な事を云ふ。尤も根をさす所は隣からなれども、畑が身共が畑ぢや。取らねばならぬ。それならば、今から根のさよぬやうにせいと、云うてたもれ。▲後アドなうく、それならば、今から根のさよぬやうにしてたもれと云はるよ。▲シテ扱もく、云へば云はるよものぢや。それならば身共もまた、あれが方から取るものがある。取つてたもれ。▲後アドそれは何ぢや。▲シテいつぞやあれが牛が、身共が既で子を生んだなれども、身共は律義に、親牛も、子も、皆ひかせてやつた。それならば、その

理分—道理の立  
つこと

時の牛の子は、こちへおこせと云うてたもれ。▲後アド心得た。なうく、最前からののは、其方の理分にしてやらう。その代に、牛の子をおこせいと云ふわ。▲初アド扱もく、云へば云はるよものかな。さりながら、おぬしも思うて見やれ。牛の子と筍とは、一口には云はれまい。▲後アドいやく、兎角身共が思ふには、この様に互に云うては埒が明かぬ。この上は何ぞ勝負をして、その勝負によつて、牛の子を遣るものか、遣らぬものかにせう。何とあらう。▲初アドして、勝負には何を致さう。▲後アドされば、何がよからうぞ。▲初アド身共は歌を詠まう。あれも詠むか、問うてたもれ。▲後アドなうく、これでは埒が明かぬによつて、勝負に歌を詠まうと云ふが、其方も詠むか。▲シテあの人の歌は、終に承らぬ。それなら、まづあれから詠めと云うて下され。▲後アドさあく、急いで詠ましめ。▲初アドかうもござらうか。▲後アド何との。▲初アド我が畑へ隣の竹の根をさいて、思はず知らぬ竹の子を取る。▲後アド一段と出来た。▲初アドあれにも詠めとおしやれ。▲後アドさあく、急いで詠ましめ。▲シテかうもござらうか。▲後アド何との。▲シテ我

がまやで隣の牛の子を生みて、思はず知らず牛の子を取る。▲後アド 一段出来た。さりながら、これも同じやうな事ぢや。重ねて何ぞ勝負をしやれ。▲シテ それならば、この度は、角力をとらうと云うてたもれ。▲後アド なうく、角力をとらうと云ふわ。▲初アド いかにもとりませう。▲後アド それならばお出やれ。▲シテ さあく、行司をめされ。▲後アド 心得た。お手つ。▲二人 いやくく。▲シテ 勝たぞくく。▲初アド なうく、あのやうに、棒でうちまはする角力は、遂に取つた事がござらぬ。棒を下に置いて、とれと云うてたもれ。▲後アド なうく、その棒を下に置いて、おとりやれ。▲シテ いやく、これは、身共の一方の足ぢやによつて、下に置く事はならぬと云やれ。▲後アド なうく、下に置く事はならぬと云ふわ。とかくあの棒に、取りつけばよいほどに、棒をお取りやれ。▲初アド 心得た。それならば、も一番とらうとおいやれ。▲後アド も一番とらうと云はるわ。▲シテ いかにもとりませう。さあく、行司をなされ。▲後アド お手つ。▲初アド やあく、お手、勝つたぞく。▲シテ やいく、角力は三番の物ぢや。やるまいぞく。その足をかや

せく。



次第此の文句  
曲がかり  
邏齋一托鉢のこ  
と  
八宗九宗一律  
俱舎成實法相  
三論華嚴天台  
眞言を八宗と云  
ひ之に禪を加へ  
て九宗と云ふ  
がつし一餓死也  
飢饉也  
道行一謠がかり

### 三朝比奈

二人

シテ朝比奈  
アド鬼  
上白水衣、下大口、大刀は  
き、腰帶、さばき、髪、白  
鉢巻、棒つき、七道具  
鬼の頭巾、ぶあくの面、厚  
板、下半袴くさり、杖つき

▲聞屋 次第にて 地獄の主閻魔王く、邏齋にいざや  
出でうよ。詞これは地獄の主、閻魔王です。今  
程は人間が賢うなつて、八宗九宗に法を分け、彌  
陀の淨土へ、ぞろりくと、ぞろめくによつて、  
地獄のがつし以の外な。それ故この閻魔王が、  
六道の辻へ出で、罪人が來てあるなら、地獄へ攻  
め落さうと存じ候。道行ふし住みなれし地獄の里を  
立ち出でてく、足に任せて行くほどに、六道の辻

一聲一同上

朝比奈の三郎一  
名は義秀和田義  
盛の巴に生まれ世  
たる子

たん尺一手形の  
事をいふ(俚言  
集覽)  
きつくりともせ  
ぬ一寸も身動  
きせぬ也

に著きにけり。詞急ぐ程に、これは六道の辻に著いた。この所に待つて居て、罪人が來  
たらば、地獄へ攻め落しくれう。▲シテ朝比奈一セイちからもやうく朝比奈は、冥土へとて  
こそ急ぎけれ。詞これは朝比奈の三郎何がし、思はずも無常の風にさそはれ、冥土へ赴  
く。そろりくと參らう。▲あに はあ人臭い。罪人が來たさうな。さればこそ罪人が來た。  
いかに罪人、急げくとこそ。貴一段▲シテやい、最前より、某が眼の前をちらりく  
とするは、何者ぢや。▲あにこれは地獄の主閻魔王ぢや。▲シテ扱もく、痛はしい態か  
な。娑婆で聞いたは、玉の冠に石の帶、四邊も輝く態と聞いたが、さうもをりないよ。  
▲あにされば、その古は、金銀ちりばめ、輝くやうな態であつたが、今は人間が賢うて、  
彌陀の淨土へ、ぞろりくと、ぞろめくにより、地獄のがつし以の外な。さあるによつ  
て、玉の冠、何もかも、たん尺の代にやつて、一色もない。只今汝を責めて、地獄へ責  
め落しくれうぞ。▲シテ 何程もお責めそい。▲あに いかに罪人、急げくとこそ。貴一段あり。  
こじ、權をゆすり  
などするなり。 やい、この閻魔王が、これほどに責めるに、きつくりともせぬは何

あつたらし一替し  
い事に云ふ

責めとむない  
責めたるもない

荏柄の平太一名  
は胤長

ふりこほりがつ  
くぬき未詳

者ぢや。▲シテ身共を知らぬか。朝比奈の三郎何がしぢや。▲もし何ぢや。朝比奈ぢや。あつたら骨折つた。責めまいものを。さりながら、朝比奈と聞いて責めぬも口惜しい。も一度責めて、地獄へ落してくれうぞ。いかに罪人、急げくとこそ。貴一段あり。この内にシテ棒にてこかす。▲シテお責めそい。▲おにいやく、最早責めとむない。やあ、よい事思ひ出した。汝は和田軍の様子知つて居やう。語つて聞かせ。▲シテをよ、なか。手にかけて知つて居る。語らう程に、床几持つて来い。▲おに心得た。さあ、語れ。鬼腰掛けて居る。▲おに扱も閻魔王あたるのきつい奴ぢや。▲シテやい、これはその時、手柄をした七つ道具ぢや。▲おにさうあるか。生臭い。▲シテ語つて聞かさう。聞け。▲おに語れ。聞くぞ。▲シテ抑和田軍の起は、荏柄の平太、碓氷峠にて君に奪はれ、一度ならず三度まで、鎌倉を引き渡さる。一門九十三騎、平太繩目の恥を雪がんと、親にて候義盛、白髪頭に甲を戴けば、一門残らず、鎌倉殿の大御所の、南門に押し寄せ、関をどつと作る。ふりこほりがつとぬき、さけ切、この朝比奈が人つづて、目を驚す所に、義盛使を立て、何とて朝比奈は、

かうりやう一虹  
梁なるべし

門破らぬぞ、急ぎ破れとありしかば、畏つて候と、頓て馬より飛んでおり、ゆらりくと立ち出づる。内には、すは朝比奈こそ、門破れと、大きなかうりやうに、大釘鏃を、打ちぬきくしけるは、劍の山の如くなり。朝比奈、何程の事のあるべきぞと、門の扉に手をかけ、えいやと押せば、えいやと抱ゆ。えいやくと押したりしは、大地震の如くなり。されども朝比奈、力や勝りけん、門扉おし落し、内なる武者三十騎、壓に打たれて死したりしは、そのまゝ鮎をしたるが如くなり。▲おにあよ、その鮎が、一頬張ほとばりたいなあ。▲シテその時ならば申さうものを。かよつしところに、御所の武士に、五十嵐の小文次と名乗つて、朝比奈が鎧をかへさんと、目掛けてかよる。朝比奈、何程の事のあるべきと思ひ、かの小文次を取つて引き寄せ、鞍の前輪に押し當て、左へはきりよ、右へはきりよ、きりよくと押し廻してありしよな。閻魔を引。▲おにあよ最早、和田軍聞きたうない。▲シテもそつと語らう。▲おにいや聞きたうない。▲シテそれなら、淨土への道しるべせい。▲おにこの閻魔王さへまよにする程に、どつちへなりとも、行きたい

朝比奈云々曲  
がかり

方へ行かうまでよ。▲シテそれはまことか。▲ちいまことぢや。▲シテ眞實か。▲ちい眞實ぢや。  
▲シテ謠 朝比奈腹をするかねてく。熊手、薙鎌、鐵撮棒を持たする中間のなきまよに、  
閻魔王にく、すつしと持たせて朝比奈は、浄土へところ急ぎけれ。

四 暇の袋

三人 シテ主 長袴、小さ刀  
太郎冠者 半袴、上下、腰帶  
をんな 箔小袖ゆばうし、大きなる袋持つ

▲シテ男 罷出でたる者は、この邊の者でござる。某幼馴染の女がござるが、眉目形見苦  
しうて、朝寢を致し、たま〜起きて大茶をたべ、人事をいひ、殊に大酒までたべて、酔  
狂を致し、何とも迷惑に存する。いづぞは去りたい〜と、存するところに、昨日より  
親里へ歸つてござる程に、この暇の状を持たせてやつて、去らうと存する。まづ太郎冠  
者を喚び出し、申し付けう。やい〜太郎冠者、あるかやい。▲冠者はあ。▲シテ居たか。  
▲冠者 お前に居ります。▲シテ 汝喚び出す事、別の事でない。そちも知る通り、女共がわよ  
しうて、何とも堪忍ならぬ。それ故、暇をやるほどに、汝はこの状を持つて行て来い。  
▲冠者 畏つてござるが、さりながら、あれは常のかみ様とは、違ひましてござる。私を

暇の状―離縁状

わくしうて―騒  
がしに同じ語こ  
こは不行儀と見  
るべし

よいとは仰せられますまい。御免されませ。▲シテ いや〜苦しい。ちつとも氣遣せずとも、返事には及ばぬと云うて、置いて来い。▲冠者 さやうではござるが、餘の御使は、何なりとも致しませう。この事においては、御免されませ。▲シテ 扱は汝は、これ程に云ふに、女どもは怖うて、身どもは何とも思はぬか。この上は厭でも應でも遣るが、ていど行くまいか。▲冠者 あゝ参りませう〜。▲シテ 何と、行くか。▲冠者 なかく、参りませう、▲シテ それなら早う行て来い。これを持つて行て、返事に及ばぬと云うて、その儘歸れ。▲冠者 畏つてござる。▲シテ 早う行け。▲冠者 心得ました。やれ〜、迷惑な事を仰せ付けられた。この状を渡したらば、身共を、よいとはおしやるまい。腹を立てらるゝであらう。道行さりながら、主命ぢや。参らずはなるまい。まことに孫子に傳へて、さすまいものは宮仕ぢや。やあ、参る程にこれぢや。ものも案内も。▲女 やあ、今のは太郎冠者が聲ぢや。迎に來たか知らぬ。やあ太郎冠者、遅いと思うて迎に來たか。▲冠者 いや、何も存じませぬ。御狀が参りました。▲女 なう〜、腹立や〜。妾が男めが、

暇の状をおこし居つた。やい、おのれはようこれを持つてうせた。おのれまで一つになつて、憎い奴の。汝掴みつかうか、喰ひ付かうか。腹だちや〜。▲冠者 いや申し〜、まづ、物を云はさせられ。私わたくしは参るまいと申してござれば、行かすは手打にせうと仰せられたによつて、是非ぜひなう持つて参りました。何も存じませぬ。▲女 これはそちがいふ通、知らぬ事もあらう。それなら、そちは先へ歸れ。妾が其所へ行て用がある。それへ行かうと云うて歸れ。▲冠者 いや、御返事に及びませぬ。▲女 いや〜、それでも用がある。行かねばならぬ。先へ行け。▲冠者 心得ました。さればこそ、かうあらうと思つた。まづ歸つてこの通申さう。ござりますか〜。▲シテ 太郎冠者、戻つたか。▲冠者 歸りました。扱も〜、殊の外腹を立てさせられて、はやこれへござります。▲シテ 何しに来るぞ。返事に及ばぬと云はいで。▲冠者 さう申しましたれども、行かねばならぬ用があると、仰せられます。▲女 なう〜、腹だちや〜。藪を蹴出しても、彼のやうな男は、二人や三人は蹴出すれども、騙したか憎い。この袋を持つて行て、致しやうがある。扱も〜、

藪を蹴出しても  
草むらを探し  
ても、所在にい  
くちもある意

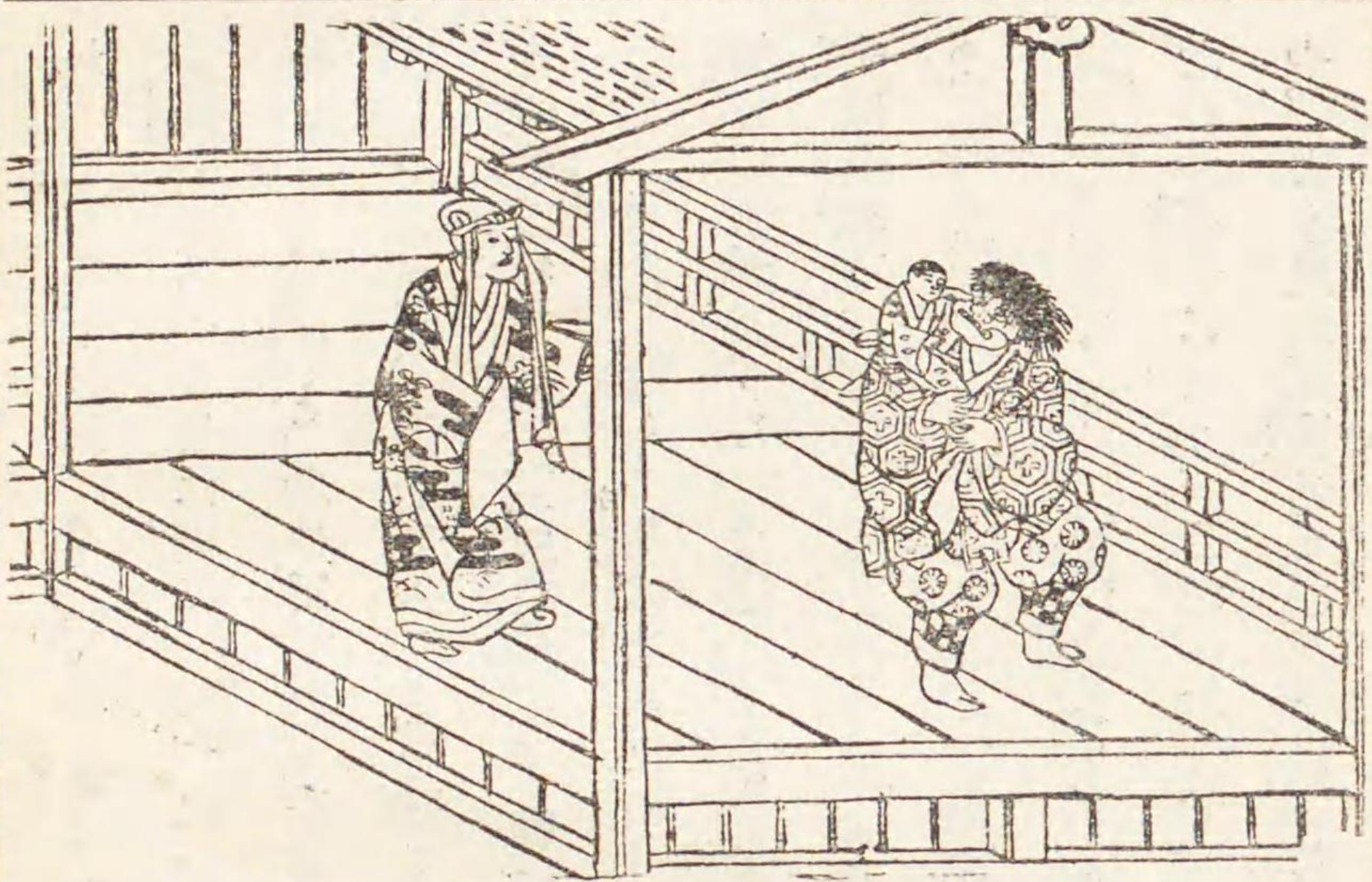
藪を蹴出しても  
草むらを探し  
ても、所在にい  
くちもある意



腹だちやく。身が燃えて腹が立つ。やい、わ男、よう暇の状おこしたなあ。おのれ喰ひつかうか、搦みつかうか。あよ、腹だちやく。▲シテやい其處な奴、男の一旦隙やるに、此所へ何しに來た。あつちへ行け。▲女いかにも、其方に執心で來たでもない。ちと入る道具があつて、取りに來た。▲シテそれは何ぢや。▲女この袋へ入る程の物ぢや。▲シテそれほどの物は、やらう程に、取つて行け。何ぢや。▲女あれぢや。指さし向。▲シテどれぢや。▲女あれ、あれぢや。▲シテどれぢや。▲女おれが欲しい物は、是ぢやわ、被せ、引く。▲シテやれ、これは何とする。目が見えぬわ。首が締る。許せく。▲女何の許せ。どうでも連れて行て、妾がしやうがある。▲シテあよ悲しや。最早去るまい。ゆるせく。

鬼の養子一名  
鬼の繼子

七つさがれば  
午後四時過



五 鬼の養子

二人

シテ鬼  
女

鬼の頭巾、ぶあくの面、厚板箱小袖、ゆばうし、子をいだき出る

▲女妾はこの邊の者でござる。山一つ彼方に、親里がござる。久しう参らぬほどに、今日この子を抱いて、見舞に参りませう。道行久々参らぬが、何事もないか、心許なうござる。やあ参るほどに、此所は、播磨の印南野と申す所でござる。此所は七つさがれば、鬼が出て人を取ると申すが、心許なうござる。早、日も晩じてござる。人でも連れて参らうものを。心許なうござる。▲シテ鬼いで、食はうく。▲女あよ悲しや。なうく、許して下さ

れ。助けて下され。▲鬼いで、食はうく。やい、そこな奴、おのれは七つさがれば、人の通らぬ所へうせた程に、たつた一口に、いで、食はう。▲女あゝ悲しや。助けて下されく。▲鬼何と、助けてくれ。やあ、見ればよい女房ぢや。やい、それなら命を助けてやらうが、己が云ふことを聴くか。▲女何なりとも聴きませう。▲鬼それなら、そちを連れて行て、おれが女房にせう程に來い。▲女それは迷惑でござる。その上私は夫がござる。▲鬼いやく、男はあるまい。おれが女房にせう。▲女なるほど、男がござる。それ故この子がござる。▲鬼それでも、女房にせねばならぬ。どうあつても來い。▲女いやく、夫は無理でござる。なりませぬ。▲鬼それなら、たつた一口にしてくれうぞ。いで、食はう。▲女あゝ悲しや。それなら、どうなりとも致しませう。助けて下され。▲鬼何と合點するか。▲女なかく、合點でござる。さりながら、この子は何とませう。▲鬼その子は、おれが養子にせう。これへおこせ。▲女心得ました。抱かせられ。▲鬼扱もく、好い子ぢや。よう見れば旨さうな。一口にしてやる。わん。▲女あゝ悲しや。その子故にこそ合點

もしました。それならこちへ、その子をおこさしやれ。▲鬼それなら食ふまい。とても事に、この子を肩に載せて、噺子物で行かう程に、そちも噺せ。▲女心得ました。噺ませう。▲鬼鬼の養子を肩に載せて、蓬萊の島へ參らうく。養子をく肩に載せて、島へ參らうく。扱もく、よう見れば、見るほど旨さうな。これは食はねば堪忍がならぬ。一口に食うてやらう。あゝ、わん。女なうく悲しやく。それを食はしてなるものか。おのれがやうな奴は、男には持たぬ。打ちこかしてやつたがよい。その子もこちへおこせ。なうく怖しや。こはやく。▲鬼扱もく、女ぢやと思つて、油斷して打ちこかされた。扱もしなしたりく。やあ、これに笠を置いて行た。せめてこれなりとも取つて行かう。やい、今の女、どちへ行くぞ。どうでも女房にせねばおかぬぞ。やるまいぞ。やるまいぞく。

雙座頭一名不聞座頭

六 雙座頭

三人

座頭 シテつんば 半袴、上下、腰帶、  
主 布頭巾、水衣、下半袴、杖つき  
長袴、小刀さし

▲主 罷出でたる者は、この邊の者でござる。某二三日さる方へ參る。身共の使ふ者は聾でござる。あれ一人では、留守が心許なうござる。それにつき、こよに菊市と申して、出入いたす座頭がござる。これをよびに參り、相留守に頼まうと存ずる。急いで參らう。道行内に居ればようござるが、何とござらうぞ。定めて宿に居るでござらう。やあ、何かと申すうちにこれでござる。ものもう。菊市内に居らるるか。▲きくやあ、表に案内がある。どなたでござる。▲まいや身共ぢや。▲きくやあ、好うこそ御出なされました。只今は何と思召し、御出でござる。▲主 その事ぢや。某二三日他所へ參る。それにつき、身どものみの使ふ者は聾で、何とも心許ない。其方を相留守に頼みたう思つて來た。來てくりやる

まいか。▲きく好うこそ御出なされました。幸今日は隙で居ります。なるほどに參りませう。▲主 それは近頃過分。その義なら、いざ同道致さう。さあくをりやれ。▲きく畏つてござる。慮外ながら、ちと手を引いてくだされ。▲主 心得た。道行なう菊市、この間は久しう見えなんだ。何として見えぬぞ。▲きくさればでござります。方々勤めますにより、隙を得ませいで、御見舞も申しませぬ。▲主 それは一段ぢや。とかく隙のないがよをりやる。やあ早これぢや。まづ奥へ通りやれ。それにゆるりと居やれ。▲きく畏つてござる。これに居りませう。▲主 雙々、太郎冠者々々々々。▲シテ 何ぢや、呼ばしやるか。何でござる。▲主 身共は二三日他所へ行く。よう留守をせい。▲シテ 何と、二三日の内に雨が降らうかとおしやるか。▲主 いやく、さうではない。二三日他所へ行く。よう留守をせいと云ふ事ぢや。▲シテ 聞きました。二三日他所へござる。よう留守をせい。▲主 いかにもさうぢや。又あれに菊市も來て居る程に、言ひ合つて、よう留守をせい。▲シテ 菊市の事はお氣遣なされますな。大事に致しませう。▲主 いや、さうではない。菊市も來て居

る程に、言ひ合せて、よう留守をせいと云ふ事ぢや。▲シテ 何と菊市が来て居ますか。▲主  
 なかく。▲シテ いかにも、言ひ合せて、よう留守を致しませう。▲主 それく、是へ出  
 よ。▲シテ 心得ました。▲主 菊市、最早身共は行く程に、聾もこれに居る、言ひ合せて、よ  
 う留守をしてたもれ。▲きく 畏つてござる。やがて御歸りなされませ。▲主 やがて歸らう  
 ぞ。▲シテ 扱もく、あの菊市が、目も見えぬなりで、頼まるればとて、留守に来るものか。  
 若し盗人が這入つたら、何とせうと思つて来た知らぬ。▲きく やあ、聾が、身どもが事を  
 云ふと見えた。聾々、太郎冠者。▲シテ やあ菊市か。よう来た。▲きく 何と此中は久しう  
 逢はぬが、息災さうな。▲シテ を、此中はよい天気ぢや。▲きく いや、さうではない。此中  
 は久しう逢はぬと云ふ事ぢや。▲シテ さればく、久しうをりやる。今日はよう留守にを  
 りやつた。▲きく その事ぢや。頼うだ人の、二三日他所へゆくとおしやつたほどに、留守  
 に来た。言ひ合せて、よう留守をせうぞ。▲シテ これは聞いた。いかにも言ひ合せて、よう  
 留守をせうぞ。▲きく さりながら、若し盗人が這入つたら、そちは目が見えても耳が聞え

精一 根氣

ず、身共は、耳は聞えても目は見えぬ、何としたものであらう。▲シテ 何ぢや。其方は目  
 が見ゆると云ふか。▲きく 扱も氣の毒な。さうではない。盗人が這入つたらば、身共は、  
 耳が聞えても目が見えぬが、何とせうと云ふこと。▲シテ 聞いた。まことにそちが云ふ通  
 ぢや。何とせうなあ。▲きく 身共がつくく思案するに、若し盗人が這入つたら、身共が  
 耳で聞きつけて、そちが膝を突かう程に、それを相圖に防げ。▲シテ これは聞いた。若し  
 盗人が這入つたらば、その相圖に、身共が膝を突かうと云ふか。▲きく なかく、さうぢ  
 や。▲シテ これは一段よからう。若し盗人が這入つたら膝を突け。身共が防がうぞ。▲きく  
 心得たく。あゝ扱もく、聾に物云へば、精も心も盡きる事ぢや。▲シテ これは如何な  
 こと。座頭と云ふ者は、智惠の深いものぢや。よい思案を思ひ付けた。▲きく やあ、いか  
 う淋しい。ちと聾を騙つて遊ばう。そりやく、盗人よく。▲シテ 心得た。やれ盗人が  
 這入つたぞ。出合へく。やるまいぞ。▲きく 笑つて、扱もく可笑しい事かな。よう盗  
 人が居やうぞ。これはよい慰ぢや。面白い事かな。▲シテ やい菊市、盗人は居ぬわ。▲きく